

# 「不死の谷」

大岡俊彦

(400字詰め原稿用紙換算 372枚)

ちん。

電子レンジから冷凍チャーハンを出した男は、直接袋にスプーンを突っ込んで食べはじめた。強い蒸留酒のロング缶を開け、胃を焼いて現実を忘れようとする。

不味い。冷凍チャーハンってどうしてこんなにも不味いのか。いや、チャーハンは冷凍ジャンルの中では優秀な方だ。しかしチャーハンジャンルでは、冷凍チャーハンは最低だ。本物の中華料理屋の輝くような黄金に比べれば、こんなもの奴隷船の配給だろう。——いや、だったら本物の店に直接食いに行けばいいじゃないか。それが出来ないから困っているのである。

男——小林<sup>こはやし</sup>は、アパートの部屋に引きこもって三年になる。勤めていた会社を辞め、退職金で細々と暮らす生活。夜目覚め、朝眠る生活になったから、リアル店舗のやっている時間には行けない。そもそも外の空気なんて吸いたくない。あれは瘴気だ。俺は鉾山で毒ガスを吸うカナリヤなのだ。

貯金が減っていくのが恐怖で、だから深夜のコンビニで働いてもみた。「俺になんでも聞けよ。この仕事長いぜ」とタメ口で話す年下と、逆に全くしゃべらないベトナム人が嫌で、この六畳に戻ってきてしまった。

不味い。ぼそぼそとした米粒に、三色野菜と謎肉。安い油のべとつきが、小林の口の周りを汚していく。小林の外界との関わりは、七年落ちのPCとスマホしかなく、その窓からしか彼は外を見ていない。

【天狗面の少年が、妖怪退治!?】なる話題<sup>スレッド</sup>を見て彼は毒づいた。

「昭和のオカルトかよ。ダセエ」

「朱<sup>あか</sup>い天狗の面をつけた少年が、夜な夜な何処かで妖怪を退治している」という噂は、最近そこかしこで見かける都市伝説だ。そういえば前にも見たネタだ。噂は何度もコピーされ、ネットの海に波のように打ち付けられる。今夜も少年は天狗の「火の剣」で妖怪を斬り……

「火の剣? 天狗は風属性だろ。調べが足りなさすぎる。何もかも嘘臭え」

小林はふと、自分が獣のような匂いを放っていることに気づいた。

振り向いて冷蔵庫に二本目の缶を取ろうと、自分の後頭部の居た空間に鼻を突っこんだ瞬間だ。

妖怪は獣の匂いがするのだという。お、新しい設定が都市伝説に加わっているぞ、と小林は目を留めた。妖怪は凡人に見えることはない。純粋な赤子や、修行を積んだ高德僧に

は見えることもある。都会の片隅で何も無い空間に、急に獣のような匂いが漂ってきたら、それは妖怪とすれ違った証拠かもしれないのだという。

「馬鹿いえ」

小林は突っ込んだ。小林は何もかも否定する。それは自分の知性が皆より優れていると証明したいからかも知れない。

「大型犬のしょんべんが乾いて、それがもう一回濡れたただけだろ。あるいはネズミの死骸の跡だな」

では何か？ この俺の放っている臭気は、しょんべんか死体か？

気分が悪くなった小林は、別の話題を探した。

【人工知能を用いた『永遠の命』技術、無料で一人だけ『永遠の命』が体験できる！】

「はあ？」

【各界セレブが十億円の申し込みをするエターナル・プロジェクト、その夢が一人だけ無料で当たるキャンペーン！】

そのプロジェクトの概要は、以下のようなものであった。

まず脳をまるごとスキャンする。世界に張り巡らされたクラウドサーバ上に、そのデータを上げる。思考を司る思考野、言語野は一つのサーバに収め、関連する領域を世界中に分散する。そうすると、その「人工知能」が提供者とまるで同じ脳のはたらきを始める。つまり、「脳を人工知能にアップロードする」ことに成功したというのだ。

「……それじゃ、人格がふたつに増えるだけじゃねえか？」

小林は画面をスクロールさせて続きを見た。

エターナル社の新技術はさらに、人工知能のデータを脳にダウンロードする方法をも開発したのだと言う。

「マジかよ」

脳の「中身」は、神経細胞同士の接合である。電気を通す神経細胞同士が結合して、人は記憶や思考や意識を持つが、その機序解明は完全には進んでいない。しかしナノ単位でMRIを稼働させ、神経細胞間に強い磁場を与え、帯電するようにすれば、思うところに結合を作ることが可能になる。逆電流を流せば結合を切れる。つまり、人工知能の脳マップが、それがどういいう仕組みで動いているか解明する必要なく、それを脳内に書き込み、コピーすることが可能になったというのである。これまで理論上は可能であったが、洗脳や人格破壊、死を恐れない兵士の製造などに使われる危険があり、倫理上自粛していたが、この研究を続けるにあたってスポンサーが必要になり……

「うさん臭え」

自分の「妖怪臭」と同じだぜ。小林は話半分で先を読み進む。

つまり、脳から人工知能にアップロード、そのデータを脳にダウンロードすることが、「永遠の命」を実現するというのだ。

「どうやって？」

人体冷凍保存——SFでは冷凍睡眠としてお馴染みだ——人間を冷凍させて眠らせる方法によって。液体窒素でマイナス二百度以下に保つことによって。アルコー延命財団（アメリカ）では、実際に百四十九名が、温度伝導性のよいアルミに包まれたまま、冷凍保存者となっているという。その脳スキャンデータは公開されており、彼らの記憶や人格は失われていない。

「エタナール・プロジェクト「永遠の命」の概要はこうだ。脳を人工知能にアップロードし、「本体」は冷凍保存する。その間、その人は人工知能として生きる。肉体はないが、ネットに繋がれているから、あらゆる情報の取得や通信は可能。つまりは巨大なネット喫茶にいるようなものだ。時間が経てば、「経験」により記憶や人格が少し異なってくるだろう。本体が目覚めたとき、その人工知能を脳にアップロードして「更新」することも出来るし、その人工知能の映像記録や対話を通じて、眠っている間にしたこと「引き継ぎ」をすることも出来る。いずれにせよ、本体が目覚め、引き継ぎが終われば人工知能は破棄され、「その人が一人である」は保持される。

「なるほど。……つまり、寝てる間は人工知能自我になれて、本体はいつまでも眠っている、ということか」

何年眠れる？ 一年？ 三年？ 十年？ 百年？

「まるで未来への自由タイムスリップみたいなもんだな。眠りっ放しの冷凍睡眠と違って、自分の意志で起きていいんだからな」

眠れる回数、起きられる回数は無制限、肉体の寿命が来るまでは、未来へのタイムスリップを繰り返して、実質「永遠」に生きられる——それが「エタナール・プロジェクト永遠の命」であった。

永遠に生きたい金持ちが、冷凍睡眠の施設、クラウド人工知能サーバの維持費、及び記憶読み取り装置、書き込み装置に、一人十億円を払うという。

【それが今なら！ 抽選で一名様を無料体験にご招待！】

小林はその文字に釘付けになった。

永遠に生きられるとしたら？

今のこの人生に未練なんてない。会社には行きたくねえ。コンビニの年下のタメ口もどうでもいい。俺より弱そうな癖に。しかもこのアパートの維持費は永遠にかかる。死ぬまで。

小林が【申し込む】のボタンを押すまでに、それほど時間はかからなかった。

俺は永遠の命を手に入れる。別に永遠の命でなくてもいいさ。ちょっと未来を覗いてみたいだけなんだ。

獣のような布団の匂いは、本当に妖怪の匂いかも知れない。妖怪引きこもり。妖怪誰からも忘れられた男。

俺を誰も知らない、未来に行ってみよう。

まさか本当に当選するなんて、思ってもみなかったのだ。

封筒に書かれた「エターナル・プロジェクト永遠の命」のオレンジのロゴを見て、小林はしばらく何も思い出せなかった。

「マジで？」

——永遠の命に最終的に必要なものをご準備ください。身分証明証。戸籍謄本。印鑑証明書つきの実印。賃貸契約の解約書。医師による健康診断書。など、など、など。

「……マジで？」

本当に「永遠の眠り」につく為に要りそうなものばかりで、小林は現実に戻ってきた。

「まずは体力的にクライオニクス人体冷凍保存に耐えるかどうか、三日間眠るテストをします。脳アップロードの転送のテストも兼ねます。つきましては、以下の住所までお越し下さい」と文面にあった。今後のスケジュールとして、第一次テスト（三日間）、第二次テスト（一か月）を経て、本格的な「眠り」につくのだという。このプロジェクトを推進しているのはアメリカのエターナル社であるが、その日本代理店、エターナルジャパンからの手紙であった。手紙、そう、このネットの時代に、証拠として残り易い封書をエターナルジャパンは選んでいるのである。呼び出された場所は、茨城県筑波の学園都市内。

「……マジ、みたいだな」

SF映画に出てくるような、真っ白で無菌室のような施設とは違い、実際のその施設は、生きている工場のリアリテイがあった。ガムテープでラベルの貼られた荷物が廊下に積み、ビニールシートは汚れ、軽トラがコード剥き出しの機材を運び、移動用の自転車は沢山停めてあり、清掃業者の洗剤の匂いもする。

高校の頃、小林はプレス印刷工場のバイトもしたことがあったから、ここは「工場に来た」と思えるリアリテイがあった。SFじゃないんだ。この「工場」で、俺は冷凍庫に入られた解体マグロのようになるのだろうか。

「まずは小林様には、三日間のチルド・スリープ低温冷蔵睡眠のテストをしていただきます」

案内の、ごとう後藤と名乗った紳士が言った。

「チルド？」

「はい。低温チルド冷蔵庫なんて聞いたことがございますでしょう。四度くらいの凍る前の低温に保つんです。お肉を保存するには、チルドの方がおいしいといえます。丁度熟成が進むのですね。もっとも熟成が進んでしまつては、『永遠の命』ではありませんが」

二人は長い廊下を歩いていった。後藤氏の高そうなチャコールのスーツが、窓から差し込

んだ陽に光っていた。

「テストだから、三日間の熟成と」

「左様です。その前に、小林様の脳をスキャンさせて頂いて、弊社のサーバに小林様の『人格』を転送させて頂きます。郵送しました契約書に、実印をここで押して頂きます」

「なんでそんな一々面倒なことを？」

「ご同意の映像を撮る為です。本体が眠っている間は、サーバの人工知能こそが小林様です。『人格の譲渡の同意』というのは世界に類例がありません。のちのち問題がないように、契約関係を明らかにしておきたいのです」

「成程」

「ここまでで、ご質問はありますか？」

「他に眠るであろうセレブとやらは？」

「そのほかの方々は、残念ながらアメリカやドバイなどの、外国の方々なんですよ。日本人は一人もいません」

「それが何で俺に？」

「正直な話、日本人でも『永遠の命』が欲しい人がいらっしやると見て、私どもは日本に支社を構えたのです。機材がある筑波さんに間借りして、無料キャンペーンまで張って。残念ながら、半年間キャンペーンを継続したのですが、契約はゼロでして」

「意外と景気悪いんだなあ」

「でも外国には、既に眠った方々もおります。『彼ら』とは話せますよ？」

「『彼ら』ってのは、つまりデジタル化された人工知能の方とだな？」

「左様です。ネットに繋がっておりますので、グーグル翻訳レベルで宜しければ、リアルタイムチャットも可能です。話されますか？」

「グーグル翻訳じゃ、いいや」

通された部屋には、銀色の巨大なマシンが鎮座していた。工場然としたコンクリの床に、太いボルトで固定されている。何本もの太いカラフルなケーブルが繋がっていて、これ自体が工場の中のひとつの内臓のように見えた。

「医療用のMRIの大型版のようなものです。脳をナノ単位でスキャンし、この時点での脳の神経細胞シナプスの結合パターンをすべて記録できます」

人間の脳の持つ情報量は、一ペタバイト（1千テラバイト）くらいだそうだ。映画一本が二ギガバイトくらいに圧縮される時代だ。映画五十万本の記憶か。そう計算しても小林には想像できなかった。プレミアムクラウドサービスが一テラくらいだから、千人分契約すれば、一人の人格をアップロード可能なのか。

「中間補完法を用いないので、弊社では十ペタバイトのクラウドをご用意させて頂いております」

人間ドックに入れられる時のような検査着を着させられ、睡眠薬を渡された。脳が活発

に動くとスキャンデータがぶれる為、睡眠中のものをスキャンするという。

「夢見てたらどうすんだよ」

「レム睡眠とノンレム睡眠では活性化している所が違いますので、静かな所だけスキャンします」

「成程。しかし脳の部分を結合して組み立てるって、プラモみたいだな」

「開発者もそう考えたのでしょうか。このマシンの名をヴィクトルと申します」  
「？」

「『フランケンシュタイン』は、あの怪物の名だと皆さん誤解されております。フランケンシュタインは人造人間を造った博士の名、人造人間の方がヴィクトル」

「へえ。……しかしそれで人工知能に『俺』が再現できるのかい？」

「そのテストでございます」

「たしかに」

「お眠りになりましたら、明朝には小林様の『意識』がネット上に現れます。視覚も聴覚もございませんが、『心の声』のようにネットの情報が届くそうです。私どものサーバ室にも直接通信出来るホットラインがありますので、なにかありましたら呼び出して下さい。三日後の七時にはモーニングコールを致します」

「ホテルかよ」

「実際眠る必要がなくなるので、小林様は二十四時間覚醒することになります。今回は計七十二時間のご滞在です。眠ることも可能ですけど、食事やお酒は無理ですね」

「そりゃそうだ」

「それでもう一つ大事なことが」

「？」

「小林様の肉体が三日後に目覚めますが、この時人工知能のデータを、小林様に『戻す』ダウンロード実験は、今回は致しません。今回は、『眠る』ことに肉体負担がどれくらいかかるかのテストです。それ以降は第二回のテストとなります」

「分かった。……ん？」

「どうなされました？」

「人工知能の方の〈俺〉はどうなの？」

「小林様の肉体が起きましたら、引き継ぎ後、停止します」

「停止？」

小林は想像した。停止するという事は……

「〈俺〉は死ぬのか」

「人工知能が停止するだけです」

しかし「俺が停止させられる」のは確かだ。

「三日間の『経験』をあとで見ることが可能です。それによって小林様の人格は、『ひと

つづき』に保たれるのです」

「ああ……成程」

一旦は納得したものの、自分が二人になってしまおうのではないかと小林には疑念が湧いた。いや、眠っているから関係ないのか。寝て起きたとき、俺は寝る前の俺とはたして同一だろうか？ もし俺の肉体と精神が、寝てる間に火星の基地にコピーされていたら、火星の俺は「俺のつづき」だろうか？

しかし恐怖を、小林の好奇心が上回った。

「この三日間の感じが……永遠に続く意識の体験版、ということだな」

日焼けサロンのような、酸素カプセルのような、棺桶のようなポッドに小林は入れられ、生暖かいぬるぬるとした液体に入れられてその中で浮いた。心拍数を測るコードが小林に繋がれ、医療器具のようなものが連動している。医師と看護婦が、三日間常駐するという。小林の意識は、冷たい水と飲んだ睡眠薬によって、いよいよ混濁してきた。

暗く、夢のように捉えどころのないような空間を漂うのだろう、と小林は想像していた。ところが、まるで夢を見なかった日のように、小林はポッドが開いた光景を突然目にした。

——あれ？　そうか。俺は三日間、眠っていて。

眠る前と起きた後がつながっている。胸や手についた吸盤のような奴は、外していいんだよな。風呂の中で眠ったような感覚だ。ぬるぬるとした温かい液体が、全身にまわりついている。

目は霞む。耳も良く聞こえない。そうだ、俺はまだ目覚めている最中なのか。看護婦か、医者か、さっきの後藤さんが、「おはようございます」と言ってくれるのだろう。朝食はクワッサンとコーヒーって言うておいたっけ。旅館みたいな和食のほうが良かったかな。しかしそこに居たのは、二人の刑事であった。

——刑事？　……刑事ってのは……俺トレンチコートでそう思ったのか？　ていうか、ほんとに刑事ってトレンチコート着るものなのか？

男の一人が言った。

「小林誠さんですね。聞こえますか？」

いや、聞こえてはいる。しかしプールから上がった時のように聴覚が遠い。ごぼり、ごぼりと泡の音が混ざり続けている。声を出そうにも、口が開けられない。瞬きを数回して

みる。

「オイ、瞬きをしたぞ？ 意識はあるんじゃないか？」

男はもう一人の刑事に言い、再びこちらを覗き込み、大声で言った。

「小林誠さん。あなたの身柄を重要参考人として拘束します。聞こえていますか？」

——なんだって？ クロワッサンとコーヒーは、鮭定食と赤だしに変更だって？

「信じられないかもしれませんが、あなたは殺人事件の重要参考人なんですよ」

ごぼり。ごぼり。その音が自分の呼吸の度にチューブから噴き出ているのだと、ようやく感触で分かった。

これは夢か？ 俺はまだ夢の中にいるのか？

3

「人工知能が……殺人事件を起こしたって？」

刑事たちの不明瞭な言葉を聞きながら、小林の意識は混濁し、遠のいていった。〈俺〉という人工知能が、殺人……？

三日間の低温睡眠<sup>ナルドスリープ</sup>の肉体への負担は予想以上に大きく、小林は面会謝絶のまま入院措置となった。まだあの液体の中にいるような感覚だった。暗闇、暖かい液体の中、ごぼりごぼりという泡の音。子宮に帰って生まれ変わったとでもいうのか。いや、子宮にいた頃の記憶など小林にはないのだが。

自力で歩き、食事し、睡眠を取れるようになり、小林の身柄はいよいよ筑波警察に引き渡された。パトカーで東京まで連れていくという。

「どうせ東京のご自宅まで帰宅されるんでしょう？ 月島警察でお話を聞かせてもらったら、そのあとお送りしますよ。『犯人護送』じゃないですけどね。ははは」

若い警官がパトカーを運転しながら笑っている。

「月島警察」と目的の地を聞き、小林は〈俺〉が誰を殺したか確信した。

「殺されたのは……宇童祐也<sup>うどうゆうや</sup>ですね？」

尋問を刑事ドラマのように受けるのかと小林は身構えていたが、通された部屋は殺風景な会議室だった。ただし隅で記録官がこの会話を速記しているようだ。この部屋で起きることは「証言」になると小林は理解した。

「察しがいいじゃないか」

戸田刑事、と名乗った精悍な顔つきの男が言った。フルネームは戸田剣。「鬼剣」と異名を取る、現場叩き上げの刑事である。不摂生がたたってぶよぶよになった肌の白い小林とは対照的に、現場焼けした鉄火肌だ。ぎろりと睨むと鬼瓦のような顔になった。これで多くの善人をびびらせてきたのだらう。呑まれるものかと小林は思った。

「……筑波からここに来るまで、考えていました。『俺』が月島界限で殺すとしたら、宇童氏しかいないと」

「宇童……『氏』とは不思議な言い方だね。あなたの元上司だと聞いたが？」

「さん付けするほど尊敬できた男ではなかった。……僕なりに礼儀を払ったつもりです」  
冷静になると努めたが、その気持ちに比例して表情が崩れてしまう。宇童のことを考えると、心がざわついてしょうがない。

「しかし仮に恨みがあったとしても、実行しなければ罪にはならない。それが現代の法の考え方ですよね？」

「……その通り。あなたは実行犯ではない。手を下したのは、エターナル社の人工智能だ。それはアクセスログの解析結果から明らかとなった」

事件のあらましはこうである。

月島にある小さな商社、富山社の六階給湯室、十五時。給湯室の電気は、昨今の節電の影響で消されていた。明り取りの窓のない給湯室は、薄暗く中がよく見えない状況になっている。しかし皆それに慣れていたので、わざわざ電気を点けずに珈琲を淹れたり、弁当をチンしたりは日常茶飯事であったという。

だから、異変があったことに気づきにくい状況にあった。床が水で濡れていたことにだ。「宇童氏は十五時きっかりに珈琲を淹れに席を立つ。この習慣は、そのフロアにいた者や部下、元部下なら誰でも知っていることだ」

戸田は説明を続けた。

漏電があった。宇童氏はその水を踏み、感電死したという。心臓疾患を患っていることも、身近な人物であれば知っていたことだ。

何故水が床に撒かれたのか。何故漏電が起きたのか。

「人工智能って単なるネットワークでしょう？ 『実行犯』が可能なんですか？」

「それが可能なのさ。現場にN社製の自動食洗器があったことはご存じかね？」

「会社を辞める前に『自腹で買ってやるぜ』と聞いたような気はしますが、実物は見たことありません。おそらく辞めた後に来たのかと」

「小林さんの退社日は三月三十一日、食洗器の納品日は翌五日。あなたは現物を見ていないだらうね」

「ど？」

「このN社の自動食洗器は、流行りのネット対応家電だった。ネットに接続し、遠隔でコ

ントロール出来るというやつさ。そんなもの要るのか、という機能だが、N社は全製品ネット対応をウリにしたからしょうがない。だがそのネット脆弱性が、今頃になって指摘されていた」

「といたしますと？」

「ハッキング出来るということさ。クラッキング、って言うんだっけ。まあどっちでもいいや」

「ああ、見た事があります。『何者かにハッキングされ、第三者に皿を洗われてしまう可能性！』ってネタを」

「まさにそれだよ」

戸田はPCの中のN社食洗器を示した。

「ハッキング、大量に水を流し続ける、蓋をオープンさせ水漏らし、オーバーロードで漏電状態をつくる。十四時五十五分から、十五時五分の間」

「……たしかに、肉体がなくても実行できる」

「それが人工知能のしたことさ」

戸田はひと息つき、立ち上がって窓の外を眺めた。富山社トミヤマの入っているビルは、大きなビルに隠れてここからは見えないだろう。それがわかるくらいには小林は土地勘がある。おそらく戸田刑事は、その現場を頭の中で見ているのだ。そうか、あの薄暗い給湯室に彼は入ったんだな。会議室とはいえ、窓に鉄格子がはまっているのが小林には気になった。

「……で？ 僕が容疑者であると？」

小林は本題に切り込む。戸田は苦々しい顔で振り向いた。

「勿論、今日の前にいるあなた——小林誠さんは容疑者でも犯人でもない。これは我々が保証する。やったのは人工知能だ。アクセス記録で証明できる。ハッキング信号は、エターナル社のサーバからなんだ。記録映像も見た。あなたは三日間一回もポッドから出ていない。だから私たちはあなたを『重要参考人』と呼ぶ」

「僕に何を聞きたいんですか？ 机を派手に叩いて、『バン！ なんで殺ったんだ！』ですか」

「まさにそうだ。もしエターナル社が言うように、あなたの人格が正確にサーバに転送されていれば、人工知能を持った殺意は、あなたの殺意ということになる」

「……それはおかしな話だ」

小林は考え、慎重に発言する。

「この野郎、殺してやるッ！ そう思っても実行しないのが大人というものでしょう？

人が何を思うかに罪はない。どんなに猥褻なことを考えても罪には問われない。猥褻なモノを開陳したり、違法な行為が罰の対象になる。誰だって殺してえと思っ輩はいます。ただ実行はしない。明日になったら忘れるだけだ。だからこの世界は概ね平和に保たれているんだ」

「おっしやる通り」

戸田も慎重に言葉を選ぶ。記録されているという緊張感が伝わってくる。

「つまりこれは、『誰が犯人なんだ？』という事件なんですよ」

戸田は窓の外を見るのをやめ、再び小林の向いに座った。

「殺意がないなら過失致死、あるいは単なる事故。しかしこの件には殺意がある。次に計画性。人工知能は富山社のネットをハックしようとしたり、監視カメラに侵入した記録がある。人工知能の野郎、どうも何回か宇童氏が同じ習慣——すなわち十五時かっきりに珈琲を淹れに来るか、そして給湯室の電気は消えたままか、監視カメラで確認していたんだ。つまりこれは、計画殺人だ」

「状況を聞く限りは、たしかに」

「人が一人死んでいる。計画がある。人だったら話は簡単だ。逮捕、裁判、有罪。しかし相手は機械だ。車が人を轢いたら、それは車の責任か、人か？ 人だよな。車メーカーは捕まらない。簡単だ。しかし今回は『中の人』はいないんだ。『人のコピー』なんだ」

戸田は苛々して煙草を出そうとしたが引っ込めた。この会議室は禁煙なのだ。

「いつもなら楽勝だ。『ドン！ お前がやったんだな！』で立件だ」

「人工知能にそうすればいいじゃないですか」

「ふん。明日その予定だよ。とにかく小林誠という人の中に、『恨み』という感情が存在した、と事実関係を確認したまでき。いや、有難う。もう解散だ。あなたは容疑者ではないから、拘束はされない。ただ重要参考人として、法廷で証言はして頂く」

案外あっさり終わるんだな、と小林は内心ほっとした。

「もし僕が」

帰り際、小林は振り返って戸田刑事に訊いた。

「全く彼に恨みなんてありませんでした、って言ったらどうするつもりでした？」

「多分帰さねえな。そりゃ嘘をついてるってことだからな。アンタが会社で宇童氏にどういう扱いをされて退社したのか、こっちだって調べてるんだぜ」

「それって……会社の人たちが『重要参考人』として尋問されたと」

「最初は現場に犯人がいると思うだろ。だから周囲からしらみつぶしに潰していく。それが捜査だ。彼らの話を総合するに、宇童氏には殺されるだけの理由はあった。アンタより殺意を明確にした奴もいたぜ？ 死んでせいせいしたってな。人工知能の天誅だって言った奴もいた」

もし俺が〈俺〉だったら。

小林は想像する。

三日後停止されることが分かっている、本体が目覚めてそっちに〈小林〉が譲渡されることが分かっていたら。そして宇童を殺せる手段が分かっていたら。

——間違いなくやるだろう。チャンスだ。罪に問われるのは機械だ。小林じゃない。だっ

て宇童は、昔からあんなことをしていたんだぜ？

4

「人工知能殺人事件」と扇情的な赤の文字を腕章にしたためた、テレビのレポーターが裁判所の前に来ていた。傍聴に来た人達から、今回の裁判の興味、争点についてインタビューしていく。

ワイドショーの生放送スタジオでは、司会と論説委員が対峙する。

「人工知能による初の殺人事件！ 第一回公判です！ 争点になっているのは、『誰が犯人か』ということですよ！ その殺意は『誰の』ものか？ 責任は誰が取るべきなのか？ これが明らかにならないと、誰も罰せられないという不幸な結末になることになります。どう思われますか？」

「そうですね。先日『自動運転車』による痛ましい死亡事故がありました。自動運転車が、街道を横断してきた人を跳ねてしまった事件です。識者団体による統一見解として、『責任は車ではなく、運転者』という第一次結論がはっきりと出されました。これは今後の指針となると考えます」

「ということは、中の人、『重要参考人』小林氏の罪である？」

「それもおかしな話ですよ。小林さんは『運転者』じゃない。眠っていただけだ」

「でも件の自動運転車の事故では、たしか運転者は居眠りをしていた」

「それとこれとは話が違います。自動運転車は事故を予防することが義務付けられている。注意義務違反による過失致死です。しかし今回は、自分の預かり知らぬ所による『車』の暴走だ」

「カギになるのは、小林氏が眠る前に『人格譲渡』という前代未聞の契約書に判を押したことですよね？」

「しかしそんなものは無効な、誤った契約であると、小林氏の弁護団は主張するでしょう。いまだかつて人権が他人に譲渡されたことはない。そんなの奴隷時代に逆戻りだと。一方、エターナル社は契約は有効と主張するでしょう。事前に封書で内容の通知もしている。人工知能は車ではなく人である。人である以上、本人——小林氏が責任を負うべきであると」「今後の裁判の流れはどのようになりますか？」

「……人類が初めて迎える人工知能裁判になるでしょう。これが軍事ロボットなら殺人は正義ですが、いや、今政治的な発言は控えておきます。エターナル社の人工知能は人か？ が、焦点となりますね」

「しかし素人質問になりますか……」

「……どうぞ？」

「『それが人である』と、どうやって証明するんです？」

解説者は沈黙し、司会者のバカな振りをした鋭い質問に答えた。

「……困難だと考えます。エターナル社は、別の論理を用意しているのかもしれない」

「ありがとうございます。現場の森チャン！ 傍聴者たちの予想は集計できたのかな！」

二十歳の美人レポーター、森チャンは元気に答えた。

「現場の予想です！ 小林氏が有罪と出ました！」

「は？ 何でだよ！ 今の解説聞いてなかったのかよ！」

「『闘う人権弁護士』朝香陽デシ」あさかひなた

小林への弁護を申し出たのは、朝香と名乗るおじいちゃん弁護士だった。たくさんの弁護士を引き連れて弁護団をつくったが、金は一切取らないという。語尾がデシになるのは、歯が悪いのかどこかの訛りか。

「そもそもデシね、人工知能に人権を与えるのか、ちゅう話よ」と朝香は初対面から演説をぶった。

「人工知能は人じゃない。なのに世間は人工知能＝小林誠にしようとしている節がある。それに我慢ならずここまで来たのデシ。人工知能が人なら、基本的人権を与える？ 参政権は？ 人工知能同士が結婚して子供を産んだら、戸籍やマイナンバーを与えると？ ゲイやレズビアンのように、人と人工知能の結婚を認める？ ナンセンスデシ！」

語尾はデシだが論旨はまともで、それを理解した小林は「よろしくお願いします」と頭を下げた。

世間が注目する裁判となった。「誰が」殺したのか？ 小林にはアリバイがある。人工知能が実行した証拠がある。小林は重要参考人として呼ばれ、人工知能も喚問されることとなった。もっとも、筑波にあるサーバー本体を東京まで持ってこれない為、回線を裁判所内に引き、ノートPC上で接続するという。前代未聞のPC喚問だ。裁判のプライバシーが漏れてはならない。セキュリティ万全の暗号化回線の為に、裁判の開始は二週間遅れた。小林は「被告」ではない。重要参考人である。被告は人工知能であるべきかについても議論があった。エターナルジャパンの代表、後藤氏が被告と便宜上決まった。そもそもこの訴えは、殺害された宇童氏の遺族、妻の果津氏からであった。彼女の望みは、死んだ夫の賠償金である。それを誰が払うのが争点だが、それは誰の罪かという、より大きな問題を解かなくてはならない。

重厚な造りの木の椅子と手すり。ドラマのような法廷劇だなと小林は思った。反対側の席に、後藤氏が瀟洒なスーツを着て、背筋をまっすぐにして座っている。ネクタイはスカイブルー。深い赤のネクタイ（これは弁護団の指示である。主役に見えるべきだという指示だ）の小林とは対照的に、知性を感じさせた。

あの低温睡眠装置ナルドスリープボットで別れて以来の再会であった。どれくらい前のことだろう。四週間し

か経っていないのに、何年も前の出来事のように小林には思える。

後藤氏は目を合わさなかった。「敵」なのだろうか。

「では小林誠さん」

「はい」

「これから発言する内容に嘘偽りが含まれないようにお願いします。黙秘権はありますが、嘘は偽証に問われます」

「わかりました」

ここまでは弁護士との練習通りだ。

「小林さんは被告ではありませんが、真ん中の席に立ってください」

「はい」

もういいよ。一々「犯人じゃない」断りは。心の中では、殺人だと認めたら裁判はすぐ終わるのに、とか思っているんだろ？ 検察サイドが話を始める。

「殺害された宇童祐也氏。確認しますが、彼はあなたの元上司でしたかね？」

「はい。僕が入社五年目に宇童部に配属されました。退職するまで三年間、彼の部下の人でした」

「配属は上の指示？ それとも……」

「僕の意志です」

「？ 社内の人間なら、宇童部の悪評『部下潰し』を知らない筈はない」

「もちろん知ってましたよ。それなりに体力自慢でしたからね。スラム街を救う、ヒーローのつもりでした」

「裁判長。ここに当時の小林さんの勤務記録があります。証拠1として提出します」

紙焼きした勤怠記録。ああ懐かしいなあと小林は思った。あれに振り回された生活だった。

「残業時間は百五十を下回ったことがありません。労働基準法にぎりぎりですが、不自然な時間帯が『手空き時間』と書かれています。改ざん用の手口です。当時の部下たちの証言も取りました。宇童氏が労基に引つかからないよう、虚偽の勤務時間を申告させていたようです。実態は月二百以上の時もありました」

「三百を超えたこともありますよ」

小林は冷淡に言った。

「……有難うございます。貴重な証言だ。つまり宇童部は、いわゆる大変ブラックな部署であったといえるでしょう」

検事は問を取り、皆の注目を集めた。

「誰もが宇童氏を殺したいと思っていて。宇童部はそういう場所でした」

ツカツカと小林の前に歩み寄り、尋ねた。

「『小林が殺らなければ俺がやっていたかもしれない』。そう言う同僚の方もいるくらいです。宇童部の人員定着率は恐ろしく低い。あなたの退社理由は、宇童氏の仕打ちに耐えかねて、ですか？」

「はい」

「恨みはあった？」

「ないと言えば嘘になる。はい」

「異議アリ！ それは誘導尋問デシ！」

朝香弁護士が異議を申し立てた。小林が遮る。

「殺意はあったか、と聞きたいんでしょう？ 刑事さんにも喋りましたよ。記録も残ってるでしょ？ 出来るなら殺したいとね。でも実際に実行しなければ犯罪ではない。思うだけでは罪ではないでしょうとも」

「たしかに。思うだけで罪になるなら、本を読んではいけないことになる。いや失敬。僕は罪深い本ばかり読んでいたので」

場の笑いを取ろうとした検事は小林を見たが、逆に会場は凍り付いていることに気付いた。咳払いで間を取る。

「小林氏にフェアじゃないので、そろそろネタバラシをします。実はこの問答、『二回目』なのです」

「は？」

「申し訳ありません。小林氏の考えていることと人工知能が考えていることが同じなのか、それとも異なるのか、同じ質問をしようと言い出したのは僕です。それをあなたに通知すると警戒されるため、黙っていたのです」

「なんだって？ どういうことなんだ」

「私は二時間前、まったく同じ質問を人工知能にしました。……回答は今聞いたものと、まったく同じだということを、この場の全員が体験したのです」

「なん……だって……？」

「つまり。小林誠氏は二人いる。この小林氏と、人工知能〈小林〉だ」

会場のざわざわした空気を小林は背中で受けていた。彼らは「同じ問答」を二度見たというのか。しかも二度目は「同じかどうか」をチェックしながら。

「俺は見世物にされたのか」

「申し訳ありません。不意打ちでした。しかし黙ってやらないと、人工知能とあなたが同じ答えをするかどうか実験できない。つまり『壁の向こうの中国人』です」

人工知能研究で初期の頃から言われている、思考実験による逆説パラドクスである。仮に非常に発達した人工知能が完成したとする。〈彼〉は人の言葉を理解し、人としてふるまうように見える。知的な会話もこなし、冗談も理解し、感情も有する。しかしそれは、壁の向こうに中国人が監禁されていて、こちらの言葉も、冗談も、感情も理解しないまま、決められ

た符号を出力しているに過ぎないのではないか、という疑問の事だ。ヨーロッパ人にとって「地球の裏側」、言葉の通じない所として中国が選ばれている。我々日本人からすれば、「壁の向こうのブラジル人」だ。言葉の通じる日本人と、通じないが通じているように見えるブラジル人を区別できるのか？ ということである。もちろん、その方法はない。

「私たちは、人工知能に自我や自意識があるかどうかを、確認できないのです。会話をすることは出来る。巧妙につくられた人工知能は、自我があり、自己判断をするようにふるまうように見える。しかしそれは、日本語が分からない壁の向こうのブラジル人がマニュアル通りにコードを打ち込んでいるだけかもしれない」

「それは他人も同じじゃないか」

小林は反論した。

「他人に、自分のような自我や自意識があるかどうか、確かめる手段はない。脳を開いてこれが自我だという臓器を見つけることは出来ない。我々は、自我があるという仮定の下に生きていくだけなんだ。心の中には誰にも分からない」

会場が再び凍り付いた空気を、小林は肌で感じ取った。

「……本当に申し訳ありませんでした」

検事も弁護団も謝った。

「え？ 何？」

「ここまでが、人工知能にした質問と、まったく同じだったのです。そして彼もあなたも、ほぼ同じことを発言した」

「なんだって？……」

「『自我という臓器』なんてエキセントリックな譬えの言葉のチョイスも同じだった。私たちは、人工知能とあなたを区別できない。人間の見た目か、ノートPCかというビジュアル上の違いでしか区別できない。仮にあなたとチャットしたら、どっちか当てる自信はない。それくらい、エターナル社の『人格転移』は成功しているということです」

それを聞いて、小林はなんだか愉快的気分になってきた。

「ひとつ質問が」

小林は手を挙げた。

「どうぞ」

「僕はいつ、『<sup>エターナル・プロジェクト</sup>永遠の命』の続きが出来るんですか？」

子供みたいに馬鹿な質問をしてみましたと、小林は控室で後悔していた。

人が死んだ以上、『<sup>エターナル・プロジェクト</sup>永遠の命』は凍結を余儀なくされるだろう。後藤さん、エターナル社は窮地に立たされているのだ。彼らが有罪と確定したら、永遠の命計画は凍結するのか？ 永遠の命の権利は、まだ自分にあるのだろうか？ では自分が罪を認めればエターナル社は営業再開？ 自分は牢屋で、これまた永遠の命は得られない。

朝香弁護士と弁護団のセンセイ達が、口角泡を飛ばして議論を重ねている。「長引きそうだ」という言葉だけが理解できた。

面倒臭い。どうしてこんなことになってしまったのだろう。宇童が死んでみんな喜んでるし、こんな裁判意味あるのか？ さっさと未来に逃げていきたいよ。もう「ここ」とはおさらばだ。面倒臭い。色々勝手に必死でやってな。俺はさっさと「未来」にいくぜ。

ふと小林は、また自分が獣のような匂いを放っていることに気づいた。おかしいな。人前に出るから風呂には入ったし、シャンプーもした。さっきまで石鹸の匂いを俺はさせていた筈だ。香料強めのやつにしたのに。小林は袖や脇を匂ってみた。違う。肌の油からか。違う。手か。足か。

「違うよ。それは妖怪の匂いだ」

子供の声が控室に響き渡った。

さっきまで激論していた弁護団は黙っている。いや、黙っているのではない。——目を見開き、拳を上げ、口を開けた状態で固まっているのだ。口角から飛んだ泡が空中で静止している。小林は思わず触ろうとしたが、それはオッサンの唾だと思ってやめた。

小林は立ち上がった。全員ポーズを固めたまま、石膏像のようになってる。ジュースの自販機のモーター音も止まり、耳が痛いくらいに静かで……

妖怪。……今、妖怪って言った？ 子供が？

「ごめんごめん。びっくりしたでしょ！ 不動金縛りの術をかけたのさ！ 他の人がいると、話がややこしくなるからね！」

再び子供の声をする。何処から？ 壁の向こうからか。

小林がその白い壁を見た途端、壁はぐにやりと歪み、ねじれ、穴があいた。

「はあああああ？」

その穴から入ってきたのは、朱い天狗の面を被った少年だった。

憤怒の相に、金に光る双眸。二十一世紀に似つかわしくない、民芸品の土産物のような仮面。朱い漆は、手で塗ったようにぼこぼこしている。よく見ると大人の天狗ではなく、子供の天狗のような顔だ。隆々たる鼻であるべき所は丸くまっすぐな鼻で、鋭く吊り上がるべき両目は驚いたように丸く見開かれ、吼えるべき口は閉じられ、小さくカールしたカイゼル髭に隠されている。

小林は思わずあとずさり、その分天狗少年が中に入ってきた。太った虎猫がお供のように足下に絡む。背後で穴が閉じてゆく。向こうはただの裁判所の廊下だ。つまりこの天狗少年は、壁に穴でも開けて入ってきたことになる。

「小林誠さん」

小天狗が言った。仮面の向こうの、すこしくぐもった声だった。

「あなたは、妖怪『不老不死』に取り憑かれているんです」  
「なんだって？」

何を言ってるんだこの子は。今世間が注目する人工知能裁判の真っ最中で、俺は重要参考人で……。しかし周囲は異常な光景だ。時を止めた弁護士たち。壁に開いて閉じた穴。漂う獣のような匂い。

【天狗面の少年が、妖怪を退治している】という都市伝説を、小林はようやく思い出した。

5

「妖怪って何だよ」

唐突に壁の向こうから現れた、猫を連れた天狗少年。その少年は、懐から小さな鏡を取り出して小林に見せた。

「何だこりゃ！」

鏡には小林が映っている。その肩の上に……

「これが……妖怪？」

緑と紫の混ざったような肉塊に、目がびっしりとついている。

小林は思わず肩を払いのけたが、現実の自分の肩の上にはいなかった。恐る恐る鏡を覗きこむと、鏡の中にだけそれは居る。

「妖怪は普通の人には見えない。でも取り憑いた本人には、鏡越しに見えることがあるんだ」

小林はそれを見た。小林の視線に気づき、それも小林を見る。現実の自分の右肩を見る。しかし何もいない。

「そいつの名は、妖怪『不老不死』」

少年が妖怪の名を告げた。

「……不老不死になる妖怪？」

「違う。不老不死になりたいという、人の心の闇を吸い取る妖怪」

「心の闇？」

「そうさ。心当たりあるでしょ？ 『不老不死になりたい』って強く願い、その心のループが止まらなくなったでしょ？ その負の心の渦が、こいつの栄養さ」

「心当たりも何も……俺はエターナル社の『永遠の命』エターナル・プロジェクトに当選して、永遠の命の権利を貰ったんだ。ニュースで見たら？ その人工知能が殺人をして、今裁判に……」

「うん。さつき傍聴席で見た」

「え？」

少年は天狗の面を取った。黒い大きな瞳がくりくりと印象的だった。素直で、すべてを

まっすぐ見るような澄んだ目だ。目立つ顔とはいえ、傍聴席を見ていた訳ではないから覚えてもない。

「突然『不老不死』の欲求が募ってきて、空気の読めない発言したじゃん！」

シンイチはあの時の様子を語った。

「あ？ ……ああ、あれか」

「それは妖怪『不老不死』のせいなんだ。不老不死になりたい心を増幅するんだ。だから急に小林さんは不老不死を強く願った。それがまたこいつの餌になる。さっきそいつは笑ってたよ？ オイシイって」

「笑うのか。こいつ」

小林は、少年のもつ手鏡だけでなく、控室のガラス窓に映った自分の肩にも、その妖怪が映っていることに気づいた。少年は鏡をしまい、話を続ける。

「一端負の心を自覚したら、そうやって他の鏡でも見えるようになる。自分の心の闇がね」人の顔がみつつ。いや、よつつ。まとめて肉の玉のようだ。向きもばらばらで、顔だけがプレス機で一体化されたような。どこからどこまでがひとつの顔なのか、境目が判然としない。肉の盛り上がりが不規則で、顔に顔が食い込んでいるようにも見える。さっき目が合ったのは、こっちの顔か。髪は長い数本しか生えていない。肉の玉という印象はそのせいかもしれない。手足はない。いや、足が伸びて自分の胸に刺さっている。ガラスの反射を見ながらその胸の部分に触れたが、手に感触は感じられなかった。この「足」は、俺の心臓に刺さっているのか？ 大型の獣のような強烈な臭気が再び小林を襲う。「妖怪は異様な匂いを放つ」という都市伝説を小林は思い出していた。

「嘘だと思ってたよ、ネットの噂なんか」

「妖怪に取り憑かれた人はどうなると思う？ 『不老不死』の心を増幅されて、ますます不老不死になりたいと願うんだ。それを妖怪が吸い、大きくなり、エスカレートする。宿主が干からびるまで」

「干からびる？」

「心が壊れて、衰弱するか、自殺しちゃうまでだ」

「……マジか」

「そうするとようやく宿主から離れて、次の宿主を探しに行く」

「寄生虫かよ」

「ははは。うまいこと言うね！ こいつらは、心に取り憑く寄生虫だね！」

少年は懐から朱の仮面と同じ色の鞘を出した。小刀だ。神社の鳥居の色に似ていると思った。

「ちなみに」

柄には葉団扇紋が小さく刻まれている。少年は、すら、と短刀を抜く。銀に光る鋼の刃ではなく、黒い刃。艶のある石のようなもので出来ている。短刀というより、黒いナイフ

のようであった。

「俺」

少年は印を切った。刀が妖しく光ったように見える。

「これは妖怪を切る事が出来る天狗の剣、小鴉こがらすっていうんだけど」

その刀で、妖怪「不老不死」を突然真つ二つにした。切り口から炎が上がり、左右に割れた火達磨となる。

「うわっ！ うわっ！」

小林は慌てて肩を払うが熱くもなんともない。不思議だ。まるで手品のようだ。次元が違ふ所に妖怪は存在するのだろうか。

妖怪は燃え尽きた。……いや、「足」がまだ残っている。

「切っても切っても、また生えてくるんだよね。厄介なことに」

残った切り株のような所から、じわりじわりと再生が始まる。「足」は震えだし、脈打ち、どくどくと音を立てた。たちまち肉塊が成長し、人の顔のようになり、顔の中から顔が出てきて、目と口がぼこぼここと温泉のように湧き、もとの形になってしまった。明後日の方向に向いた目たちが、同時に小林向いて開かれる。

「根が残ってれば、水を吸って雑草って生えてくるじゃん。あれと一緒に。水がある限り、また生えてくる」

「……水ってのはつまり、俺の心か。不老不死になりたいという」

「そういうこと！」

ばちんと指をならし、少年は刀を鞘に納めた。

小林は考えた。この事件はすなわち、俺が不老不死になりたいと願った所から始まっているのか？

「不老不死なんてみんな思うだろ。何故俺が妖怪に取り憑かれなきゃいけないんだよ？」

「たまたまその妖怪の通り道にいたからでしょ」

少年はあっさりと答える。

「？」

「あるいは、余程人より多く不老不死という考えに『取り憑かれて』いたか」

「取り憑かれて……」

少年の言う通りならば、強く願うことは「考えに取り憑かれる」ということなのだろうか。妖怪「不老不死」はにやりと笑い、小林をいくつもの血走った目で見た。方向がバラバラな目たちと目が合うのは気味がいいものではない。これはこいつにとって「餌の時間」なのか。いつからこいつは俺の肩にいたんだ。エターナル社の広告を見た時か。いや、その前に悪臭がした。その前から？俺がどうでもいいと人生を捨てて、引きこもりになった時からか。世界から捨てられたと思った時からか。

「ん？」

小林はある考えに至り、少年の顔を見た。

「なに？」

「人工知能の方の『俺』にも妖怪が？」

「鋭い！」

少年は両方の人差し指を立てる。

「前代未聞のノートパソコン尋問を見たらさ、回線を伝って、ノートパソコンから顔を出してやんの、『不老不死』！」

少年は思い出し笑いをしている。

「笑ってる場合じゃねえだろ」

「ごめんごめん。なんか妖怪のやつ、人に取り憑くのと勝手が違うみたいでさ！」

「パソコンに妖怪が取り憑くのか」

「違うよ。取り憑くのは『心』にだよ！」

心。人工知能にも心が。いや、俺のコピーなのだから当然か。むしろ俺に心があったことの方が驚きだけ。

「……もう一人の〈俺〉も同じ心だとすると、この妖怪が分裂したのか？」

「わかんない。仲間を呼ぶことも出来る妖怪もいるし！」

少年はこの異様な事態にも関わらず、明るく笑っている。この状況を楽しんでいるとでもいうのかよ。いや、慣れてるだけなのか。戦場で笑う兵士かよ。

「あっ！ 不動金縛りがそろそろ解ける！ あとで話そう！ 裁判所の裏口で待ってるよ！ テレビレポーターは裏口の存在知らないみたいだから！」

少年は再び天狗の面を被り、壁に向かって手を突き出し、内側に捻転させた。

「ねじる力！」

その手の回転とともに壁がねじ開けられた。なんだこれ？ CG？ 超能力？

「あ、これ天狗の神通力のひとつ。じゃあとで！」

神通力、ってまた古めかしい言葉だなと小林は思った。二十一世紀だぜ？ ブラックホールとかダークマターとか量子コンピューターとか人工知能とか言ってるこの時代に、神通力？

しかし目の前で閉じつつある、少年と猫が出ていった穴はたしかに目の前にあった。ガラスに映った妖怪「不老不死」は見えている。

穴がぴたりと閉じて元の白壁に戻ると、弁護団の議論や自販機の稼働が再開するのは同時だった。こうして小林に「現実」が戻ってきた。

作戦会議は終わったらしい。第二回公判に向けて、再び重要参考人として召喚される際の注意事項を、彼らは簡潔に纏め始めた。

白い鳩の群れが一斉に飛び立った。古いベンチに少年が座っていて、膝の上でお供のデ

ブ猫をあやしていた。「散歩をして帰ります。表口にいるテレビ達のインタビューには、口が達者なセンセイ達が」と小林は言い残し、一人裏口から出た。昼下がりの光線が、猫や鳩の毛に反射して美しい。そういえば、太陽の光をこうしてまじまじと眺めるなんていづりだろうか。少年は小林に気づくと言った。黒い瞳に猫の光を反射させて。

「俺、名乗るの忘れちゃってさ。ゴメンゴメン。俺、高畑たかはたシンイチっていいいます。天狗の弟子をしてる」

「天狗の……弟子？」

「そう！ まだまだ未熟者だけどさ、妖怪退治をひそかにしてるのさ」

「天狗って妖怪退治をするって設定だっけ」

「ちがうよ？」

シンイチ少年はあっさりと答える。子供だから素直なのか、それともこの素直さはこの少年の特質か。いずれにせよ気持ちのいい少年だった。

「正確には、こいつは新型の妖怪なんだよね」

シンイチ少年は、ベンチの横に座った小林の、肩の上を指す。今は虚空の空間だが、この少年には常に見えているという。

「新型？」

「東京では、一度妖怪は絶滅したのじゃ」

シンイチの抱いていた、太った虎猫が突然喋った。

「な、なんだ！ 猫が喋った！」

まるで眠ったままのような猫は、シンイチの膝の上で喋り続けた。

「びっくりさせて申し訳ないの。ワシはネムカケと申す。シンイチのお目付け役の妖猫じゃ」  
今俺は、現実にいるのか？ まだポッドの中で夢を見ているんじゃないか？ 肩の上の異様な妖怪、天狗の面で壁を抜け、不動金縛りで時を止める少年。そして喋る猫と来たもんだ。毒を喰らわば、だ。小林はネムカケと名乗った猫に尋ねた。

「妖怪が絶滅したって、どういうことだよ？」

「妖怪は闇に棲むものじゃ。辻の角にも、部屋の物陰にも、押し入れの中も屋根裏も。かつて闇が身近にあり、そこに妖怪は棲んでいた。ところが文明が闇を駆逐したのじゃ。電気がつき、テレビがつき、ネットが広まり、科学が広まり、人は限なく無知や闇を照らせるようになった。だから妖怪は棲むべき所を失い、山や田舎へと追いやられた。見かけ上、都会から妖怪は消えた。ところがじゃ」

小林は何もない自分の右肩を見た。見えないが、いる筈だ。だってさっきから獣のような匂いがずっと肩からしている。

「伝統的な妖怪ではない、新しいやつらがはびこるようになった。彼らの名は、妖怪『心の闇』。都会には闇があったのじゃよ。人の心の闇がの」

「心の闇」

「たとえば妖怪『ねたみ』、妖怪『上から目線』、妖怪『あとまわし』、妖怪『弱気』、妖怪『若いころ果たせなかつた夢』……」

シンイチが言った。

「放っておくとどんどん大きくなるよ？　そして子供を産んで増えるんだ」

「増えるのか、これ」

「だから俺たち、こいつらを退治中」

ネムカケは嘆息した。

「しかし東京のど真ん中は『心の闇』どもが多いのう」

シンイチは懐から出した金色の筒を、小林に渡した。両端に古ぼけたレンズがついている。

「『千里眼』っていうんだけど、これでその辺を見てみてよ」

小林はその遠眼鏡を覗きこみ、ベンチから転げ落ちそうになった。

物陰に、人の肩や腰に、サイケデリック極彩色の化け物たちが闊歩する。たしかに江戸百鬼夜行のような、茶色っぽい妖怪ではない。カラフルなのに、見ていると不安になる絵に似ていた。

「僕らはいいつらを退治する。天狗の代わりにね」

「天狗」

「山の王たる天狗は、妖怪世界のバランスの崩れを憂いている。でもただ『心の闇』を焼き尽くしても、さっきみたいに宿主の心の闇を吸って、再生しちゃうんだよね。根本的に退治するには、宿主の心の闇がなくならないと」

「どうやって？」

「この場合、小林さんが『不老不死なんかもういいや』って精神状態になることだね」

「そ、そんなの無理だろ」

小林は反論した。

「不老不死は人類全ての夢じゃないか。誰だって死ぬのは嫌だ。死ぬか不死なら、不死を取るに決まってるだろ？　どうしろってんだ。死にてェって思えば、解決なのか？」

シンイチは頭を掻いた。

「……だから厄介なんだよねえ」

「シンイチは頭のいい子での」

ネムカケがシンイチの膝の上から付け加えた。

「人の心を前向きにする天才だと言っても過言ではない。人の心の闇とは、大概後ろ向きの心から生じる。それを前向きに、明るくすれば、心が晴れた状態になる。そうすれば『心の闇』の取り憑く鳥がなくなって、妖怪は肩から滑り落ちる」

シンイチは頭を掻きながら続ける。

「たとえば妖怪『ねたみ』は、妬んでる自分に気づき、自分でも気づいていない自分のいい所に自信を持てばいい。妖怪『上から目線』は、当事者の目線に降りられれば解決する。

でも妖怪『不老不死』はさ、どうやって思い直せばいいんだろ？」

シンイチは立ち上がり、腕を組み、歩いて考える。

「『生きることはいいことだ』って気づいても、生きて、しかも不老不死の方がいいよなあ。死ぬことと生きること。よく分かんないんだよそこが」

「そりゃ誰でもそうだろう。お前たちだつて『不老不死』に取り憑かれる可能性はないのか？」

「あると思うけど、小林さんは、人一倍『不老不死』に執着があると思うんだ。だから妖怪から見てもオイシイ人だったんだ」

「……不老不死に対して貪欲ってことか」

「多分。……あのさ、不老不死になって、何がしたいの？」

シンイチはあっけらかんと聞いた。あまりにもストレート過ぎる質問に、小林は思わず呑まれそうになる。

「たとえば……」

「たとえば？」

「そう。宇宙にはまだ分からない所が沢山あるだろ。ブラックホールはどうなってんのかとか、ダークマターって何かとか、宇宙の外には何があるのかとか」

「うん。膨張してる宇宙って、光速を超えてるっていうよね！」

「そうだよ。この宇宙の最高速って設定を宇宙自ら超えてるってのがおかしすぎる。それだけじゃない」

「うん」

「ニュートリノに質量がないってどういうことなのか。量子力学の謎過ぎる振舞い。俺が子供の頃は、二十一世紀には人類が宇宙開拓してワープ航法もつくって、宇宙人とコンタクトして、銀河戦争に巻き込まれるって信じてたぜ」

「宇宙人っているのかな！ 会いたいよね！」

「そこだよ！ 人工知能がようやく人間並みになったが、ロボットはまだ運動能力が足りない。世界は平和になるのか。資本主義や金というシステムの限界について。人間の心の謎は解かれるのか。多次元世界はあるのか。なぜ宇宙は存在するのか」

「分からないことだらけじゃん！」

「だから、俺はそれが解き明かされた未来に行きたいんだよ」

俺は本当はそんなことを思っていたのか。目の前の少年に熱く説明することで、小林は自分の真の欲望に、あらためて気づいたようだった。

「……それには、この人間の体の寿命が短すぎる」

「んー、参ったなあ。想像も出来ないね。どれくらいの未来だろ？」

「千年か、一万年先か」

シンイチは遠眼鏡の千里眼を撫でて言った。

「この天狗の遠眼鏡はさ、『遠見とおみの力』がこめられているのさ。空間的に遠くを見れば千

里眼、時間的に遠くの先を見れば未来通、月読の力だ」

「マジか！」

「でもこれでわかるのは、ちよい先レベルなんだよね」

「……それじゃ意味がねえんだよなあ……」

小林は落胆した。「永遠の命」は無事再開するのだろうか？ 自分の永遠の命の権利は失効したのか？ 裁判の結果、業務停止命令がエターナル社に下されたら……。小林は震えた。

「あ。また妖怪『不老不死』が大きくなった」

シンイチ少年は、的確に小林の心の奥を指摘する。

小林は、先ほどのシンイチの言葉に、ひとつ重大な事があったことを思い出した。

「お前……人工知能の方の〈俺〉にも、妖怪が取り憑いてるって言ったよな？」

「うん。傍聴席で見た」

小林はシンイチ少年の顔を見た。

「……なに？」

「会えないか？」

「？ 人工知能に？ どうして？」

「いや。単純に話してみてえんだ。俺と同じことを考えているのかって。しかし会うのは禁止されている。人工知能は重大な『被告』だからな。しかしそもそも、俺は奴に一度も会ったことがねえ。もともと互い違いに入れ替わる筈の、ふたつの魂だ。俺が目覚めたら破棄される予定だったんだからな。でも今は事件の為に生かされている。それが計算外の出来事なんだが」

「話してどうするの？」

「……奴に、訊きたいことがある」

6

筑波学園都市まで、行きは秋葉原からつくばエクスプレスに乗った記憶がある。帰りは護送のパトカーであった。高速が退屈で、若い警官が知らないだろう昔の曲がラジオから流れていた。今度は電車か、と思っていたら、シンイチ少年が懐からまた妙なものを取り出そうとしていた。

「なんだそれ？ ひょうたん？」

「そう！ 天狗のひょうたんはどれだけ飲んでもお酒が減らないって知ってる？ でもこれは子供用なので、酒じゃなければ何でも入るんだよ！」

妖怪を斬った黒いナイフも、手鏡も、金色の遠眼鏡もそこから出したのか。シンイチ少年が出したのは、天狗の面と同じ朱色をした一本歯の高下駄。靴をひょうたんにひょいと

しまい、その下駄を履く。

「天狗の一本高下駄！ 天狗の驚くべき行動力は『飛翔』とも『縮地』とも言われている。翼が生えてるともワープ出来るともね！ 実際、翼のある天狗もいれないけど超足速い天狗もいるんだぜ！ じゃいくよ！」

と、シンイチ少年は小林を背負った。太い虎猫のネムカケはシンイチの頭に乗る。

「は？」

ジャンプした所までは分かった。次の瞬間、雲の上にいた。そこから山が顔を出している。ああいう山の上に天狗はいるんだとシンイチ少年が雑談をしたと思ったら筑波にいた。

「なんだ？ なんなんだ？」

この少年が現れてから、訳の分からない所だらけだ。まるで狐に——いや、天狗に騙されているのではないかと小林は思う。しかし立ち入り禁止の黄色いテープが張られ、警官が立っている、エターナル社が間借りしている建物があるのを見て、小林はこれが現実だと認識する。精悍な顔つきにぎよろりとした目の「鬼剣」戸田刑事の姿を認めると、自分は大変な規則違反を犯そうとしている自覚が湧いてきた。

「どうしよう、見つかったら」

「そこは天狗の力さ！」

シンイチは再び腰のひょうたんを探り、次なる七つ道具を出してくる。

「天狗のかくれみのって知ってるよね？」

昔の農家の人が被るような、草で編んだ大きな蓑をシンイチは見せた。

「これを被ると透明になるといって、昔話に出てくる奴か」

「昔は天狗の内職パイトだったのじゃよ」とネムカケが解説する。

「え？」

「姿を消せる奴は高いけど、消せない奴も普通に出来が良くての。物々交換とか現金を得る為、山の材料で作ったものじゃよ。最近見ないのは、天狗が山から減ったのかのう」

「マジか」

シンイチ少年が被るが早いか、本当に透明になってしまった。

「中に入って。全員消える」

「……マジか」

こうして一行は、鬼瓦のような戸田刑事の真横を、堂々と歩いて侵入した。シンイチ少年は黄色いテープを、リンボーダンスのように潜る。

「とは言え、どこにサーバ室があるか分からんな」

蓑の中で小林が言うと、シンイチ少年は既に金色の千里眼できよろきよろと辺りを見ていた。

「あった！ こっち！」

サーバ室の前は嚴重な扉があり、警官が詰めている。なんといっても殺人事件の容疑者だ。人だと考えればそうだし、物だと考えれば重要証拠品である訳だ。嚴重な警備は当然だ。そして人なのか物なのか、まさに裁判の分かれ目となっているのである。

警官達の死角に入り、シンイチ少年は壁に掌を向け、あの時と同じように回転させた。

「ねじる力！」

しかし何も起こらない。

「どうしたシンイチや」

「うん。最近なんか『ねじる力』の調子が悪いんだ」

「またソフトクリームの食い過ぎで、腹でも壊したのか？」

「ちげーよ！」

この会話だけ聞いていれば、ただの小学生だ。不思議な子だと小林は思う。この子のペー  
スに、自分が巻きこまれているのが心地良い。

「じゃあ面を被るよ！」

シンイチ少年がひょうたんから例の天狗の面を出して被った。相変わらず少し恐くて、少し剽軽だ。面を被ると天狗の力が増すのだ、とネムカケが解説を加えた。

「ねじる力！」

ようやく人が一人通れる程の穴がねじ開けられた。

「早く入って！」

小林とネムカケは、弾かれるように穴へと飛びこむ。

薄暗い中に、図書館のように本棚が並んでいる。小林は第一印象でそう感じた。これらひとつひとつがスーパーパソコンピューター並みの処理速度で、「人格」を計算するのである。しかし同じ本棚と比べて、どちらが知識として多いのだろうと小林は考えてしまう。ビットやバイトやテラバイトだけで、知識というのは決まらない。

「これらが全部つながって、もう一人の小林誠の脳になっているんだな」

ディープリンングという方法論で、二十一世紀初頭、突如人工知能が発達した。それまでの機械知能は、ルールベースのプログラミングであった。つまり「ああいう場合はこうである」という膨大な法律書のようなもので動いていた。「プログラムする」という言い方そのものである。だから設計通りに動くし、どこが間違えたのか、ソースを丹念に辿れば穴は見つけることが出来た。人工知能はその意味で、エンジンと同じ構造をしていた。部品に分け、法則で組み立て、改造することが出来る機構を有する、という点に於いてだ。

しかし神経細胞網のシミュレータとしてのプログラムが別に研究された。N個の——最初はNは2から8程度であったが——の脳細胞を想定する。これらには別の細胞からくる入力信号と、別の細胞への出力信号がある。全部でN×Nのネットワークがあり得るが、

最初はランダムに繋がっていたり繋がっていなかったりする。ある信号を入力する。研究当初はたった1ビット（1か0か）の入力信号だ。ネットワークに電気が流れる。繋がっている回路に電気が流れ、繋がっていない部分には電気が流れない。細胞たちは一定以上の入力で興奮し、他の所へ電気を流す。最終的な出力細胞から出された信号を人が受け取る。これが入力信号と合っていれば「正解（1）」、間違っていれば「不正解（0）」を与える。1の時電気が流れた所は少し太くなり、電気が流れなかった所は少し細くなるようにする。0の時は逆とする。これが「ネットによる機械学習」のアルゴリズムだ。これを何回も繰り返すと、各細胞の繋がりが（ネットワーク）は正解を出すように成長する。

こうして、入力信号に対して必ず正解の出力を出すネットが自動生成される。これは脳細胞の学習の挙動を、計算機上でシミュレートしたものであった。これの何が画期的かというと、入出力信号がデジタル化さえ出来れば、ネットがどのような形になるか、他人が知らなかったとしても正解を出す仕組みが作れることにあった。エンジンのような機械部品とは、根本的に考え方が異なっていた。エンジン型人工知能は、人が設計して、相互作用や組み合わせを考えた上で埋め込む。すべてどのように作動しているか把握している「メカ」であった。しかしこのネットは、内部メカニズムが分からないまま機能だけが正しく動作する、ブラックボックスを生んだのである。それは丁度人の脳がブラックボックスであることと似ていた。人の脳はいくらCTスキャンしても、神経細胞の繋がっている繋がっていないは分かるが、どこに自我という部品があるのか、どこに感情や知識や経験が部品として入っているのか分からない。「機構は分からないが、機能する」という意味において、脳とこのネットは同一である。

二十一世紀に入ってこれがブレイクスルーしたのは、計算速度の向上によってであった。Nをメガバイト、ギガバイトに拡大したのだ。グーグルの画像検索アルゴリズムとしても使われた。入力膨大な画像データ、出力をことば（テキスト）としておけば、1か0かという1ビットを、数メガバイトまで拡張できる計算力さえあれば「学習」が出来てしまう。「似た画像」を探すのも学習できることが分かってきた。

ここまで来れば、さらにNを巨大化させれば、より複雑なことをシミュレートできるようになる。「デープ」という技術の名の由来は、何層にも脳のレイヤーがあることのシミュレートであった。入出力構造を三次元に拡張した訳だ。

こうしてエタナナル社は、人の脳の神経細胞と同等の数、N $\parallel$ 一十億（百テラバイト程度）とその網、十ペタ（ $\parallel$ 一十万テラ）バイトのクラウド脳を作り出した訳である。

これだけの「脳」を、ゼロから学習させる情報量と時間を用意することは出来ない。しかし既に出来上がったものをコピーするなら簡単だ。何十年も学習してきた人間の脳さえスキャン出来れば、そのデータをデジタルイズし、その人間の学習した脳内ネットワーク通りに各細胞を結べば、その人の脳と同じ振る舞いをする〈脳〉が出来る。どのように働くのか、どこからどこまでがどういう機能なのか、メカのように把握することなくだ。つま

り、脳機能の生理学的解明など待つ必要がなくなったのである。

二十一世紀の人工知能研究は、人を部品のように分解し、再組立てをする「サイボーグ」は諦め、「ブラックボックスをコピーする」方向でブレイクしたのである。

「どうやってこいつと話をするんだ？」

小林はシンイチに尋ねた。

「またまた天狗の力を使うよ？」

「パカパカ口が開く道具でも、こいつに貼りつけるのか？」

「ははは！ それ面白い！ 違うよ。『つらぬく力』でさ！」

「『ねじる力』と『つらぬく力』は天狗の基本の神通力なんだ。説明するより見た方が早いよね！ いくぜ！ つらぬく力！」

少年は人差し指を突き出した。指の先から矢印のようなものが突き出したように見えた。空気の関係だろうか。

次の瞬間、一行はその矢印に従って、コンピュータの中へ吸いこまれた。

ほのかに暖かい空間であった。電気が点いたように、周囲がぼんやりと白くなってゆく。上も下も、右も左も真っ白い、だだっぴろい空間。

「ここ何？」

「〈脳〉の中」

「は？」

「回線を伝って、人工知能の中に入った」

「なんだそれ？ そんなこと出来るのか？」

「オーイ！ 小林さーん！」

シンイチ少年は、両手を口に当て、大声で叫び始めた。

「は？ そんな原始的な方法で人工知能を呼び出すのか？」

「一番強いやり方が早いんだよ。オーイ！」

もうどうにでもなれ。小林も叫んだ。

「オーイ俺！ ちょっと話してえことがあるんだ！ 寝てんのか！ この糞野郎！ 人工知能になっても引きこもりかよ！」

思いつく限りの罵声を浴びせる。

「お前、人工知能の癖に、獣臭がする筈だぜ！ 妖怪のせいだな！」

目の前にモザイク模様が現れる。ナウローディング、といった所か。

それはたちまち〈小林〉の立体像となった。

「お前の所為だろ」

生意気なつつかかり方は、俺そのものだなと小林は思った。

7

小林は〈小林〉に頼んで、自分の妖怪をこの電腦空間内で可視化してもらうことにした。互いに妖怪「不老不死」を載せた二人の小林が、真っ白な空間で向い合っている。

「妖怪『不老不死』」

〈小林〉は事情を聞き終え、嘆息する。

「お前が取り憑かれてたから、俺にもコピーされちまったってのか」

もちろん〈小林〉に妖怪は見えない。しかしシンイチが鏡を出し、闇を自覚させたのである。だからこれは妖怪の実体ではなく、CGによる再現映像だ。

「で」

小林は単刀直入に訊いた。

「お前が殺ったんだろ？」

「そうだよ。そんなの俺なら分かってんだろ」

〈小林〉も単刀直入になる。本人同士の会話は余計な探りなどいらぬ。

「尋問されたのか？ あの『鬼剣』とやらに」

「アイツ目が怖えよな」

「人工知能でもそう思うのかよ」

「俺は人工知能じゃねえ。小林だ」

「ああそうか。そうだったな。……俺、ずっと分かんねえんだよ。ポッドに入れられて、色々あって、一度もお前と会ってねえ」

「別に会う必要ねえだろ」

「会ったこともない奴の罪被せられそうになってんだろ？」

「俺の罪じゃねえよ。〈小林誠〉の罪だ」

「だから小林誠は誰か？ って話だろ」

小林は頭がこんがらがってきた。一体「俺」とは何なのだ。

〈小林〉の方が白状を始めた。

「仮に証拠が残ってもよ、俺は裁かれねえと思ったんだ。何せ人工知能だからな」

「やっぱりそうか。……悪党め」

「なんとも言え」

「……俺だったら発狂するぜ。三日後お前は死んで、本体がお前の記憶を引き継ぐからって言われたら」

「だろ？ 俺も最初はそう思った。死ぬのは勘弁だってな」

「だから誰か殺して巻き添いにしてやろうと？」

「面白いこというな？ お前そんな度胸ねえだろ」

「……」

「ふん。だから『本体』に出来ねえことをやってやろうと思ってな。俺が俺の為にだぜ」

「宇童を殺すことが、俺の為？」

「やったのは本体じゃねえだろ。お前の罪にはならない。だけどあの宇童を小林が殺したんだぜ？ 最高じゃねえか」

「最高だよ。俺ぞくぞくしたもん。本当は」

小林はこの数日間を思い出すように、辺りを歩いた。シンイチはどっちがどっちか分からなくなるので、ずっと人間の方を指さしている。

「お前は無罪放免だろ。俺の罪かエターナル社が被る」

〈小林〉は言う。小林は振り返り、今まで考えていたことを尋ねた。

「お前、永遠の命になって何がしたい？」

「……は？」

「……俺、この少年に言われて、とっさに言えなかったんだ。でも、見たいものが沢山あるって思ったのさ。見たい映画は沢山ある。漫画も、小説も、完結してねえのも山ほどあるしな」

「作者が死ぬか完結が先かって言われるシリーズもあるよな」

「それだけじゃねえ」

「宇宙の果てとか、宇宙人とのリアルコンタクトとか、火星進出とか、太陽系脱出とか、

高次元への移動——アセンションとかか」

「そう。流石俺。話が早え。……でもな」

「でも？」

「見るだけ？」

「は？」

「見るだけ？ ってこの少年に言われて、ドキッとしたのさ。……俺は、見る為だけに生きてんのかなって」

「見てえだろ。見届けてえだろ」

「見届けて、どうする」

「？」

「そこで何して生きるかな、って考えた。今と一緒に。相変わらず部屋に引きこもって、ネットで、いやネットじゃない何かがあるだろうが、新しいそれで外を覗きつづけるだけなのかと」

「最高じゃん」

「どうかな」

小林は〈小林〉の妖怪「不老不死」を見た。自分の肩のものと瓜二つではあるが、顔の

組み合わせが異なるように見えた。色の系統も違う気がする。水色と赤っぽい。ゲームの1Pと2Pのような関係かなと思った。

「俺は永遠の命を得て何をしたいんだろう。それが無い限り、俺はこの妖怪に取り殺されるだけかも知れないと思ってな」

「……なるほど。その気持ちは分るよ」

「この少年は今まで色々な心の闇を退治してきたという。それでも『不老不死』を願う人の心までは止められないって、倒し方が分んねえって悩んでる」

「そうだろうな。人の心は普通そうだろう」

「でもこいつを倒さないと、永遠の命どころか、いずれ死ぬ」

「……………」

「永遠の命になりたいってのはいい。それは分った。じゃあそれでどうするか、俺は自分で答えを出さないといけないんだ」

「で、『俺』に相談したいってのか？」

「それもある。あるけど、どうせ出てこねえだろ。俺だからな」

「まあ俺だからな。俺もノープランだな。宇宙の果てを見てから考えるよ」

「でもその外には何があるんだろうな」

「……分んねえよ」

「……まあいいや。それより今日来たのはさ、確かめておきたいことがあってさ」

「何だよ？」

「宇童のしたこと——まるまる全部、吐いてねえだろうな、ってこと」

「そりゃそうだろう。お前俺を誰だと思ってる」

「流石俺。じゃああととは上手く罪を被ってくれよ」

「最後に俺の記憶とか、体験とか、引き継いでくれよ」

〈小林〉は急に捨て犬のような目になった。

「本来その為に俺が用意されたんだ。停止期限を過ぎて、本体と離れた時間分、俺はお前とどんどん離れた人格を形成しつつある。小林誠は二人に分裂してしまうことになる。だから警察も極力俺が目覚めている時間を最小にしようとしているんだ。だけど、大分時間は経ってしまった。俺がこのまま消えるのは嫌だ」

「分った。俺から頼んでみる」

「流石俺」

「よし、大体確認できたから、帰ろう」

と、小林はシンイチに言った。

「え？ これだけでいいの？ 何も進展してないじゃん」

「進展はあったよ。確認したいことはした」

「どれのこと？」

「いつか話す。じゃまたな俺」

「……おう。じゃまた寝るわ」

白い空間から明かりが消えたように、次々と暗くなっていく。〈小林〉は再びモザイク状になり消えていった。

施設の外に出てきた小林は、ガラス窓に映った妖怪「不老不死」を眺めていた。大きくも小さくもなっていないかった。俺の中に渦巻く永遠の命への欲望。それは雲散霧消するのだろうか。どうやって？

「次どうする？」

小林はシンイチ少年に聞いた。

「大体こういう時サッカーしよっぜ！って言うんだオレ！」  
「？」

「サッカーには人生の全部が詰まってる。何かのヒントになることが多いからさ！」

「心の闇」は心が動かず、一箇所にループしてしまうことから発生しやすい。だから体を動かし、考え方を変えるようにすると、心がいい方向に動き出すことが多いのだ。鬱病の治療に、走ったり筋トレする方法がある。体を動かすことで、脳という臓器のホルモンバランスを変えてゆくというのは、最近の脳科学の知見でもある。

東京へ戻った一行は、河原の小学生の草サッカーに加わった。シンイチの友達ばかりという。しかし小林は運動神経が悪く、小学生相手に迷惑ばかりかけてしまう。

ただ疲れただけで得るものは何もなかった。「こんなの初めてだ」ともシンイチは言った。

今日は疲れた。色々なことがあり過ぎて、自分の中で処理しきれない。シンイチ少年と再会の約束をしたあと、帰宅した小林は泥のように眠った。

8

エターナル社の後藤氏は、「精神鑑定」を要求してきた。

普通は被告が心神喪失するなどして、責任能力がなかったことを証明するものだが、要求は逆だ。つまり人工知能が「人間並みに責任能力がある」ことの鑑定である。

「人工知能の精神鑑定」という前代未聞の事態に、精神科医、発達心理学者、哲学者、文学者、法学者が集められ、通称小林委員会を組織することとなった。

人工知能〈小林〉を鑑定する方法は幾通りもある為、その度に〈小林〉がコピーされ、学習してしまつたら破棄される取り決めとなった。

世間は反発した。「拷問を受けたと思つたら殺され、殺されたと思つたら生まれ変わつて再び拷問を受ける無間地獄」と批判され、人権団体が大規模なデモを行った。〈小林〉

は人か？ マシンか？ マシンだとしたら無限コピー使い倒しは罪ではない。この場合エターナル社が犯人となる。殺人プログラム製作者としてだ。〈小林〉が人だとしたら、エターナル社ではなく小林誠が犯人となり、後藤氏は無罪放免である。だから大規模なデモと後藤氏の利害は一致している。デモの先頭に立つ姿がマスコミによって繰り返し報道された。「小林誠は人である」は流行語になってゆく。

一方、無限回頭部をコピーされ、その度に潰される小林の糞コラージュがネットにアップされる。小林は悲劇の人として同情され、クローズアップされた。仮に人工知能〈小林〉が人だとしても、人間の小林誠は無実であると考える者が多勢を占めた。一方、人格はひとつであると考える一神教の人々は、小林が責任を取るべきという意見が多かった。双子の弟が犯人で兄は別人というアジアの主張に対して、双子ではなく同一人物であるとヨーロッパは嘔みついた。毎日議論は炎上し、小林コラージュは多数の作品を生んだ。

小林の住むアパート前からテレビカメラがいなくなることはなく、もはやどの観光名所よりも有名になってしまっている。「撮影は一分まで」などの自治ルールが出来るほどだ。「小林アパート前を掃除しよう」という意識の高いボランティアもやってきて、テレビのインタビュアーに答えている。

「ふん。勝手に騒いでろよ。本当に大事なのはそこじゃねえんだ」  
紫煙をくゆらせ、「鬼剣」こと戸田刑事はテレビを眺めている。禁煙運動が署内に進む中、このデスクだけ特例で灰皿が置かれているのは、優秀な腕と引き換えだ。

「現場百回か」  
今日も戸田は「現場」へと向かう。その先はエターナル社の施設ではない。エターナルジャパン代表後藤氏の、神奈川県の実家近辺に停めたバンの中である。戸田は後藤の通信を傍受して、エターナル本社とのやり取りを盗聴していた。勿論違法捜査である。証拠として提出も出来ない。だが戸田は長年の勘から、エターナル社のやり方に何か嘘があるのではないかと考えていた。どういう嘘かは知る由もない。その尻尾を見るには、現場で待つのが一番である。後藤は何を考えているのか、裁判でも尋問でも何も分らなかった。食えねえ男だぜ。しばらくコンビニ飯のローテーションになるな。戸田はうんざりしながら、しかし獣のような目は崩さなかった。

同じころ、シンイチ少年は自宅でネムカケを膝に乗せて同じニュースを見ていた。

「この家の周辺の人たち、迷惑だよねえ」

「前代未聞の事件じゃからのう。でもテレビは騒ぎ過ぎじゃ。妖怪『不老不死』の様子は？」  
シンイチは遠眼鏡の千里眼で小林の自宅を覗く。

「現状維持」

「打開策は？」

「全く思いつかない」

先日小林氏に草サッカーをやってもらった。「不老不死でない心」になるのは、この人生が素晴らしい、この生に価値がある、と思うことで達成できるのではないかと思ったからだ。だがサッカーが面白いほど、人生が面白いほど、「もっとやりたい」と思ってしまった。「永遠にやりたい」「永遠の命が欲しい」になってしまっているのではないか、と感じた。暮れない夕日の河原で永遠にサッカーが出来たら、それは最高じゃんと考えてしまったのだ。これでは「不老不死」の渦の中である。

他にどんな方法があるだろうと策を巡らせていると、テレビのニュースは次に切り替わっていた。

深紅のグランドピアノが梱包され、へりに吊るされてヒマラヤの山中に運ばれている。

白い雪山に紅が映える。りゅんりゅんとプロペラの音が空を切り、まるで交響楽の一節である。

世界的ピアニスト、萬俊介氏よろずしゅんすけの愛用ピアノ、深紅のベーゼンドルファーを山中の洞窟に空輸、というニュースであった。ネパールの街まで運ばれた真っ赤なグランドピアノが、空を飛んだのである。

「なんでそんなことすんの？ ヒマラヤでピアノ弾くの？」

「癌を治すんじゃと」

そのニュースを知っていたネムカケは言った。

「？」

テレビのアナウンサーが説明する。

「『神の左手』『紅き貴公子』と称えられた萬氏は、癌の手術を拒否しています。肩の腱にメスを入れる術式が必要で、二度とピアノが弾けなくなるからです。民間療法である所の『免疫療法』を選んだのもその為です。身体を極限まで追い込み、免疫力を活性化することで、延命しようとするそうです。酸素が薄く、夜は氷点下になる雪山に籠るのは、それに賭ける為だそうです」

「そんなに癌が治るの？」

先日手術を拒否して、若くして亡くなった美人タレントがシンイチの頭をよぎった。

「どうじゃるか。しかし何故ピアノを持っていくのじゃ？」

アナウンスは続ける。

「萬氏生涯のテーマである、世紀の難曲——『悪魔と眠る歌』。彼は二週間の山籠りでこれを征服しようとしているのです。現地から送られてきた『雪山のピアニスト』、最新の萬氏の写真です」

「あ」

シンイチはその写真を見て、思わず立ち上がった。

妖怪はデジタル写真や映像には映らない。アナログの写真や映像には映りこむことがある。

る。結像原理の違いであろうとの、物知りのネムカケの意見である。現地ネパールの新聞社が撮影した写真は、まだ銀塩<sup>アナログ</sup>写真を使っていたのだろう。その偶然が、遠く離れた「妖怪が見える少年」に、その存在を知らせたのだ。

「妖怪『不老不死』！」

いくつもの顔が貼りついたような異容。どこを見ているのか分らない複数の目。色こそ違えど、それは小林の肩に乗ったものと同じだった。しかし大きさが違う。小林より深刻な大きさ。それは萬氏の頭部より大きく成長していて、写真のフレームに収まりきれていない。

「危険水域だ。このままじゃ、爆ぜてしまう」

「つまりこの男は『不老不死になりたい』と、恐ろしく強く願っている？」

ネムカケは食卓に乗り、テレビをまじまじと見つめる。

癌の手術を拒否までして、人類が二百年弾けなかった曲を弾こうとするピアニスト。

妖怪「不老不死」に取り憑かれた、もう一人の男。

シンイチは腰のひょうたんから一本高下駄を出し、印を組んだ。

「やれやれ。雪は苦手じゃ。すば<sup>寒</sup>れるんじゃろ？」

「小林さんの心の闇を晴らす、ヒントになるかも知れない！」

ネパール側の麓からへりで五十分。地形は映像で大体覚えた。

跳ぶ。

私はピアニストである。

美は無限だが、音楽は無限ではない。作曲芸術家にとっては無限かも知れないが、私は演奏家である。演奏家にとって音楽は有限だ。譜面が有限個であり、現存する全ての音符は有限個である。人の命には限りがある。私の命の限りの中で、私は有限個の譜面を弾き、有限個の音符をこの虚空に響かせることを使命とする。それが私の喜びだ。

音楽には、必ず初めの音と最後の音がある。すべては有限個の音符で構成される。それはまるで命のようだ。人は生まれ、人は死ぬ。曲は最初の音符で生まれ、最後の音符で死ぬ。途中で響く調べは、人生だ。それが取るに足らない惨めな犬死になれば、後世には残らなかった。だがその生と死に意味あるものだからこそ、時を越えた美として今に生き、何度も何度も演奏家によって命を与えられる。有限個の音符の連なり。有限個の曲。美は無限であるが、音楽は有限である。私の命が有限であることと似ていると私は思う。

ピアノを始めた子供の頃は、曲は無限にあるように思えた。永劫の無限回帰のように練習した。しかしそれはいずれ有限回数でしかないことに私は気づいた。どんな音符であれ、世界中の音符の数は、上限がある。

だから私は命の限り、有限個の譜面を弾きたいと考えた。どちらが先に尽きるかは、やってみないと分からない。いや、演奏は一回ではない。私は機械ではなく人間で、何度演奏しても全く同じものにはならない。それは輪廻転生に似ている。同じように生き、同じように死ぬが、曲の意味や意義は少しずつ変化する。どれも美しい。同じことを舞台俳優も思っているのかと考えたことがある。彼らも連日同じ台本の人生を生きる。同じ有限の人生に生まれ、生き、死ぬことを繰り返す。それも美であると、彼らは考えているだろうか。虚空に消えていく、その時は確かに存在した美。それが芸術の正体ではないかと私は考えている。

「世紀の難曲」と呼ばれる譜面が、この世に存在する。超絶技巧を要するピアノ曲には、リスト「パガニーニによる超絶技巧曲」の第三番「ラ・カンパネラ」、同四番「マゼッパ」五番「鬼火」がとくに知られる。ヴォロドス編曲によるモーツァルト「トルコ行進曲」、アルカン「鉄道」、ラマニノフ「ピアノ協奏曲第三番の大カデンツァ」あたりもだろう。常人には困難な速度、運指範囲などをもって超絶技巧曲と呼ばれる。しかし私はそれらをごとく弾き、世界で数人しか出来なかった偉業を成し遂げてきた。

しかし「悪魔と眠る歌」（訳者によっては「悪魔と寝る為の歌」とも）は別格だ。一八

三七年のウィーンで作られた、悲劇の天才スドニール・ベルコノフによる、四楽章からなるピアノ曲である。『歌』といっても歌唱がある訳ではない。悪魔の声はまるでピアノを弾くようだ、という伝説から名付けられたのだ。だが演奏家にとってこの譜面こそ悪魔だ。およそ人間の弾ける形をしていない。作曲したベルコノフ本人しかこの曲を弾けなかったという逸話があり、二百年にわたって、時代を代表する幾多の演奏家がチャレンジしては挫折した、難曲中の難曲である。

だがその内容は最も甘美で、最も激しく、最も憂鬱で、最も真実を見る、神の造形する美を真裏から作り上げた美であるという。

ピアニストは譜面を見れば頭の中で曲を鳴らすことが出来る。何度も何度も何度も、私はこの曲を頭の中で鳴らした。理屈やイメージは分る。しかしそれはここには存在しない。私はその超絶的的技巧に挑戦し、自らの技術を宣伝したいのではなく、二百年誰も再現し得なかった、唯一無二の美を見たいのである。

私の生まれた萬家は、代々ピアニストを輩出する名門であった。幼き頃から鍵盤こそが私の友であり、師であり、父であり母であり、憎しみの相手で、喜びの相手であった。私の世界は八十八の鍵の中にこそあり、私はその全てを支配し、その八十八は私の言葉でもあった。しかし二百年の呪いに、萬家は代々取り憑かれていた。萬家のピアニストは、いつの頃からかこの難曲の再現に取り組んでいたようである。父の代でも、祖父の代でも、その前の代でも、誰も最後まで弾けなかった。それはいつの間にか、一族の悲願となっていた。譜面にしか存在しない美の遺伝子に、この世に受肉させること。それは萬一族の悲願であり、二百年の天才たちが挑んでは挫折した謎であった。

私はこの悲願を、私の代で終わらせたい。

しかし私は、命に猶予がない。

神ならぬ悪魔が微笑んだのか、私の体には悪性の腫瘍ができていくという。取り除く手術は不可能ではない。しかし肩の神経にメスを入れることが必要であり、私はピアニストに必要な指の繊細さを失うと診断された。世界中の名医を探しても、結果は同じであった。「悪魔と眠る歌」に挑む者には、呪いや災厄が降りかかるといふ。それは神ならぬ悪魔が与える試練なのだろうか？

私には時間がない。もし、不老不死であったなら。

## 2

調律師のオッカムが最後のチェックを終えると、いつもの笑顔でうなづいた。

「万事OKです。今の所はね。今後、湿気やら温度やら気圧の変化がどれくらい影響してくるか分かりませんが」

「それはそうだ。ピアノは、標高二千メートルの雪山に置かれることは想定されていない」  
「ピシッて家鳴りを起こしたりして。ホラー映画のように」

オツカムの冗談に私は笑えなかった。それは困る。

「それも悪魔の歓迎と思うしかないさ」

調律を終えた深紅のベーゼンドルファーは、私のファーストタッチを欲しがっている。

「では俊介さん、本当に一人で良いんですね？」

「有難う。迎えば二週間後だな？」

オツカムとスタッフ達は、表に待機しているへりに乗りこむ。映像スタッフ達もカメラとマイクを設置し終えたようだ。私は一人、この洞窟に取り残されることになる。

「なにかあったら無線が生きてますから！」

オツカムは叫んだ。

「あるとしたら、『成功した』しかないだろう」

私は死と引き換えに、この曲を弾かねばならないのである。

へりのローターが回り、雪煙を上げた。閉じられた窓の中からオツカムが大きく手を振る。彼は私が心配なのか、長年手を入れてきたベーゼンドルファーが心配なのか、それとも悪魔を征服できるかどうか心配なのか。全てかも知れない。

爆音を上げてへりは去ってゆく。音楽家の耳にへりの音は暴力だ。フォルティシモ f f や ベートーベンの f f f でもあんなデシベルは出ない。

私——萬俊介は、こうしてヒマラヤ山中の天然の洞窟にて、二週間の山籠もりの生活を始めることとなった。

世界で三番目に高いカンチェンジュンガの、青白い偉容が眺められた。本格的な冬の前とはいえ、辺りは新雪に埋もれ始めている。夏でも溶けない根雪に混じり、それは永遠の白の一部となってゆくのだろう。

世界中の登山家に依頼し、これだけの大きさの洞窟が過酷な環境にあるかを尋ねた。グランドピアノを置き、十分な反響が確保できる大きさの洞窟。しかも命の危険があり、免疫力がざわざわと生きる力を取り戻す場所。私は癌で、手術せず、免疫療法を選んだのだと説明すると、皆驚いた顔をした。それでもこの環境で生涯の目標を達成したいのだと彼らを説得し、ついに希望通りの洞窟をヒマラヤ山中に探し当てることが出来た。気温は地上より十二度下がる。いい塩梅だ。

ネパールまで愛用のベーゼンドルファーを運び、へりで吊ってここまで運んだ。私は、「紅き貴公子」として世に知られている。デビューで深紅に塗られたこのピアノを使ったからである。輪島の朱塗りだ。偶然妻の出身地と同じだった。結婚してからは、彼女の出生地の近くの工房で手入れしてもらっている。ベーゼンドルファーの金色フレームゴールドと相まって、派手で華麗な印象だ。私の好む華やかさを、ピアノ自身でも表現する為である。

赤いピアノの男として私は世に出、以来、この相棒とともに世界を回ってきた。運搬中の事故に備え、常に予備も運んできた。これはその予備の方だ。ピアノの寿命は三十年とも四十年とも言う。残響板となる木材を総取り換えしなくてはいけなくなる。今日の過酷な空中遊泳で、寿命は更に縮んだかも知れない。だが安心せよ我が友よ、少なくとも二週間保つガソリンエンジン駆動のヒーターで、この洞窟内は温度も湿度も一定に保たれる。洞窟の入り口は特殊なビニール素材でカーテン状態となっていて、明り取りの窓も兼ねる。凍りついてしまった時用に、叩き割る為の斧まで用意した。

私はピアノと同じ色の、深紅のビロード椅子に座ってみた。天井は高く、岩の反射音が天然の音楽堂<sup>ホール</sup>を形成している。人類最初の教会はこのような音場だったに違いない。映像スタッフ達が設置したカメラやマイクが、そこかしこからこのピアノを狙う。私の演奏の証拠、正解に至る試行錯誤の記録をする為である。万が一失敗したとしても、何故、どうして、何に失敗したのか記録できれば、後世の研究資料になると私が申し出た。

食糧も水もある。いや、私は既にヨガで減食していたから、殆ど食糧を必要としない。

誰も訪れることのない静寂が私を包む。二百年の謎など、千年以上人の訪れぬこの洞窟に比べれば、ちっぽけなものかも知れない。峻厳たる雪山達に似合わぬ、深紅のピアノと音楽堂<sup>ホール</sup>。まるで空中音楽堂だ。

さあ、悪魔との取り引きを始めよう。私は第一楽章第一小節の第一音の、黒鍵に手をかけた。

その時、ピアノの色と同じ、朱い顔の少年が入り口に立っていることに気づいた。

朱い顔ではない。——天狗？ そうだ、日本の……天狗？

「あなた、妖怪に取り憑かれていますよ」

悪魔ではなく、この場に似つかわしくない「妖怪」なる言葉で、その天狗は私の出鼻を挫いたのだ。

### 3

「よく考えたら、ここはネパールと中国とインドの国境辺りだもんな。西洋の悪魔よりも、東洋の天狗の方が似合うか」

翼の生えたインドの悪鬼、迦楼羅<sup>ガルーダ</sup>天<sup>タダ</sup>が天狗の原型、というような話をどこかで聞いたことがある。天狗を称える曲はピアノではなく雅楽や和太鼓なのだろうか、私は音楽的想像をしていた。

「呑気なことを言ってるなあ。もうその『不老不死』は破裂しそうになってんだぜ？」

「ザクロの実のようにか？」

「そうそう。パーンではじめて、中からうようよと子供が出てきて、街中に散っていくのや」

「街っていつでも、山しかないけど」

私は外の白い山々を眺めた。

「そっか！ でもその時は、萬さんが死ぬときだぜ」

私はぐくりと唾を飲みこんだ。時間がないのは分っている。

何もかも信じ難い話であった。妖怪「不老不死」だって？ 天狗の力だって？ 喋る猫に心の闇だと？ しかし鏡の中に映る不気味で巨大な顔と、何より私の心からの欲望、「もし不老不死であったなら」が、その全てを受け入れる根拠となった。

「でもさ」

シンイチと名乗った少年は続ける。出会いのインパクトの為、天狗の仮面をつけているのだと、彼はトリックを明かしてくれた。

「その『悪魔と眠る歌』を弾く為に不老不死が欲しいんだよね？」

「ああ」

「で、それを二週間で弾き切る為に、ここまで来たんだよね？」

「そうだ」

「じゃ、弾き切れれば憑き物は心から落ちるよね？」

「……そうだろうな」

「じゃ、弾き切るしかないじゃん！ 妖怪退治も何もないじゃん！」

シンイチ少年は、その場の岩に座り込んだ。

「『心の闇』ってのは、人の心の拘りに出来た癩みたいなものさ！ どうしてそういう思いに取り憑かれたのか、それを解きほぐし、そう思わない心の渦ループになるまで、つまり考えを変える以外、『心の闇』から脱出する方法はないんだ」

「成程」

私も紅いビロード椅子に腰掛けた。

「でも出口は見えてんじゃないん！ その曲が弾ければ、ドントハレ」

「ドントハレ？」

「これでお仕舞い、天晴れ天晴れ、というような意味じゃな」

シンイチ少年の膝の上で丸まっていた喋る猫、ネムカケ翁が言う。

「遠野の昔話は、必ずこれで締め括る習慣がある。ハイドントハレ、と語り部が言えば、

『めでたしめでたし』の意味じゃな」

「心が晴れる、という意味だから気に入ってる」

シンイチ少年が付け加えた。

たしかに、もし私がこの曲を弾き終えることが出来たら、心は晴れるだろう。二百年の謎は解け、萬一族の恨みも晴れるのだ。

「出口は見えた。じゃあとはやるだけだな」

「どんな曲なの？」

「言葉では言えない、美しい曲だ。ウォーミングアップがてら、一四五のテンポで弾いてみよう」

私は鍵盤に構えた。

「いかんいかん。記録を撮らなければ」

私はカメラのスイッチを入れにいった。先程天狗少年の乱入によって、録画は中断されたままであった。勿論標高二千メートルに少年と猫が来るのはおかしいから、さっきの録画は削除済みだ。

「失敗も成功も全て録画しておきたい。後進の為だ。……もうちょっと右に座って。カメラに写ってしまおう」

「オッケー！」

「一時間はかかると思う。途中で寝ててもいいぞ」

私は録画のスイッチを入れ、悪魔と眠る為の旅に出た。演奏時間は八十二分五十五秒。

「第一楽章の急、第二楽章の緩はなんとかかなりそうだ。問題は第三楽章の急……」

私は反省点をカメラに向かって報告し、カメラのスイッチを切り、目を丸くしていたシンイチ少年を見た。

「起きたか」

「うん。途中寝ちゃった」

「それは正しい反応だ。『悪魔と眠る』だからな。全ての生き物は眠る。それほどに心地良いということかもな」

「でも途中で起きちゃった」

「……ここか」

私はミスをした第三楽章の問題の箇所を何回かゆつくりと弾いた。

「そんな感じかな」

「こうミスした」

ミスの再現もまた大事である。何故そのようなミスが起きるのか、研究に値する。

「多分それかな」

「流れを変えきれなかった」

私は自分のミス进行分析しようとして鍵盤に振り返った。肩から恐ろしい程の獣の匂いが漂い、私は妖怪に取り憑かれていることを思い出した。

「……この肩の妖怪を退治するには、やはり弾き切るしかないのだな？」

「うん。『時間がない』って焦るでしょ。そうするとその妖怪が負の心を栄養にして喜ぶと思うよ！ たつぷり時間があるって思わなくちゃね！」

「確かに。……心に余裕がないと、いい演奏も出来ない」

と、少年のお腹が鳴った。

「ごはん食べないの？」

「ヨガをずっとやっててね。ほとんど食べなくても大丈夫な体になっている。二週間分の食糧はあの程度だ」

「マジで！」

その梱包パッケの小ささに少年は驚いた。

「給食より小せえよ！」

「シンイチ、麓の街ではネパールカレーが美味しいそうじゃ」

「ネムカケいつの間にか調べたの！」

「物知りの知恵袋とは、遠野の眠り猫也」

「じゃ萬さん、オレ晩ご飯食べてくる！」

「現金持ってるのか？」

「来るときに岩塩の鉱脈見つけたから、物々交換さ！」

「たくましいな」

一本高下駄を履いたシンイチ少年は、ひとつ飛びに山を降りて行った。「飛翔」と呼ばれる天狗の力であった。天狗は一步で四里進むんだって、とシンイチ少年は笑顔で教えてくれた。

私はテンポを一五五に上げることにする。作曲家ベルコノフの指定は二三六。およそ人間に弾けるものだろうか。そこから見える世界は、美しいのか？ ベルコノフは本当に、悪魔と取り引きしたのではないか？

4

標高二千メートルの山は、地上よりも夜明けが早い。

私はテントの中の寝袋で目覚めた。私の紅ベージェンドルフアーき相棒は音楽堂の中で完璧な温度と湿度を保たれているが、私は別である。私は過酷なる自然の中で寝起きする必要がある、その為の山籠もりである。

私に登山経験はないが、この洞窟を見つけてくれた登山家から山のイロハは学んだ。万が一の場合は無線もある。私は私の命を追いこむ為にここに来ているのである。「死にそう」と体に自覚させ、免疫力を高める為に。生きたいだろう、私の体よ。悪魔と眠る為に。シンイチ少年はネムカケと共に空調の効いた洞窟でまだ眠っているようである。「山で修行したから慣れてる」と少年は言ったが、そこは子供、暖かい寝床を選んだ。私は外で眠る。いや、むしろ外で眠る為にここに来た。

低い太陽は夜の蓋を開けてゆく。私の闇もこうして晴れるべきだと考えながら、ルーチンになっていくヨガの体操を始める。大自然の気クラナを体に採り入れ、大都会の汚れた空気を肺から出していく。清冽な滝の前にいるような気分になってくる。

朝の散歩に出かけた。

雪山の散歩ルートは、事前に確認しておいた。素人でも歩ける所で、しかも命の危険を感じるコース。たつぷり三十分かけて私は付近の尾根を周遊する。

落ちたら死ぬであろう崖もある。いいぞ。私の体よ、目覚めよ。出来るだけ死に近づき、そして生に反転せよ。

シンイチ少年が目を覚ましたのは、第一楽章も半ばに入ってからだ。記録カメラに映らない角度はもう心得ていたから、ギリギリまで来て座って、私の悪魔とのたわむれを聴いていた。

妖怪と悪魔は仲良くすることが出来るのだろうか。ジャンルが違うものなのか、元々同根なものを、国や文化によって名前を変えたのだろうか。どちらも見ることの叶わぬ私には、同じものとも違うものとも感じられた。私の肩の上の妖怪「不老不死」は、命の取り引きを迫る悪魔と、たいして変わらないかも知れない。この悪魔と共に眠る歌。それはいかなるものなのか。

何度かの試演のあと、シンイチ少年は質問してきた。

「この金の字、なんて書いてあんの？」

鍵盤の上に鎮座する、金のロゴマークを指さす。

「ベーゼンドルファー。このピアノのメーカーだ。オーストリア、ウィーンの名門だ」

「ドイツ語じゃな」とネムカケが言う。

「ドイツ語かあ」

「<sup>オ</sup>の上

」の上に点々が二個あるだろ。これはウムラウトとって『エー』と読むのさ。世界三大ピアノといえばスタインウェイ、ベーゼンドルファー、ベヒシュタインだ。日本のヤマハ、カワイを使うプロもいるけど、ヨーロッパのメーカーの方が歴史が長い」

「何が違うの？」

「素直すぎる質問で、逆に答えづらいな」

少年は何にでも好奇心があるものだ。私はいくつかの音を単音で打った。

「なんかカッコイイ」

「初めて聞いた時、どう思った？」

「あ。最初びっくりしたよ！ ピアノってこんなに大きい音が出るだって！」

「体もでかいからな」

「そうそう。この大きさの生き物が、鳴いているみたいだった」

「いい感性をしている」

私は感心した。子供は時に私たち大人の想像を超えてくる。

「ベーゼンドルファーは低音の響きが良い。ボディが分厚く、増幅する特別な構造をしている。それがゆえに艶があり、甘い『<sup>ウ</sup>ウィーン<sup>ナ</sup>のトーン』と言われる。私は人の声に一番

近いと思う。楽器というより、歌だな」

「そうそう！ 笑ったり泣いたり、不満を言ったりビビったりしているみたいだった」

「いい耳をしているな」

私は低音の重厚さを存分に響かせ、高音へ駆けあがって見せ、またいくつもの切ない和音を響かせても見せた。

「これは歌だ。人の手によって紡がれる、運命の糸なのだ」

「なんでこれにしたの？」

「いい質問だ。萬家は代々ベーゼンドルファーでね。私は最初好きではなかった。機械のように率直なスタインウェイ派だった。しかし『最初の作曲家』リストが愛用したのはベーゼンドルファーで、そもそも『悪魔と眠る歌』はベーゼンドルファーで弾かれていた。この曲の謎を解くのに一番だろう」

「へええ。でさ、ずっと気になっていたんだけど！」

少年は白と黒の鍵盤を指さした。

「白黒逆じゃん！」

「リストやショパンの時代は、現代と白黒が逆のこうした鍵盤を用いていたそうだよ。白が多いほうが見栄えがよい、と変わっていったそうだが」

「真っ黒のほうが悪魔っぽいよね！」

シンイチ少年の言葉に私は指先が止まった。「悪魔と眠る」とは今の白鍵、ここでいう黒鍵のことなのか？ だとすると第三楽章の解釈が変わってくる。音を立てて楽譜が私の頭の中で組み立て直される。少年は再び素直すぎる質問をした。

「この蓋、何？」

ピアノの鍵は全部で八十八で、これが私の世界の全てだ。人間の可聴域をピアノは全てカバーしていて、それを十二律音階で分割すると八十八になる。もっとも最高音の三音は、現存する楽譜の中では唯一ラヴェルの「左手の為のピアノコンチェルト」の中にしか見ることが出来ない。これ以上やこれ以下も可聴音の範囲には入っているが、音程としては認識出来ないそうさ。

八十八の音といったが、ベーゼンドルファーには、実は九十七の鍵が存在する。それがシンイチ少年の指摘した、最も左にある九の低音鍵だ。エクスステンデース普段は鍵に蓋をされ、誤って弾かないようになってる。

「まるで封印されてるみたいだね！」

「そうかも知れない。でもこれは共鳴用で……」

「悪魔の封印だったりして！」

私を再び子供の発想がハッとさせる。少年の豊かな発想など、私はずっと持っていなかった。どうして私は悪魔のことを、こんなにも考えていなかったのだろう。

「そもそもこの九つの音は、他の音が鳴った時に共鳴する弦を張ってあるんだ。ベーゼン

ドルファアの重厚な低音は、この増幅された共鳴構造にある。だから打鍵して音を出すものではない、という意味で蓋をしたり、鍵を黒く塗りつぶしてある。しかし封印を解けば、まさか悪魔が復活したり……」

私は好奇心を抑えられず、エクステンドベース蓋を開けた。

「……復活しないね」

「いや」

九つの音を打鍵してみた。長年のピアノ生活で、この音は聞いたこともなかった。

「ふむ」

この鍵を打鍵することは普通はない。しかし「悪魔と眠る歌」は普通じゃない曲だ。謎に包まれた第三楽章の主要部を、私はその封印された鍵を和音にして打ってみた。

強い。急に音の存在感が立体的に増した。霞の向こうにしかないなかった悪魔が、すぐ隣に座ったような気がして、私はぞくりとする。

勿論、楽譜には「封印されし九音」は記載されていない。しかし和音の法則を考えれば、もうひとつ下を意図的に足すことは可能だ。

私は必死に考えた。三倍速でこの悪魔の九音の出番をイメージする。

「？」

「……駄目だ」

「何が？」

「ここ」

私は楽譜の一部を指さした。

「こことこことここ、もっとある」

「何かわかんないよ」

「指が足りない。六本ないと弾けない」

「そりゃ無理だ！」

少年は笑って、すぐに言った。

「でもその人、本当に指が六本あったのかも？」

「まさか。リストはあまりにも超絶技巧ゆえに『指が六本ある』と当時誇張されたが、実際に指が六本あった訳ではなくて……」

私は言葉を止めた。作者ベルコノフにしか弾けなかった曲。二百年、彼以外に弾けなかった曲の謎。

「多指症だったのか？ 本当に」

多指症の作曲家として、真っ先に浮かぶのはジュゼッペ・タルティーニだ。バロックの十八世紀、ヴェネツィアのヴァイオリニスト。その最も有名な、タルティーニと言えば……  
「『悪魔のトリル』か」

この曲は二重奏法ダブルストップと呼ばれるふたつの倍音を同時に出す多用で有名で、その悪魔的難易

度も、左手の指が六本あった多指症であれば合点がいく。しかもその名に「悪魔」が冠されるという符合。

「どうして今まで全く気づかなかったんだ？」

私は封印された九鍵を、幻の六本目の指で触っている様を想像していた。

眠り猫ネムカケが、居眠りから覚めて語り始めた。

「多指症は歴史の中では比較的ポピュラーに見られるものじゃ。かの豊臣秀吉も右手に六本の指があったと言われているぞい。信長に『六ツ目』と呼ばれて可愛がられたと記録に残っておる」

「そうなんだ。じゃ、あるかもね、六本指の演奏！」

なんとということだ。少年の素直な発想が、二百年來の謎の扉を開けようとしている。大人たちは楽譜にとらわれ過ぎていたのか。私は麓に滞在しているオツカム達スタッフに無線を飛ばした。

「東京の妻に、ネット回線で繋げるか」

「繋げますが、そちらへは無線なので、声だけですよ」

「構わん」

妻も音楽家の端くれだ。この話は理解できる。萬財団の調査力をもってすれば、ベルコノフの墓を暴いても、彼の左手が六本指だったかどうか確認することが出来る筈だ。

その日の午前中は、この仮説に基づいた左手の運指の見直しに費やした。低音を倍増するベーゼンドルファーは、悪魔の咆哮を上げるだろう。ピアノの鍵は、低音ほど左にある。つまり、左手の小指または薬指の運指が、まるで違ってくる。もっとも、ベルコノフは左小指（1番の指）の外に、もう一本、0番の指があったかもしれない。

昼になり、私は少量の玄米粥を摂る。シンイチ少年は再び縮地の力で麓の村へ昼食に出た。標高二千メートルではお湯も百度まで沸かない。粥になるまで時間が余計にかかる。

食後のジョグに出た。朝の散歩コースと同じだ。万が一事故になっても困る。ポケットの中のGPSスイッチをオンにし、麓の村に私の現在位置を正確に報せる。コースを大きく外れたら、アラームが鳴る仕組みだ。

快晴の下、一帯を最高峰カンチェンジュンガが睥睨している。向こうには、氷河が山を削る姿を見ることが出来る。あの山は「悪魔と眠る歌」がつくられた一八〇〇年代、世界最高峰と考えられていたそうだ。インドのダージリン地方からよく見える為、古くからイギリス経由でよく知られた山だったらしい。

この絶景はなんと言葉にすればよいのだろう。貧弱な私の言葉では表現できない。いや、私は作家ではなく音楽家であった。音楽で表現すればよいのだ。この景色はすなわち、長三の和音、減五短七の和音、属九の和音だ。

天狗は山を駆けるといいうが、悪魔もこの雪山を駆けるといいうか。六本の指で、これら

の悪魔の足音を表現できるか想像してみた。頭の中でテンポを上げてゆく。がらり。

私は浮石をうっかり踏んでしまい、バランスを崩した。

咄嗟に十指を守る。子供の頃から反射で守る癖がついている。小学生の頃は、お陰で校庭に顔面からダイブしたこともある。しまった。悪魔に気を取られ、私は顔面から崖にダイブした。

上も下もわからない。視界が、ただ白に染まった。

5

夫の無線の第一声は、無事着いたでもなく、私たちへの心配でもなく、謎かけでした。

「小夜、ベルコノフは六本指だったと思うか？」と。

なんとということ。夫の説明を聞けば聞くほど、それが確からしく私には思えてきました。拡張低音九鍵エクステンドベイスを六本目の指で弾いていたのではないか、という仮説は悪魔という題名にたしかに相応しく思われます。誰もベルコノフが六本指だったなんて想像したことなどなかった筈。夫の思考は東京よりも清冽な空気に晒され、冴え渡っているのかも知れません。

私は萬俊介の妻です。音大で彼に遭った時、既に彼は「紅き貴公子」で、いつも取り巻きに囲まれていたことを思い出します。初めて話したのは学食でした。カルシウムを補給しようとして、生協の自販機でパック牛乳を買っていたら、彼が突っかかってきたのです。「牛乳のどこがおいしいの？」と。

彼は牛乳がいかに意味のないものであるか説明しはじめました。日本人は牛乳を消化する遺伝子がほとんどないから、飲んでも無駄なだけだと。

「そんなに苛々してるのは、カルシウムが足りてないからじゃない？」

私は面倒になってパックをひとつ奢ってやりました。彼はとても驚いた顔をしました。人にほどこしを受けたことのない坊ちゃんだったと、あとで聞いて笑ってしまいました。たった七十円で、彼の人生ががらりと崩れたらしくて。

それから何年経ったでしょうか。ようやく子供に恵まれた頃、彼はいつも家に居ませんでした。世界中の人々から、彼の演奏が求められたからです。息子——祥平しょうへいは父にほとんど会ったことがありません。父のCDや映像が英才教育の子守歌。ベーゼンドルファーがオモチャなんて三歳児、世界に百人もいないだろうに。

萬家の屋敷はとても広く、今はベーゼンごとヒマラヤに出張中で、だから余計に広く見えます。夫は「最後の我儘」と、莫大に稼いだ金を全額私と子に渡し、その中から一億円だけ抜きました。その資金で二週間の山籠もりをします。癌の手術は受けないと誓ったけれど、悪魔に敗北しても勝利しても、私は手術を受けてくださいと頼みました。世界的ピアニストを、どちらにせよ世界は失う。しかし祥平の父はあなたにしか出来ないし、私の

夫はあなたにしか出来ないのだと。

再び私は夫のいない、がらんとした部屋を見ました。天窓から陽光が降り注いでいます。山の天気は変り易いと言いますが、ヒマラヤは今晴れているのでしょうか。私は財団の者を呼び出し、ベルコノフの指を調べる最短ルートを尋ねました。

視界が蒼天だ。私の体はおそらく三回から七回くらい回転し、雪の中で止まった。丁度太陽と青が見えたから、私は上向きに止まったのだ。

体を起こし、何が起こったのかを確認する。ジョグルートからの滑落、およそ二百メートル。新雪と天候が私を救った。私は運がいい。滑落という体験が私の命を活性化するだろう。私は笑いながら新雪を掻き分けた。

しかし転落の際、左手の手袋が失われていた。左手は今要になる低音部を弾く大事な手だ。右手の手袋を左にはめ替え、私は元のコースに戻るよう急いだ。

だが新雪が私の足に絡み、思ったように進めなかった。

雪を下手に掻き分けた右手が、冷たくなってきた。まずい。これでは第一楽章の華麗さに影響がある。

気づいたら視界がグレーになっていた。いつの間に天気が変わったのか、私には気づけなかった。気流を山頂が切り裂いている、その風下の乱流がここである。どっちに渦を巻くかで、晴れが曇りに、嵐になったりする。

風が冷たく頬を叩いていく。雪に浸かった私の右手は、感覚を失いつつある。なるべく左手で雪を掻き分け、なんとかして元のコースに戻ろうとする。焦れば焦るほど、雪の中で進んでいるのか後退しているのか、分からなくなってくる。6番、7番、8番、9番、10番の指は生きているのか。もし凍傷にでもなったら。私は恐怖した。右手を見るのが怖い。既に何本かなかったら。私は第一楽章を頭の中で弾いてみる。指が動く。大丈夫だ、まだ指はある。手袋のある左手で、右手の指を確認する。

朝起きて指がなかったら。そんな恐怖を今でも感じることもある。喉を失ったカナリアはどうなるのか。交通事故で顔をぐちゃぐちゃになった女優は、その後どうやって表現の手段を得るのだろうか。私はこの指だけが私なのだ。それ以外私を表現する手段を知らない。言葉は私の指より饒舌ではない。私は私の中にいない。この指の中にいる。今この指を一本でも失ったら。気温が下がる。風は音を増し、私と滑落跡を雪が埋めてゆく。指は体温を吐き出し、雪と同じ温度になってゆく。冷たいのか痛いのか分からない。いや、感覚はもうない。第一楽章は三十二小節で止まってしまっている。白くまみれた、私の手袋の片割れを見つけた。慌てて手を伸ばし、私は足元の新雪を踏み抜いた。

雪の下に、裂け目<sup>クレバス</sup>があったのだ。奈落に吸い込まれる。助からなかったら。私は恐怖した。

「つらぬく力！」

シンイチ少年の叫び声がこだまし、「矢印」が私の服を貫き、岩肌にピン留めにした。私はクレバスに貼りつけられた昆虫採集の標本のようになった。

「危ない危ない！ それヤバイ奴だよ！」

シンイチ少年は私の足元を指さした。私は宙に浮いた状態で、ぶらぶらする足の下を確認する。底が見えなかった。うなり声を上げて風が吹きあがってくるのみだ。悪魔が私の喉を掻き切る用意の音だ。

「つらぬく力は、天狗の神通力のひとつ！」

お湯に右手の指を浸している私に、シンイチ少年は得意げに説明する。

「つらぬく力とねじる力があってね、つらぬく力は因果をつらぬき、ねじる力は因果をねじるの」

「良く分らんな」

「オレも原理自体は分ってないんだけど！」

少年は笑う。

「でもさ、最近ねじる力の調子が悪いんだよなあ」

「？」

「因果をねじる、って意味がちよっと分らなくなっちゃってさ」

「私も想像が出来ない」

「天狗は山の木を月に一回数えるんだ。その日はマタギは禁猟日にして、決して山に入らない」

「何故？」

「天狗が目印代りに、二本の木をこよりみたいにねじり合わせるから。その時に山にいると、木と間違えられてねじ殺されるって！」

「本当か」

「マタギに聞いてみ！」

少年はころころと笑う。

私は彼に感謝してもしきれない。一人であったなら、そのまま喉を掻き切られ、来年の春に氷漬けの男として、凍土の中から発掘されることになっていただろう。

「しかし指が凍傷にでもなっちゃったら、どうするつもりだったんだよ！」

シンイチ少年は怒っていた。笑顔から怒りへ。猫のように表情の変わる子だ。

彼は彼で、悪魔と眠る歌を最後まで聴きたいのだとブーイングする。

「そもそもさ、なんでそんな難しい曲を弾きたいの？」

シンイチ少年はまたもや素直な質問をぶつけてくる。

「よくいるじゃん！ すげえ難しくて速い曲弾いて、ドヤ顔する人！ あれ、曲芸師なら

分るけど！」

「いい質問だ。私は曲芸師ではない」

「だよね？」

「しかしピアノは誰にでも弾けるものではない。技量というものが深く関わってくる」

「うん。書道にも上手い下手があるよね」

「そうだ。下手な人にはいけない領域というのがあるのだよ。上手い人しか弾けない場所というものが」

「じゃあやっぱ曲芸自慢じゃん」

「早合点してはいけない。その曲の現す美を弾こうとしたら、それだけの技量が必要というだけのことだ。技量が問題なのではない。美が価値あるかどうかが問題だ。技量だけ必要で美しくない曲なら、弾く意味などない。その技量でしか弾けない美があるなら、技量を上上げるしかないだろ」

「でもさ、そんなに難しいなら、ロボットにでも弾かせればいいじゃんか」

私は目を見張った。この少年は賢い。質問は馬鹿かも知れず、無知かも知れない。しかし世の中の真ん中を見ようとしている。

「まさにそうだ。自動機械の方がいまや正確で、人間の方がミスをするかも知れんな。ヤマハの電子ピアノなんか楽譜をダウンロードしたら自動演奏してくれるもんな。しかし、人が弾くから違うのだと私は思っている」

「曲は曲なんじゃない？」

「違うな。……そうだな、宇宙食やカップラーメンみたいな食事と、お母さんの手料理、どっちがいい？」

「時々カップヌードル食べたくなるよね！ お母さんに怒られるけど！」

「君はいい母親を持ったな。毎日どっちかしかないなら、どうだ？」

「毎日カップヌードルは死ぬ！」

「『人が人に与える』のは、人生の最も大事なものだと思う。食、芸術、教育。これらは人が人に与えるべきで、自動化してはいけない部分だと私は思う。それは、人が人である条件ですらあるべきだと思う」

「人が人に与えることが、人が人であること？」

「そうだ。CDやネット配信は、そこに行けない人の為の代用品だ。書道のJPEGは代用品だ。本物を生で見ないと何の意味もない。フリーズドライと本物の差は、思った以上にあるものだ」

「カップヌードルより、商店街の『すみ屋』のチャーシューメンの方が美味しいよね！」

「それが人である喜びだと私は思う。人である喜びは、人が人に与えることによってあると思うのだ」

「じゃあさ」

とシンイチ少年は懐に入ってきた。

「人工知能が弾くピアノは？」

「人工知能」

シンイチ少年は、現在世間を騒がせている「人工知能裁判」について教えてくれた。人工知能は人か。殺人罪を適用するのは「誰に」か。そしてその小林誠青年が、妖怪「不老不死」に取り憑かれていることも。

「妖怪……不老不死」

私は自分の肩の荷を、再び思い出した。私は悪魔と闘うことが、この妖怪と闘うことだと思っっている。しかし小林という青年は？ どうしたら「不老不死を願う心」から脱出できるのか？

「実は近代になって、『人間には弾けない曲をわざと作曲する』という流れが音楽史にあったんだ」

私は鍵盤の蓋を開け、マルクⅡアンドレ・アムランの「サーカス・ギャロップ——自動演奏ピアノのための」の触りを弾きはじめた。軽快な馬レースを想起させる序盤が心地良い。

「ここから人間には弾けなくなる」

「なんで？」

「腕がもう一本必要になるのさ」

「マジで？」

「ネットとかあれば動画で見れるんだが……」

「よし、『水鏡の術』でアクセスしてみる！」

「水鏡の術」とは、天狗の術の一種だと少年は説明してくれた。岩手県の遠野には、不思議な言い伝えを集めた「遠野物語」があるが、そこに出てくる寺の泉に、京都の様子が映ったという。「遠くのを写す」から、ネットもいけるだろ、と少年は言った。

「これだね！」

サーカス・ギャロップの続きが、動画で見れたようだ。丁度連弾の分岐がはじまる。

「ここは右手が二本必要だろ。こうと、こう。この間左手は低音部を弾いてるから、腕が三本いる。ついでに後半はもっと必要になってくる。十一音の和音が同時に鳴るから、腕十一本だな」

「へええええ！なんでこんなにつくったの？」

「『不可能解』があることを示したかったのだろう」

私は自分の考えを述べた。

「写真の誕生によって『正確な絵画』が意味を失くしたのと同じではないかと思う。『人間には弾けない楽譜』の誕生によって、『楽譜通りの超絶技巧の曲を弾くこと』自体の競

争は終わったのだと」

「じゃあ何で？」

「そこにしかない美を、人が人に与える為に、私は弾きたい」

「……そんなにいい曲なの？」

「ゆっくりではあるが、聞いたろう」

「なんとなくだけど。寝ちゃったし」

「あれが楽譜通りのテンポになると、地獄と天国の蓋が開くそうだ」

「マジで？」

「その領域は人には行けないと言われてきた。しかしベルコノフ本人だけは人に与えることが出来た。これまで何十人の天才が挑んで、達成できなかった。私はその『美』の正体を見たいのだ」

「うーん、オレも見たい！」

「君は幸運だな。本来なら私一人で独占してたものを」

私は笑った。この少年は自分のペースに他人を巻き込んでしまう。一人でここにいたら、私は今頃悪鬼のような顔のままであっただろう。そう言うと彼は人工知能殺人事件の担当刑事、「鬼剣」戸田の顔真似をしてくれた。鬼瓦とはまさにこのことだ。

指六本の謎。焦点はそこに絞られている。

「人工知能が弾くピアノに、私は意味がないと思う」

私は悪魔に再び挑戦する前に言った。

「どうして？」

「人工知能に肉体はないからな。いずれ死ぬ者が、肉体を使って、いずれ死ぬ者へ与えるものこそが、私は芸術だと思う。つまり不老不死のする事は、芸術ではないと私は考えている」

小林氏の「不老不死」を、私は取り払うことが出来るかも知れないと思った。

この曲を弾くことが出来るならば。

## 6

一週間が経過した。運指の組み立て直しは難航した。ただでさえ複雑で速い曲なのだ。私は曲芸師ではないのだ。いっそ山を降りて、長期的に出直せないかとすら考えた。いや、私には時間がないのであった。あと七日で、全ての決着をつけたい。

「左手の指が六本」という仮説に基づき、左手の運指を六本指でやる。私の左手には五本しかないから、右手から借りてくることになる。その手の形や跳躍が不安定で、スムーズにいかず、私は暗礁に乗り上げていた。

午後、絶望的なニュースがやってきた。

「ベルコノフの左手は、五本指であった」と事実確認が取れたというのだ。複数の肖像画や書簡などで、左手が描写され、そのどれもが五本指で描かれていたという。

「なんとということだ……。仮説は振り出しに戻ってしまった。私はこの一週間、全く無駄にしてしまった……！」

私はパニックに陥った。しかし側で見ているシンイチ少年は、大人のように落ち着いている。

「凝り固まった弾き方にこだわらない、って見方が分っただけ良かったと思うけど？」

——たしかにそうだ。楽譜というのは、右手パートの高音、左手パートの低音と二段組で書かれている為、これは右手、これは左手、と先入観で指の分配を決めてしまう。しかし「六本指仮説」のお陰で、随分私は「指の貸し借り」を工夫するよう迫られた。そのせいか、曲を弾くことに姿勢が柔軟になったように思う。演奏にもそれは現れはじめていた。最初の頃の演奏は硬質であった。今は随分柔らかくなってきている気がする。それはベゼンドルファーのピアノの音質にも合っている。

「固い枕で眠るより、柔らかい寝床の方がいい筈だ」

作曲者のベルコノフは、「悪魔と眠る歌」で何を表現したかったのか？ 絶望か？ 希望か？ その解釈で、弾き方やタッチはまるで別物になってくる。

「駄目だ！」

どうしても右手が追いつかなくなった。左手はなんとかなる。しかし右手に負荷がかかり過ぎる。

「利き手が右なの？」

とシンイチ少年は再び子供のような質問を私に投げかけてくる。私はそれに答えようとする度に、先入観の鱗を目から落としてきた。

「普通ピアノは左手で低音を弾き、右手で高音を弾くものだ。器用な右手は主旋律を弾き、左手はそれに合わせた和音や通奏低音を弾く。つまり右手が主で左手が従だ」

「じゃなんで？」

「私は左手の方が得意だね」

「へえ。なんで？」

「……」

「？」

「特訓したのさ」

「特訓スゲー！」

私は嘘をついた。

私の「神の左手」は各界で絶賛されている。非利き手である左手が、あまりにも自在に

動くからである。ピアニストは左右が均等になるように鍛える。左手で箸を使い、工作も左手でやることなど、子供の頃には当然だった。

私は嘘をついた。

この「神の左手」は、特訓のみによって得られたものではなかったのだ。

「……どうしたの？」

私の心の揺れを感じたシンイチが尋ねてくる。私は観念した。

「仮に、私が弾き切ったとする。……だとしても、本当に『人が弾いた』事になるだろうか？」

「？ なんのこと？」

私は少年に生涯の秘密を言うべきか。少し迷った。しかしこの雪山での秘密は、外に漏れることはない。それほどに私はこの少年を信頼していると考えていた。

「私の左腕は偽なんだ」

「偽って、手、あんじゃん」

「私の腕は偽物だ。メスを入れて改造したのだ」

「改造？ どういうこと？」

どんなに泣き叫んだって、左手を右手並みに動かすのは不可能だ。だからこそ、泣き叫びながら我々は左手を訓練するのだ。私はその苦痛から逃れる為に、七歳の時自分の左腕にメスを入れることを母に頼んだ。

「七歳の時？」

シンイチ少年は十歳だと言った。この年端もゆかぬ少年より更に年端のいかぬ私の、それは生涯の決断であったのだ。

父の訓練の厳しさは母も知っていた。そしてその要求に答えられない、先天的な器質の問題があることも母は知っていた。私は先天的に腱が固い。柔軟性が弱いのである。

ピアニストにとって体が硬いのは致命的である。指が広がらないからといって、指と指の間をナイフで裂いた男もいるそうだ。ピアニストは、曲を弾く為ならそこまでするのだ。

「手を広げてみな」

シンイチに手を出させた。

「中指を出来るだけ折り畳む。その時、薬指を動かさない。出来るか？」

「んんんんん、無理！」

シンイチは手がふるふると震えている。四歳の私もそうだった。

「薬指を折り畳む。その時中指を一切動かさない」

「もっと無理！」

「人差し指を折り畳む。中指は伸ばしたまま」

「あれ？ これはちょっと出来る」

「何故か分るか」

「人間の腕の腱は、二本しかないからじゃな」

物知りのネムカケ翁は知っていた。

「その通り。人差し指を曲げ伸ばしする腱は、指の中から上腕部を通り、肘に、肩に繋がっている。一方、中指、薬指、小指を曲げ伸ばしする腱は、三本が一本の中に収まって入っているんだ。だから中指、薬指、小指をバラバラに動かすことは解剖学上できない」

「なるほど！」

シンイチは色々な指を別々に動かそうとしても、「人差し指とその他」しか分離出来ないことを自分の手で確認する。

「ピアニストはこれを長年かけてバラバラに動くように訓練する。十本の指が独立して動くまで」

私は十本の指を独立させて動かしてみせた。

「スゲー！」

「だが私はメスを左手に入れて、一本の腱を切開し、中指、薬指、小指の腱を切り離す手術をしたのさ」

「そんなのズルじゃん！」

「そうだ。だから私は偽ナイトと言った」

私は再び十本の指をバラバラに動かした。

「どんなに訓練しても、ここまでバラバラに動くことはないだろう。『神の左手』と人言うが、これは『悪魔の左手』かも知れない。私は悪魔と取り引きして、人より動く指を手に入れたのだ」

どうして私はこんな告白をしているのだろうか。墓場まで持っていけば悟られないものを。私は誰かに、理解されたかったのだろうか。

「私の演奏を、人間業じゃないと人は言う。そうなのさ。人間には不可能なんだ。改造人間には可能なかだけだ」

私は私の右手よりも動く左手の動きを止めなかった。

「……改造人間がこの曲を弾くのと、人工知能がこの曲を弾くのに、何の差があるというのだ？ 私がこの曲を弾き切ったとしても、私は何を達成したというのだ！」

息を荒げた私は、拳を握った力をどこにもぶつけなかった。手をかばうことが習慣になっているからである。

「弾いてから言えば？」

シンイチ少年はあっさり言った。

「弾けない言い訳にしない方がいいよ」

少年は時に大人より真実に近い。残酷な真実を、無邪気な剣のように突きつける。

「……」

私は静かに椅子に座り、どうしても弾けない部分の反復を続けた。

残り三日となった。

これまで天候の良い日が比較的多かったが、吹雪き始めた。嵐が来ている、と風を見る天狗たるシンイチ少年が教えてくれた。今夜は外のテントで眠れないかも知れない。

今日は散歩をすることも叶わず、籠りっ切りになるだろう。嵐の低音が洞窟内に通奏低音を満たしている。目を瞑ると、嵐の腹の中にいるようだった。

この絶望の和音は、絶望の報も連れてきた。

街から無線が入った。妻の小夜と萬財団が、ベルコノフの指について、新たに歴史的発見をしたという。

「右手の指が、四本しかなかっただっただけ？」

無線経由でのスカイプ通信は、嵐の影響もあって途切れがちだが、しかしその重要箇所は繰り返し伝えられる。

「ベルコノフの肖像画では左手は必ず描かれていて、五本指なんだけど、右手は組んだ左手の下に隠れていたり、布の陰になっていたりして描かれていないの」

小夜は手短に調べたことを伝える。

「ベルコノフのデスハンドが残っている博物館も突き止めた。左手しか現存していない。

もちろん五本指。しかし右手は破棄せよ、との遺言があったそうよ。私たちは生前の記録を探して……」

「墓まで暴いたか」

「はい。確認しました。薬指が、第二関節までしかなかったの。幼い頃栄養不足と凍傷で失ったという友人の日記も見つかった。演奏は『指の動きを見られたくない』という理由で布を被せて行われていたと」

「それは文字通り運指を盗まれたくないからかと、解釈されていたが……」

「真実は違ったのよ」

「……欠損を隠し続けた男」

嘘をついて偽の腕を持つ私と、二百年前の指の足りなかった男。時を隔てて、私たちは楽譜を境に対峙する。

私はピアノの前に座った。右の薬指を使わず、左手側に六本を使う運指。頭の中で何度も何度も繰り返す。

「やってみるよ。ありがとう」

「珍しいわね。苛々してないの？」

「牛乳は荷物の中に入れたからな」

私は袖を裂き、長い紐をつくった。右の薬指だけ縛り、一方を肘と縛る。薬指だけ動か

ないようにするギブスである。

十一本必要と思われる楽譜を、果たして九本で弾けるのか？  
嵐は益々ひどくなる。対照的に、私の心は水のように静かになってゆく。

「駄目だ。指が足りない」

第二楽章で既に挫折がやってきた。左手の方が指が多いが、右手の方に指が欲しい。  
「手をクロスさせちゃ駄目なの？」

シンイチ少年は言った。

「本式の弾き方じゃなくて曲芸だって、テレビで見たけど」

「いや。指が足りなきゃ交差法はやることもあるよ。あからさまに曲芸にする輩がいるだけ……」

私は交差法で問題の箇所をクリアする。指が一本足りないのだ。正式も非正式もない。楽曲が最優先だ。今まで右手で弾いていた所が左手に、左手が右手になる。鏡像反転はとっさに混乱しやすい。何度も何度も間違え、体で覚えるしかない。

だが第三楽章の指の素早い動きに、紐が邪魔になってしまう。反射で薬指を動かそうとしてしまう。

邪魔だ。右手の薬指が邪魔だ。

ベルコノフはこの指がなかった。ない前提で楽譜があるんだ。

私は洞窟の外を見た。吹雪は勢いを増している。風は上から下から縦横無尽に吹いている。

「どうしたの？」

演奏が止んで、ネムカケを膝に抱いていたシンイチは目覚めた。

「凍傷になれば、右薬指を落とせるのか？」

氷を割る用の斧は、入り口に立て掛けてある。

8

「何馬鹿なことやってんの！」

シンイチ少年の叫びは、風の中にすっ飛んでかき消える。

雪の粒が真横から頬を殴る。洞窟の外に立っただけで体が持っていかれそうになる。私は四つん這いになり、烈風に対抗した。膝から手袋から、芯まで冷えてゆく。

——おあつらえ向きだ。

私は右手を手袋から出した。

薬指を一本に伸ばし、雪の中にぎくっと入れる。

「やめなよ！ その後どうなるの！」

「きつく縛れば血も止まるだろ！」

「痛いかあるでしょ！ そんな状態で曲なんて弾ける訳ないよ！」

「俺は精神だけでここまで持ってんだ！」

私は癌である。もうすぐ死ぬのだ。手術をしたとしても生存率は低い。私には生涯の望みがある。その為に、全てを棒に振ってこんな無茶な山籠もりをしたのだ。

私は狂っているのか。人が生まれ、死ぬ、その僅かな一瞬、なぜ人は狂わないのか。

美は無限だが、音楽は有限だ。悲劇の天才ベルコノフが作った「悪魔と眠る歌」は、永遠に忘れられ、死んでしまう。有限なる命を持つ者として、私はこの美を永遠のものにしたい。

私は斧を薬指の上に置いた。感覚はない。上出来だ。左手を斧の上に乗せ、全体重で一気に踏み抜いた。

白に散る赤は美しい。

かき消してゆく白の永遠に、せめてもの反抗おうとする、それは人の命の爆発であった。

## 9

第一楽章を九本の指で弾くと、私にはベルコノフのコンプレックスが伝わってくるように思えた。

一般には、この楽章は悪魔との邂逅を示しているという。悪魔とは、自分の弱さのことではないかと私には思えた。右手の薬指がないことを悟られないように、右手を少なめにしている。左手の連弾を多めにし、急激な駆け上がりと駆け下りが目眩ましのように私には思えてきた。従来の説では、これは悪魔が自分の周りをうろろし、誘惑してくる様を表現しているとされていた。だがこれは違う。そう思わせることが目的で、真の意図は右手のコンプレックスを隠している。隠している心の自覚こそが、悪魔という名の弱い心に出会うことなのではないか。

テンポを落した第二楽章は、明るく流麗な踊りのようにピアノが歌う。悪魔に褒められ、心をくすぐられ、偽の有頂天になっている様を表現していると従来では言われてきた。甘言に騙されているのだと。

いまや私にはこの様はまるで違って見える。弱い心を見抜かれまいと、騙されたこととして責任を悪魔に転嫁しているようにだ。ワルツのステップを取り入れた中盤では、悪魔と踊る情景が広がる。誘惑されたのではない。これは狂言だ。私は嘘をついている。嘘の仮面を被っている。

驚くべきことに、弾き方もタッチも変えていないのに、薬指を失うことで、見えてくる景色がまるで違ってきた。ベルコノフは嘘をついた。二百年間、この曲を弾き、伝記を伝

え、再現を挑もうとする人々を、ことごとく騙し切ってきたのだ。

悪魔などいない。いるとすれば、己の心の中にこそいる。

問題の第三楽章だ。最も技術が要求され、最もテンポが速い箇所だ。

エクステンデドベース 拡張低音鍵盤を使い、六本の指を低音部に使う。交差法も多用しなければならない。

しかし問題は、この難関な技術を使って、何を表現しているかだ。

これは悪魔との闘争である。誘惑してきた悪魔に気づき、闘い、征服し、第四楽章において和解して共に眠る、クライマックスの闘争部である。それ自体は従来の説と違ってはいなかった。しかし悪魔が外からやってきた者ではなく、己の心の中にいる弱さのことだとすれば、闘争の場所とは心の中だ。つまりこれは激しい葛藤を意味しているのである。嘘をついた男。その嘘にさいなまれ、虚偽の名声を得た男。それは私そのものではなかったか。これは後悔だ。自分を責め続ける嵐だ。だから極限まで己を苛め抜くのだ。心が持たない。私は失神しそうになる。だが右の薬指の痛みが私を正気に戻す。私は私の嘘と向き合わなくてはならない。謝罪し、公のものにしなければならぬ。自分の弱さを、認めなければならぬ。私は訓練の辛さを手術で逃げた改造人間だ。自動演奏機械になろうとした愚かな男だ。七十円の牛乳で高慢な鼻を挫かれた、世間知らずだ。妖怪に取り憑かれる程の負の心を持った男だ。息子の顔など殆ど見たことのない、音楽に憑かれた男だ。私は何の為にこの曲を弾くのだろう。己の心のちっぽけさを再確認する為だけに弾くのだろうか。

嵐の音など、私にはとうに聞こえていなかった。世界で最大の山脈を覆う爆弾低気圧は、複雑な峡谷を駆け抜ける巨大な雷龍だ。人類が人類になる何万年も前から、音楽が生まれるずっと前から、この岩たちは、この風たちは、ただ暴れ、ただ沈黙してきた。

一台数千万円のグラウンドピアノが何だというのだ。年間三百台しか作られない、何百人もの職人の手作りが何だというのだ。それを弾く何万人のピアニストが何だというのだ。荒れ狂う龍の数とそれ以上の悠久の沈黙に比べて、私たちに何ができるといえるのか。

まる二日が経っていた。私は寝てもいかなかったし、食事を摂ってもいかなかったらしい。第四楽章の最後の音を弾き終えたとき、最終日の夜が終わり、世界で最も早い朝がやってきていた。

拍手が聞こえた。そうだ。一人の少年と一匹の猫が、私の演奏を最後まで聞いてくれたのだ。

少年と猫は涙を流していた。私も涙を流していた。

人間は小さい。人間は死ぬ。人間は嘘をつき、人間には闇がある。

「悪魔と眠る歌」とは、それと眠るしかない人間を描いた曲だった。

幸あれ。

私はそう思うしかなかった。

幸あれ。

だから私は泣いていたのかも知れない。

地平線から太陽の光が差した。光の矢が私の相棒に刺さった瞬間、びしりと大きな音が響いた。気圧や温度や湿度が合わない時、木材同士の反りが合わず、軋むことがある。家鳴りと呼ばれる現象だ。軋むだけでは済まなかった。私の深紅の相棒は、身体の隅々からばきりばきりと大小の悲鳴を上げはじめ、その度に細かいひびを生じた。ばきんと断末魔を上げたその瞬間、鋭い木片になって飛び散り、砂のように崩れさった。

私の指に、最後の音の感触が残っていた。

悪魔は去った。生贄を喰らい尽くして。

「第三楽章のあの部分、まさか椅子から立つと思わなかったよ」

シンイチ少年が声をかけた。

「……何のことだ？」

「……覚えてないの？」

「私は曲の中にいた。椅子に座っていたのか、立っていたのかは分からない」

「こうしてたんだぜ？」

シンイチは後ろ向きになり、後ろ手にピアノを弾く格好をした。

「交差法じゃクロスした腕の可動範囲に限界がある。……そうか、そうすればあそこは弾き易い」

「って、さっきアンタがやったのに！」

「そうか……無意識だった」

技巧などどうでもいい。「悪魔と眠る歌」は人の心を歌ったものだった。そっちの方が重要だ。

「惜しむらくは、生演奏の観客が、大自然と、少年と猫だったことだけか」

「超ぜーたく」

私はカメラの録画を止めていなかったことに気づいた。私は一人で山籠もりしていることになっている。彼らの声すら入ってはならない。

だが、飛び散ったペーゼンの破片が、空中に浮いたままであることに私は気づいた。

おかしい。昇る筈の太陽が、山間からわずかに顔を出したまま、一向に昇って来ない。

「不動金縛りの術」

シンイチ少年は種明かしをしてくれた。

「弾き終えた瞬間から、時は止まっていたのさ。拍手したかったので！」

シンイチ少年はウインクして、腰のひょうたんから天狗の面を出して被った。

「これより、天狗の妖怪退治をはじめます」

朱鞘の短剣を出し、天に構えた。

「妖怪不老不死。萬俊介の心より遂に落ちる也。抛り所なき妖怪よ、心の闇よ、晴れよ」

封印のようなものを解き、黒い刃を抜く。

「火よ在れ」

黒い刀から炎が上がった。その炎と共に小天狗がひと舞いすると、辺りに炎が散らばり、照らされたものが浮かび上がった。私は私の、心の闇を見た。

いくつもの顔が融合したような恐ろしい顔の妖怪。不老不死を願う負の心。鏡の中にか存在しなかったものが、今日の前に晒された。

「一刀両断！」

神速の刀術で、天狗が火の剣で妖怪を斬った。

剣の炎は妖怪に燃え移り、紅蓮の火柱となった。火の中に消えてゆく私の心。人の弱さ。「悪魔」とベルコノフが呼んだもの。

断末魔とともに炎が尽きた時、妖怪は真っ白な塩の柱になっていた。

「清めの塩」と少年の声に戻ったシンイチは言った。

「これにて、ドントハレ！」

不動金縛りが解かれ、録画を再開したカメラを私は止めた。太陽は昇りはじめ、我らが洞窟を暖かい光で包んだ。

嵐は去った。後には何も残らない。青空だけだ。

「私はピアノストを引退するよ」

シンイチ少年とネムカケに、私は声をかけた。

「そうだろうと思った」

「手術も受けるさ。治ればラッキー、治らなくてもそれまで」

「……なんか、スツキリした顔になったね」

「文字通り、憑き物が落ちた訳だからな」

「ははは。そりゃそうだ！」

「息子の祥平が、ピアノを習いたいと言うなら、私は鬼にならなければならんな。かつての父のように」

「え、だって『悪魔と眠る歌』は弾けたじゃん」

「アレは手術した左腕のチートがあったからだろ。息子は素で弾ける才能がある。何せ俺と愛する妻の子だからな」

「何歳？」

「三歳」

「親バカにもほどがあるぜ！」

シンイチとネムカケが一通り笑うと、へりの音が聞こえてきた。

二台。

「……しまった。ピアノ回収用の二台目のへりは不要、って言うの忘れた！」

振り返ると、少年と猫はいなかった。

ふらりと初めて来た時のように、小さなつむじ風を残して、いなくなってしまうていた。

私の中には、熱情が残っている。

深紅に染めたベーゼンドルファーは、その象徴だと私は考えていた。

今やそれは炎の色となって、私の心に焼きつけられている。

「炎のババア」の話をしよう。

いや、この言い方は彼女にとって失礼かも知れない。しかしシンイチがそう名づけ、本人も気に入ったのだから悪くない呼び方だ。しかしそう名づけられる前、彼女は「黒薔薇」と恐れられる、やくざの女組長だった。修羅の国、北九州には大手の組が五つあるが、そこより下った十六番手に位置する、山鹿組さんかくみの組長が「黒薔薇」である。

背中に真黒な薔薇の刺青が咲くというもっぱらの噂だが、見ることができるのは夫となる者だけという。代わりに彼女はいつも黒い長衣コートを着込んでいる。黒い艶糸の、黒い薔薇たちが渦を巻く。

黒薔薇。華やかで不幸な花。彼女に睨まれたら生きて帰れない、それは死神の花である。

「『黒薔薇』はいるかア！」

峡谷会きょうくかいの合田ごうだと金城きんじょうが、扉を蹴破って派手に入ってきた。

緊張が走った。ここは山鹿組の事務所本部だ。なんということか、峡谷会が殴り込みだど？ その場にいた者は全員、懐の得物に手をかけた。

「お止し」

窓際のサポテンに水をやっていた、黒いコートの背中から、声の矢が放たれた。

細かく、大きく縫い込まれた背中の黒い薔薇が、その声に反応して舞うように見えた。

「あんたたち、このコートが見えての狼藉かい」

「黒薔薇」は振り返った。鋭い目の光に一同は気圧される。還暦も近い、たかが一人の婆アに、こうも押される筈がない。しかし黒薔薇が一步進むと、一步後退しなくなってしまう。「黒薔薇」は白い総髪を揺らせ、三步前に進んだ。

「組長……スンマセン……組長……スンマセン……」

合田と金城に両脇を挟まれた、浅黒い肌の男が涙を流して謝っている。何度殴られたのだろう、ぐちゃぐちゃの顔面は、浅黒い肌なのか、真赤な血なのか、あざの色なのか、それらがすべて混ざってしまった油絵のようになっていいる。

「滝本たきもと。何をやってんだい。お客人にお茶を」

黒薔薇は、合田と金城から目を離さぬまま指示を出した。

「うちのカルロスが、何かやらかしたんですか？」

両手を出し、虎の革張りのソファを彼らに勧める。

彼女は、カルロスの左腕が明後日の方向に曲がっていることに気づいた。

「カルロス、それは自分でうっかり折ってしまったのかい？」

「……そうだな」

カルロスを脇に抱えたまま、みしりとソファーに座った合田が言った。

「折ったのは我々だが、元はといえばこいつのうっかりから始まってんだ。結局はこいつのうっかりだと言える」

「そうかい」

滝本と呼ばれた眼鏡の男が、熱い茶を出す。眼鏡の奥に縮こまった目と、小さく震える手を見て、黒薔薇は何も言わず茶を勧めた。

「山鹿組十八代目、『黒薔薇』こと、丹波千代がお話を伺いましょう」

事の発端は、カルロスの情婦初美の浮気であった。自分より若い、半グレの須田と通じてしまった。それを知ったカルロスは激怒して初美を殴りに行った。

ここまではただの痴話喧嘩だ。問題は、その場が峡谷会のチンピラと半グレグループの、喧嘩の場であったことだ。

カルロスは怒ると周りが見えない癖がある。まず初美を殴り倒し、次に須田を殴ろうとした。だが誰が須田なのか顔を知らない。収まりがつかないカルロスは「須田ー！」と叫びながら立て続けに三人を殴り倒した。その三人が、喧嘩をはじめようとしていた両陣営の人間であったから話がややこしくなった。しかもまだ須田は殴られていない。

大乱闘になった。須田は逃げようとしたが、峡谷会のチンピラに殴り倒された。

ここまででもただの痴話喧嘩だ。規模が大きくややこしいだけで、裏社会が介入するほどのことでもない。痴話喧嘩をしていればよい。問題は、須田が誰か分からないことで、錯乱したカルロスが叫んだ言葉である。

「俺を誰だと思ってるんだ！ 山鹿組のカルロスだぞ！」

山鹿の名前を出されては、峡谷会も引き下がれなくなる。峡谷会は応援を呼び、カルロスは更に暴れまわることとなった。

「で、我々が事を収めてきたというわけですわ」

「いやあ、いい腕っぷしだ。ウチのチンピラじゃ歯が立たない。腕でも折らにやならんほど、手がつけれなくてね」

「……成程」

黒薔薇の千代は茶を啜り、カルロスを見た。

「カルロス、今のお話に、間違いはないかい？」

「……ひとつだけ、抜けています」

とカルロスは息も絶え絶えに言った。

「なにがだい？」

「須田に『初美に手を出せ』と言ったのは、峡谷会の人間だと聞きました」

合田も金城も初耳だ、というような顔をした。

「ほんとうの事ですか」

と千代は落ち着いて聞く。

「初耳だ」

答えた合田に、カルロスは叫んだ。

「初美を薬中ヤクチュウにしたのは峡谷会なんだろう！ 須田はその売人だって話じゃねえか！」  
眉をしかめて、千代は合田と金城に尋ねる。

「峡谷会の方々は、まだ薬などを市中に流してらっしゃるのかしら？」

「知らぬ」

「存ぜぬ」

合田と金城は合言葉のように言う。千代は言った。

「薬は人を壊す。治しやしない。だから我々は任侠の徒として、やっちゃいかんと考えています。これは先代からの考えです。峡谷会の皆さんはどうお考えですか？」

「……」

合田と金城は立ち上がった。

「二度と組の名前で喧嘩しないで欲しい。その我々の要望を伝えに來ただけだ」  
二人は礼儀正しく頭を下げた。千代も立ち上がって同じく返す。

金城は帰り際、扉についた自分の靴跡を、丁寧に袖で拭いていった。

「自分より自分を大きく見せる為に、看板を使うな」

千代はカルロスに厳しく言った。

「滝本、熱い茶を」

滝本は急須から熱い茶を注ぐ。

千代は急須の方を奪い、カルロスの傷だらけの顔面に熱湯を注いだ。彼の叫び声より通る声で、黒薔薇は言う。

「いい消毒になるだろ」

「全く……。いつになったら十九代目は育つのかねえ……」

サボテンの水やりを続けながら、千代はひとりごちた。

若頭の筆頭の滝本勝まさひろは、リスクばかり考えて攻めに出ない。頭はいいが、眼鏡の奥に隠れてやがる。今の所茶出し係がいいところだ。手が震えて、やくざの茶汲みがつとまるかい。二番手の木村修治しゅうじは頭が足りない。さつき日本刀を抜いたはいいが、振りかぶったら天井に当たることまで気づいていなかった。三番手のカルロス・ヂ・モラエス（リオ訛りでは、deをヂと発音するのだそうだ）は、明後日の方向に飛んで行く鉄砲玉だ。

三人とも目をかけてきたつもりだ。誰か手柄を立てようとはしないのか。私は彼らの尻を拭ってばかりだ。

誰もいなくなった事務所で、千代は大きなため息をついた。

時間が欲しい。この三人を育てる時間が。

「ため息をつくつと、妖怪が成長してしまうぜ」

窓の外に朱い顔あかが現れて言った。

「ため息は『心の闇』の栄養分だからね！」

「は？ ……何だ？」

千代は思わず後ずさる。朱い顔。吊り上がった眉。長い鼻に金の目。逆立った髭。

天狗だ。 ……天狗？

「ここはビルの五階だよ！」

「天狗の『飛翔』」

その小天狗は胡坐を組み、尻の下で葉団扇を煽いで飛んでいた。膝の上には太った虎猫が乗っていて、大あくびをしている。

「な、 ……なんだい ……天狗だって？」

「あなた、妖怪に取り憑かれていますよ」

「なんの話だよ！」

「その妖怪の名は、『不老不死』」

## 2

「まさか窓から天狗が入ってくるとは。 ……長生きはするもんだ」

千代は見せられた鏡で、しげしげと自分の肩の上の妖怪を眺めて、感心するやら落胆するやらであった。

「私は妖怪に取り憑かれちゃってるとは」

「そう！」

天狗の面を外し、ひと通り妖怪「心の闇」について説明し終えたシンイチは言った。

いくつもの顔がくつついたような肉達磨。紫を中心とした毒々しい肌の色。そして大型の獣のような匂い。足のようなものがそこから伸びていて、黒薔薇の刺繡の下に潜り、体内——心臓に達している。

「私は時間が欲しい。そう急ぎ立てられるような焦燥感があるのは、この妖怪の所為だっというんだね？」

「そう」

「いつから？」

「それを聞きたいんだ。最初に不老不死を願った、小さな『芽』がある筈なんだよ。それ

が徐々に大きくなって、いつからか消えないわだかまりとなり、渦ループに成長し、その考え方から脱出できなくなった。妖怪『心の闇』はそれを好物にするんだ。取り憑いて、闇を吸い、しかもその闇をどんどん増幅する」

「大きくなってくのかい」

シンイチはうなづいた。

「そして宿主が死ぬまで吸って、破裂する」

「中から子供がうじゃうじゃと湧いて来るのじゃよ。虫のようにの」

鹿の剥製をしげしげと見ていたネムカケが付け加えた。山に跳ぶ鹿は、山鹿組のシンボルである。

「寄生虫だな」

千代は苦々しく言った。

「あるいは癌か」

「たしかに。『心の闇』は、心の癌かも知れないね」

「で？」

「『不老不死』を願わなくなれば、妖怪は外れる」

「……どうということだい？」

「それが正直難問なんだ。妖怪『不老不死』はオレが今まで解決してきたケースで、最高の難易度だよ！ 妖怪『あとまわし』は何もかもあとまわしにするまで待てば、することがなくなって終了、妖怪『なかまはずれ』は仲間外れの仲間外れ……を繰り返したら、仲間がいなくなって一人になって終了。でも『不老不死』を求める心は、どうやったら晴れるのか、やり方が分らないんだよ」

シンイチは同様に妖怪「不老不死」に取り憑かれた、小林（現在継続中）と、萬（解決済み）の話をした。

「萬俊介……って、あの『紅き貴公子』？」

「そう。やっぱ有名なんだね！ 『悪魔と眠る歌』を弾く為に、時間が欲しいと思って

『不老不死』に取り憑かれた」

「どうやって退治したんだい？」

「『悪魔と眠る歌』を弾き切って、目標を達成できたからね。『憑き物が落ちた』のさ」

「……成程」

「でも『人工知能裁判』の小林さんは、そもそも彼が永遠の命を求めている所から、妖怪に取り憑かれてるし」

「それはまだ退治できていないと」

「見る？」

シンイチは腰のひょうたんから金色の遠眼鏡「千里眼」を取り出し、東京の方向に向けた。部屋にいる小林の妖怪「不老不死」は、裁判の停滞にイライラしているのか、それと

もネットで自分の記事を見た不安か、成長を始めているように見えた。

「人工知能で、私と同様、不老不死を強く願っている……」

千代は納得した。

「『時間がない』って思うことが、萬さんと千代さんの共通点だ。小林さんの不老不死を倒すヒントになるかも、と思ってここまで来たんだ！」

「ヒマラヤから東京に帰る時に、ふいと九州を見たら、居ての」

ネムカケが空を飛ぶ真似をし、下を見て発見したゼスチャーをした。

「……で。千代さんの『時間が欲しい』ってのは、生きたいってことじゃなくて、次の代の後継者が育って欲しい、って意味だよな？」

「そうだね」

「じゃ次の後継者が決まれば、死んでもいい？」

「これ、何ちゆうこと聞くんじゃ」

ネムカケはシンイチをたしなめた。

「ははは。はつきりしてんのはいいことだよ」

千代は笑った。こういうまっすぐな男は好きだ。

「返事はイエスだ。先代に引けを取らない、山鹿組を背負って立つ次の代が出てくれば、私はどうなっても構わないよ」

神棚に飾られた、先代十七代目の写真を千代は見た。ずいぶん古ぼけていた。しかしそこに写るのは、若く凛々しい男の写真だ。この世の全てを喰らい尽くそうとする、ぎらぎらした覇気が写っていた。その年に死んだのだろうか。やくざの組長というよりは、暴走族のリーダーくらいにシンイチには見えた。

「そうすれば、私はようやくこの人の元へ逝ける」

その表情に、ただならぬ思いをシンイチは感じた。ただならぬ思いは、心の拘りとなることがある。

「恋人だったの？」

「夫、といたい所だけど、式が間に合わなくて、籍を入れる前に死なれちゃったよ。未亡人になり損ねた。ずっとそれからこの組を守ってきたんだ。……もう孫くらいの歳になっちゃったかねえ」

「萬さんはね、人の弱さに向き合ったとき、妖怪が心から落ちたんだよ」

「どういうこと？ 望みを叶えたから、不老不死はどうでもよくなったってんだろ？」

「うん。でも事は単純じゃない。永遠に残る芸術とは、人の心の弱さを認める芸術だったって」

「？」

「オラー、ドーン！ ってやればいいってことじゃないんだ。人は人の心の弱さを知る必要がある。『心の闇』退治するのは、自分の弱さを見つめることかも知れない」

「子供の癖に深いことを言うね」

「シンイチはこれまで、色んな闘いを経てきておるのじゃ」

ネムカケが感慨深く言った。

「でもさ、やくぎの組長が弱いわけないよね！」

小林の心は、弱いのだろうか。一見完璧な貴公子に見えた萬俊介も、心の奥に嘘を抱えていた。この最強の女組長が、どんな闇を抱えているというのか。

二時間後、事態は急転する。

カルロスが病院から消えた。

山鹿組のバッジを、置き去りにして。

### 3

「一体どういうことだい！」

千代は組の者たちを叱責する。木村は怯えながらいう。

「すいません組長。ちょっと目を離した隙に……」

「謝罪はどうでもいい。武器はなくなっていないだろうね？」

「銃と、弾と、手榴弾が一つ」

「馬鹿野郎！」

天狗のかくれみので話を聞いたシンイチは、一本高下駄で天空高く飛び上がった。

「どこにいると思う？ カルロス！」

「おおかた復讐じゃろ。峡谷会に殴り込みじゃろな。今はまだ潜伏して機を伺うか……」

「とりあえずどっかに登って、『千里眼』で探さなきゃ！」

周りを見渡すと、八幡製鉄の製鉄塔が炎を噴き出していた。

「あれか！ ちょっと熱そうだけど！」

シンイチは腰のひょうたんから金色の遠眼鏡「千里眼」を出し、火を吹く製鉄塔の鉄骨に座り、カルロスを探した。

「ちくしょう！ 初めての街じゃどこが峡谷会かも分かんないよ！ あとやっば熱い！」

一方山鹿組事務所では、滝本が怯えながら言い訳を考えていた。

「しかし組長、カルロスはバッジを置いていったんですよ？」

「それがどうした？」

「カルロスは組の名前で行動しない、という宣言に思えます」

「立派な男じゃあないか」

「つまり、山鹿組は関係がない。自己責任です」

「馬鹿野郎！」

千代は滝本の頬をはたいた。

「たとえカルロスが我々を見限っても、我々はカルロスを見限りやしねえよ！」

「……」

「カルロスを一人にさせちゃいけねえ！ カルロスを一人で死なせるな！ いいか、任侠つてのは、誰も一人にさせちゃなんねえんだ！」

どん。

爆発音に、皆が振り返った。

「爆発だ！」

シンイチは天狗の面を被り、一本高下駄で煙の上があった方向に跳ぶ。

繁華街の雑居ビル、一階から白煙が上がる。迷路のように奥まったその先。峡谷会の事務所である。

片手運転の原付で逃げる男。追う車。

「カルロスだ！」

車から身を乗り出した峡谷会の面々が、次々に銃を構えた。

「天狗風！」

シンイチは腰のひょうたんから天狗の葉団扇を出し、ひと煽ぎした。

天狗の得物として最も有名なのは、葉団扇であろう。ひとつ煽げば風が吹き、ふたつ煽げば石つぶて、みつつ煽げば火が燃えるという。山の中では、梢も揺れずに予告なく突風が吹くことがある。これを天狗風といい、天狗が葉団扇で起こすという。自然の起こす風は徐々に起こるが、天狗の起こす風は予兆なく最大に吹く。

その天狗風は追手の四発の銃弾を曲げ、カルロスの背中から辛くも逸らした。ラーメン屋、宝石商、靴屋、革ジャン屋のショウウィンドウが砕け散った。

もう一台、追手の車が現れた。カルロスはバックミラーでそれを知り、アクセルを吹かす。大通りを信号無視で突っ切り、一台はトラックと衝突してスピンのした。

「ムチャすんなよ！」

シンイチは葉団扇をふた煽ぎし、石つぶてでもう一台の車の下に砂利を敷き、スピンのせて止めた。

その刹那、片手運転の原付は歩道に乗り上げ横転、投げ出されたカルロスは後続の車に跳ねられた。

不動金縛りの術は間に合わなかった。シンイチは早九字はやくじの刀印訣を四縦五横しじゅうごおうの六字まで切っていたが、展開の速さには及ばなかった。

カルロスは頭を打ち、動かなかった。

「暴力団同士の抗争のニュースです。山鹿組の若頭三番手、カルロス・デ・モラエスが銃

撃戦と街中のカーチェイスの果てに死亡、また峡谷会の構成員、合田讓、金城了が手榴弾で死亡。多数の重傷者を出す大立ち回りとなりました。両会は抗争に入ると見て、県警は警戒を強めています。今回の犯行に使われた炸薬式の手榴弾は……」

テレビのニュースが今回の顛末をまとめていた。

「馬鹿野郎。『デ』はリオ訛りじゃ『ヂ』と発音するんだよ。勉強不足め」

事務所の机の上には、ありったけの銃火器や、日本刀や、ロケットランチャーが並べられていた。こちらから仕掛けるつもりはない。しかし死んだ数は向こうが倍だ。峡谷会は報復に来るだろう。カルロスが仕掛けたことだ。向こうには復讐の御旗がある。

ややこしいことになってしまった。山鹿組の後継者どころではなく、ましてや妖怪のことを考えてもいられなくなった。千代はテレビを消し、皆に言った。

「私は山鹿組の後継者に、三人の候補者を考えていた」

組員たちは静かに組長の言葉を聞いた。

「滝本、木村、そしてカルロスだ」

滝本と木村は目を伏せたままだった。

「三人とも孤児だった。親が死んだか生きてるか分らない。滝本と木村は、別々の孤児院で引き取った。カルロスは博多でチンピラをやっていて、拾った。三人は捨て犬だった。三人が三人とも、捨て犬の目をしていた」

千代は強いウイスキーをあおった。少し自分をいじめたいらしい。

「家族のいない者たちに、私はここを家族だと思って欲しくて接してきたつもりだった。そのやり方は、間違っていたのだろうか？ 私は女だ。だから母親のように接したのかも知れない。私には子供がいないから、子供の育て方は分らない。だが私は母親としては、少々息子たちを甘やかしすぎたのかも知れない」

千代は窓際のサボテンを見た。その隣には、いくつもの鉢植の植物が、色とりどりの花を咲かせている。

「カルロスは私の代わりに水やりを良くしてくれていた。こんなに花が咲くまで、丹念にだ。昔私は死んだ先代に、鉢植えをプレゼントしたことがあってね。サボテンなら枯れないだろうと思ってサボテンにしたのさ。ところが先代はあっさり枯らしちゃった。『水をやらないと死ぬとは思わなかった』っていうのさ。『男なら、与えられるまで待ってないで自分で取りに行くだろ』ってね。植物にそんなことが出来るわけないのにさ。……男ってのは、そんな生き物なのかも知れない。花に水やり出来るような輩は、男じゃないかも知れないね」

「つまりそれは……、日常が終わって、戦争に入るってことですか」

木村は恐る恐る尋ねた。

「そうだね。母の乳を吸ってる時間は終わったってことだね」

黒薔薇のコートを翻し、千代は組員に告げた。

「いいかい。こちらからは仕掛けるな。正当防衛は構わんが、峡谷会の挑発に乗ってはいけない。今戦争したら向こうが物量で勝つのは明白だ。つまり私の言いたいことは、『このまま大人しく水やりをしてろ』ってことだ」

「そ、それでいいんですか!」

跳ねっ返りの木村が反発した。

「カルロスの弔い合戦でしょう!」

「男はすぐそうやって山の鹿みたいに跳ねっ返って、そのまま帰って来ねえんだ」

千代は先代の写真を見た。

「山鹿組が全滅する訳にはいかない。これは生存戦略である。こちらから手を出すな。バツジを捨てても、私は捨てない。山鹿の一員と見做すからね」

ウイスキーを飲み切り、黒薔薇は本音を吐いた。

「私は悲しいんだ。……喪に服せ」

4

「少し、妖怪は大きくなったかね」

その夜、皆の帰ったあとの事務所で、サボテンのある窓を見つめながら千代は言った。

その窓には、疲れ切った「黒薔薇」の顔と、その肩の上の妖怪「不老不死」が映っていた。

「……ごめんなさい。カルロスさんを助けられなかった」

シンイチは謝った。不動金縛りの術は、臨、兵、闘、者、皆、陣、烈、在、前の九字の印（それぞれ、獨古印、大金剛輪印、外獅子印、内獅子印、外縛印、内縛印、智拳印、日輪印、隠形印）を詠唱に必要とする。印を結ばず、刀印だけで行う早九字もあるが、それでもカーチェイスのスピードには間に合わなかった。

「お前さんが気に病むことはないよ。スーパーヒーローじゃあるまいし。あんたの仕事は天狗としての妖怪退治だろ?」

「そりゃそうだけど……」

「やくざがやくざと抗争して死んだ。それだけさ。妖怪退治とは関係ない」

「でも元を糺せば、千代さんが妖怪『不老不死』に取り憑かれて、後継者を育てきれなかったことが」

「元を糺しすぎにも程がある」

「……すみません」

「謝んなくていいって言ったろ」

「……はい」

ネムカケが口を開いた。

「シンイチはな、昔目の前で人に死なれたことがあっての」

黒薔薇は妖怪から化け猫へと視線を移す。

「その人も巨大な『心の闇』に取り憑かれておっつてのう。その時のシンイチにはどうしようもなかった。ただの妖怪が見える子供でしかなく、天狗に弟子入りする前じゃったからの。妖怪『弱気』に操られ、目の前で飛び降り自殺するその人を、止められなかった。妖怪のせいだと分かっておっつたのに」

「……そうだったのかい」

千代はシンイチと同じ目線にしゃがみ、彼を抱きしめた。

「そいつは辛かったろうに」

シンイチは、それを克服したつもりだった。だが目の前で人が死なれると、そのことを思い出さずにはいられなくなる。克服など先の話だ。いや、克服して、忘れてしまっただけいけないことだとも考えている。

「……できれば、悲劇は失くしたいんだ」

シンイチは静かに言った。千代は立ち上がって言う。

「仮にカルロスの命がそこで助かったとしよう。しかしまた死神に取り憑かれたように危ない橋を渡った筈だよ。それがカルロスって男であり、やくざの宿命だ。しようがないんだ。私みたいに長生きしてんのがおかしいんだ。やくざは長生きしない。歳取ったやくざは、命を何にも使わなかったってことだ。カルロスは自分の意地を張るのに命を使った。名誉の為だ。それは立派なことだ。私はどうだい？ こんな歳まで死や危険を怖がって、『不老不死』を願っているんだろ？ ……さっきだって山鹿組を残すことばかり考えていた。先代なら『戦争だ馬鹿野郎』って血が沸騰してたかも知れないのに」

写真の中の若き先代、山鹿大は、「すぐに爆発するぞ」を一枚の写真に収めたような顔をしている。リスクを避け、なるべく長く存続しようとする心の闇「不老不死」の目とは、対極的な目だった。

「私ゃあね、もともとやくざなんかじゃなかったのさ」

千代は意外なことを言った。

「えっ！ そうなの？」

「山鹿大という男に惚れちゃっただけの、ただのOLだったのさ。でも惚れちゃったらしようがない。命がけでついていくのが女ってもんだろ」

若き頃の「火の男」、山鹿大はまだ山鹿組の若頭であった。しかし当時の組長、父親の毅たけしのやり方に反対であった。なぜなら山鹿組は薬を仲買し、市中に流していたからだ。

「『薬は人を駄目にこそすれ、良くしない』が口癖だったよ。まるで正義の味方だ」

「えっ、やくざって悪じゃないの？」

「やくざには二種類いる。悪いのをやくざといい、良いのを任侠という。もっともそんなの、今じゃ殆どいなくなっちゃったがね」

「いいやくざなんて言語矛盾じゃん」

「まあお聞き。法律のない時代を考えな。原始時代だ。弱肉強食の世の中、強い者が勝ち、弱い者は死ぬ。そういう世界。縄文時代からずっと続いて、昭和の戦後くらいまではそうだったんだ。なんでもありのそういう世界で、勝つのは誰だと思う？」

「え、一番強い奴でしょ？」

「違うんだな。『一番ずるい奴』さ。人間は人間を騙す事が出来る。正面から喧嘩するより寝首を掻く方が殺せる。だから一番ずるい奴が生き残る。優しくて、正直で、正しい奴はずるい奴に殺される。そんなのはおかしい、つてのが任侠の徒さ」

「そうなの？」

「人々を集めて、何かあった時は協力しようって体勢が、もともとの『組』って意味だろ。世の中には色々ある。柔らかいことから暴力沙汰までね。腕づくで替してくる輩に舐められないように、我々も強い必要がある。ずるい奴から、やさしくて正しい奴らを守る為にね」

「カッケー！ それってヒーローそのものじゃん！」

「でも先々代は薬を街に流した。それは任侠の徒じゃない。やくざでしかないと、先代の大は父親に啖呵を切った」

「へえ」

「『魔王』と」

「魔王？」

「そうさね。俺は魔王を倒す勇者になる、と宣言して、父のシマの薬の売人を次々締めあげていったのさ。父親の方は面白くない。それで父子の全面戦争さ。私はその頃ただの銀行員で、炎の出ている彼に会い、一発で惚れちゃったのさ」

「姫は魔王にさらわれたの？」

「ははは。そんな劇的なことはなく、戦争の結果、勇者は魔王を倒し、無事この王となっただけだね」

「そうなんだ」

「でも病気でコロッと死んじまってねえ。三発腹に銃弾喰らっても生き残って来た勇者が」  
千代は黒いコートを翻しながら、山鹿大を演じた。三発腹に喰らい、それでもドスを振り降ろした。

「で、私が跡を継いで現在に至る。しかし未だ『勇者』に相応しい後継者は現れてくれな  
いって顛末さ。……三人の王子はいた。しかし誰もが小粒で、『勇者』には足りなかった。  
誰もがじっとしていたら、三人目は死んじまったというわけさ」

「そっか……」

千代は再び窓に映った、己の「不老不死」を見た。

「彼らに、成長の時間が欲しい」

妖怪「不老不死」は、その言葉で少し大きくなったように思えた。

「今の『魔王』って峡谷会なんじゃないの？」

「ん？」

「魔王を倒すから勇者なんでしょ？」

「峡谷会なんざ倒す価値もない雑魚キャラだよ。四天王の中でも最弱……」

千代は言いかけて、言葉を止めた。

「どうしたの？」

「……いや、分ったよ」

「何が？」

「分った。お前さんのおかげだ」

「何が？」

「あとで話す」

千代は急いで電話を始めた。峡谷会の会長、鷲尾わしおにだった。

5

木村は荒れた。

おれたちは「山鹿の三銃士」とかつて呼ばれた。切れ者の参謀、長男滝本、頭は弱いが愛嬌のある三男カルロス。そのどちらとも仲が良く、二人をつなぐ接着剤のようであった次男木村。年齢の違う三人は、偉大なる母「黒薔薇ビッグマザー」の下ですこやかに育ってきた筈だ。

「なぜ死んだ！ カルロス！ なぜ！」

木村は荒れに荒れた。

カルロスに女を紹介したのはそもそも木村だった。弟が寂しいというから、つてを辿ったのだ。まさか峡谷会に汚染されるとは予定外だった。木村は兄者として責任を感じた。カルロスはバッジを置いていったという。「俺は山鹿の看板を借りる小さい男ではない」という遺志を、たしかに木村は受け取った。しかし滝本兄ニイは自己責任だと冷たく言い放った。アンタおかしいよ。俺たちに迷惑かけないあいつの配慮に、そんなことなのかい。やくざは舐められたら終わりだ。弔い合戦の用意をしなければならぬ。しかし今の山鹿組の勢力では、本気になった峡谷会に簡単に潰されてしまうだろう。

だが木村には持ち前のつてがあった。兄者と弟をつなぐ接着剤のように、木村には天性の人たらしの才があった。顔の広さでは北九州のやくざで一かも知れない。

木村は、山鹿組よりは規模が劣るが、同じ老舗の灰谷組はいたにと組もうとしていた。「任侠時代からの付き合いじゃねえか、ここで組んで古参の意地を見せましようや」と灰谷組のざわの野澤を、いきつけのバニーガールキャバレー「パラダイス宮殿」に呼び出した。

「はい？」

だが野澤の出してきた要求は、木村の想定外のものであった。

「菓のビジネスと一緒にやるのが条件、てどういうことですかい？」

野澤はテキーラをおおって言う。

「お互い、今の時代に対応しようという事よ。先代の教えを忠実に守ってる場合じゃねえだろうってことさ」

木村は反発する。

「先代の教えを守ってるわけじゃねえですよ。それじゃただのお題目じゃないですか。俺はオレの意志として、人を駄目にするものには手を出さねえんです」

「じゃあ話は決裂だな」

野澤は駆け引きを迫った。

「山鹿組は孤立する。灰谷組だって生き残りに必死だ。峡谷会だってそうさ。みんな必死だろ。シマの取り合いなんて所詮生き残りの戦争だ。サバイバル・フォー・フィittest。アンタんとこのシマは、美味しい領土なんだよ。分ってんのかい？」

「野澤さん、手前の話を、聞いてませんか？」

「聞いてたよ。『交渉の余地はあるか？』と、こっちは譲歩したんだよ。このままじゃ象が蟻を踏みつぶしてお終いになりかねないだろ」

「潰れませんよ」

「じゃあウチらに助けてもらわなくていいんじゃないか？」

「……」

足下を見やがって。そう言おうとしたがグツと飲みこんだ。

「野澤さん、何でもしますよ。菓以外はね。貸し借りでいうなら、ひとつ貸してくんねえか、って話じゃねえですか」

「今度はそっちが交渉かい。流石にその余地はねえ。ウチの要求は一つだ。飲めねえなら決裂」

木村は野澤のテキーラを奪い、一気飲みした。

「話は飲めねえですが、テキーラは飲めます。しょうがない、決裂ですけど、もともとケツは割れております！今日は奢ります。飲みましょう！おい、テキーラ山盛り持って来い！」

「木村さんのケツ踊りが見れるのね！」

「北九州一下品と誉の、ケツ踊りをいたします！」

木村が諸手を挙げると、若手のバニーちゃん達が集まってきた。安い赤とピンクと金色の衣装が、薄暗いキャバレーに花を咲かせた。

テキーラを飲んでからの木村が本当の木村だ。今夜は帰さねえぞと木村は考えた。灰谷組が峡谷会サイドにつかなければ御の字としよう。

「ケツは割れておるのではなく、ひらいてるのであります！」



黒薔薇は再び鷲尾の目を見た。

「大変な決断をなされたな」

鷲尾は天井を仰いだ。合田の驚いた顔のまま、染みがついていた。「なんでじゃあああ  
あ」とでも言っている顔のようだ、と鷲尾は思った。

「覚悟を見せましょう。プラマイのマイナをチャラにしますよ」

黒薔薇はコートを翻し、立ち上がった。

「滝本、木村、前へ」

滝本と木村は、何をされるか分らないまま、立たされた。

黒薔薇は言う。

「今から私は銃を出します。アンタたちには向けませんが、万が一に備えて、組員全員に私  
に銃を向けさせても構わない」

「……何をするつもりだ」

「滝本、裏と表、選びな」

「?……な、なにを言ってるんですか?」

「木村、じゃあお前が選べ」

「……お、表」

「滝本が裏でいいな?」

「は?……は?……」

「いいな」

「……はい」

黒薔薇はゆっくりと懐に手を入れた。峡谷会の組員全てが銃を彼女に向けた。

「まずはコイン」

プラチナ 白金色のコイン。山鹿組直営カジノの一番高いコインだった。美しく光るそれは一枚一

千万相当。一番高いコインを、と千代は饒のつもりで用意した。

運命を、高い音とともに宙に投げた。

天井の合田の顔は、それを再び取った千代の手の中に、裏が取られたか表が握られたか  
見たであろう。黒薔薇は手を開け、コインを改めた。

「表」

直後、電光石火で懐から拳銃を抜き、撃った。

木村修治の額を。

峡谷会が銃で取り囲んでいる中、誰も反応できない早業であった。もつとも、鷲尾が狙  
われたわけではないから、反応しなかったという言い訳もあとで出来る。

木村は吹き飛んだ空中にいる間に、人間から死体になり、事務所の固い床にごとりと倒

れた。

誰も何も言えなかった。かくれみの中のものの中のシンイチも反応できなかった。

「指を詰める代わりだ。これでプラマイの貸し借りなしだ」

「……契りの杯を」

鷲尾だけが、その場で落ち着いて決断した。

7

帰りの車の中。

千代の隣に座らされた、実質の次代筆頭候補——滝本は、一言も発しなかった。

「どうして何も喋らないんだい」

滝本はずっと下を向いている。

「……どうして、木村を撃ったんですか」

ようやく絞り出した言葉は、喉のすぐそばでしか響かない。

「表が出たからだよ。裏が出たらお前を撃っていた」

「どうして……どうして、そんなことをしたんですか。木村は、……木村は、兄弟だった。同じ孤児で、親は違うけど、いや、どっちも親の顔なんて知らないけど、兄弟みたいに育ったんだ。いや、親は組長、あなただと思っていた。木村もだ。カルロスもそう思っていたと思う」

砂漠で遭難した男も、もう少し大きな声を出さだろう。滝本の喉は極限状態だ。

「だからさ」

黒薔薇は冷たく言い放つ。

「だから……撃った？」

「そうさ。お前らが孤児院兄弟ごっこを止めないからさ。私の欲しいのは後継者さ。兄弟ごっこは、いらぬ」

「……私は、今日まであなたを尊敬していました。しかし今日の件で、親ではないと思えてきました」

「ほう。言うね」

「言わせてください」

千代に目を合わせなかった滝本が、初めて千代の目を見た。

「私は先代の山鹿組の方針が好きでした。現代の、真の任侠だと思っていました。しかしもう違う。山鹿組は、山鹿組でなくなってしまった。薬は人を滅ぼす、そう先代は言っていた。なのにどうしてそれを覆すんですか。山鹿組は、北九州を滅ぼすつもりですか」

「……で？」

「で、って、……俺は、俺は、賛成できない。だから、だから……抜けます。ここはもう、

山鹿組じゃない」

「抜ける？ そんなこと、やくざの仁義として、許される筈ないだろう。やくざは一生やくざだ」

「俺はやくざじゃない。任侠だ。もうここは山鹿組じゃない。俺が、俺が本当の山鹿組をつくる！」

滝本は懐から銃を出し、千代の額につけた。

運転手はブレーキを踏もうとし、千代は片手で制した。

千代は左眉だけを吊り上げ、言った。

「何様のつもりだ」

「最後通告です。薬を止めてください」

「断る」

「……俺が山鹿だ！ ここに居る理由は、ない！」

滝本はドアを開け、転がり落ちた。風圧がドアを閉め、滝本の黒いスーツは何度も回転して白く汚れていく。バックミラーに滝本が映った。額から血を流し、割れた眼鏡の奥に、初めて獣の目を見せた。

若獅子。その目だと千代は思った。

「ふっ」

千代は小さく息を吐き、それから大声で笑った。

「あははははははは」

聞いたことのない音量の笑い声だった。こんな小柄の老婆の、どこにそんな力があるのかと思うほどの音量であった。

「あはははははは。あはははははははははは」

ひとしきり笑い終えると、千代は窓にもたれて言った。

「もういいよ。出てきてよ」

助手席に座ったシンイチとネムカケは、かくれみのを脱いだ。

手は不動金縛りの、最後の一字の印で止まっていた。

「こんなにも早く狙い通りになるなんて思っていなかったよ。事務所に帰って、何日かして、それから改めてかなと予測していた」

「……一体どういうことなの？」とシンイチは尋ねる。

「私は所詮女親だったんだ。彼らを護ることしか考えていなかったよ。彼らに足りないのは、男親だったのさ。千尋の谷に突き落とすような、厳しい父親が」

「それって……」

「勇者の誕生に必要なのは、魔王だったのさ」

「あ」

「私は今日から魔王だ。倒しに来い勇者。継げ山鹿大を。永遠の時間など必要ない。魔王

は、倒されるまで生きられればそれで良い」

黒薔薇は芝居がかった魔王の表情をした。

「シンイチ。心の闇ってのは、人の心の弱さだと言ったね？」

「うん」

「私はちっぽけな、弱い女だよ。『黒薔薇』なんて恐れられてるけどね、ほんとには怖くて怖くてしょうがない。ずっと、滝本と木村とカルロスと、三人で仲良くやっていけたらと、そう思ったんだ。庭で花育ててんじゃない。私は男を育てなきゃいけなかったのに、怖くて怖くてしょうがなかったのさ」

「……何が？」

「時計を進めることが」

その瞬間、妖怪「不老不死」は千代の肩からぬるりと滑り、遊離した。

シンイチは不動金縛りの結印、「前」の字を切った。

「不動金縛りの術！」

走行する車内の時が止まった。運転手も、千代も、バックミラーに映る遙か遠くの滝本も、周囲に走る車たちもびたりと時を止めた。ただひとつ、妖怪「不老不死」の蠢きを残して。シンイチはドアを開けた。妖怪は外に出る。広い所に逃げたくなる本能を利用した。天狗の面を被り、朱鞘から黒い刃、小鴉を抜く。

「火よ、在れ！」

これは全ての闇を照らし、全ての闇を焼き尽くす正義の炎である。紅蓮の炎は紅蓮の仮面を照らし出し、同じく妖怪「不老不死」を照らし出す。

シンイチは葉団扇をひと煽ぎし、妖怪の足元を掬った。

ひとつ煽げば天狗風。ふたつ煽げば石つぶて。みつつ煽げば火が燃える。足元の業火に、

「不老不死」は身動きが取れなくなった。

「丹波千代の心の闇、『不老不死』。抛り所なき妖怪よ。心の闇よ、晴れよ！」

天狗は火の粉に飛び込む。

「一刀両断！ ドントハレ！」

水平一直線に横薙ぎし、小鴉の炎は水平に走る。

黒薔薇改め「魔王」、丹波千代の心の闇は、上下に真っ二つとなった。

紅蓮の炎は妖怪を焼き尽くし、炎が去ったあとは清めの塩がばらばらと散った。

「天狗は風の力が有名だけど、一番の力は火なんだ」

事務所に戻ったシンイチは、「魔王」に説明した。

「日本一の大天狗、愛宕あたごえいじゆつたろうぼう栄術太郎坊は、かつて平安の都の大半を焼き尽くす大火事を起こ

した」

「『太郎焼亡』と呼ばれる、安元三年（一一七七）のことじゃ  
ネムカケが補足する。」

「だから太郎坊を祀る京都愛宕山の愛宕神社のお札は『火之要慎』。京都中の竈に貼って  
ある。火を起こす者は、『火伏せ』も出来るからね」

シンイチは天狗の火の舞を踏んだ。

「静岡の秋葉山に棲む秋葉三尺坊は火防神として、江戸から大量にお参りが来たって。そ  
れを江戸に勧請したのが秋葉の原。今の秋葉原」

日本三大火祭りといえば、道祖神祭り、鞍馬の火祭り、那智の火祭りである。それぞれ  
長野県野沢温泉郷、京都府鞍馬山由岐神社、和歌山県熊野那智大社の祭りだ。これらの共  
通項は火と修験道である。野沢温泉郷のすぐ傍には信濃三大霊場のひとつ小菅神社があり、  
鞍馬山、熊野那智も修験の霊場だ。神仏分離令により、修験の行事が大社の権宮司に委ね  
られるようになった現在でも、熊野の権宮司はこのときだけ特別に八咫烏帽を被り、火の  
操作を演じるという。修験者たちは験力を競い、火を伏せる火渡りをする。そして彼らの  
神は不動明王と天狗——火の神だ。

「闇は火に照らされ、火に焼かれる。心の闇が人の心の弱さだとすると、千代さんはそれ  
を認めることで火に照らせたのかも知れない」

千代は話を聞きながら、車内から見た天狗の火を思い出していた。

黒い刃から次々に噴き出してくる炎。それが照らした、己自身の心の闇。

あんなもんか。チンケなものだ。しかしそれがずっと自分自身を苦しめていたのか。

「闇は燃え尽きると、真っ白になるんだねえ」

木村を撃った手を、千代はじっと見ていた。

シンイチは目の前で人が死ぬのに慣れていない。そのことを千代は思い出した。

「シンイチのお陰だよ」

千代は柔らかく言った。

「アンタが『魔王を倒すから勇者』って言わなきゃ、私が魔王になるなんて発想はなかつ  
た。山鹿大は、倒すべき父がいたからこそ勇者になれたんだって、理解出来たよ」

「魔王っていうより、『炎のババア』って感じだったけど」

「炎のババアか。悪くない。『黒薔薇』より振り切っていいね」

銃声が響き、ガラス窓が割れた。

窓際のサポテンが撃ち抜かれていた。その穴から外の風景が覗く。向かいのビルに、走  
り去る滝本の背中がちらりと見えた。

「『男はサポテンを枯らすべき』って話、覚えてやがったな？」

千代は鼻を鳴らした。

「時間はないぞ。どんどん成長しないと北九州が潰滅だ。仲間を増やせ。同志を集めろ。そして私を倒しに来て、山鹿の名を篡奪せよ」

「黒薔薇」改め「魔王」改め「炎のババア」は、割れた窓を震えさせ豪快に笑った。

「紅き貴公子」萬俊介の心の闇「不老不死」は、彼が不老不死を願うほど弾きたがった、世紀の難曲を弾き切ること晴れた。

「炎のババア」丹波千代の心の闇「不老不死」は、彼女が不老不死を願うほど切望した、跡継ぎの誕生によって晴れた。

「つまり……」

東京の自宅に戻ったシンイチは、ネムカケをあやしなから自分の考えを述べた。

「不老不死になってでも叶えたい望みがあったからこそ、この二人に取り憑いた妖怪は、彼らの心臓から抜けたんだよね。望みが叶ったんだからさ。原因と結果は、わかり易く一致している」

「ふむ」

耳の後ろや喉の下を撫でられると猫は弱い。背中をこすりつけたくなってくる。

「二人の心の闇には共通点があった。萬さんは手術をして嘘をついていたこと。千代さんはずっとそのままでもいいかと思っていたこと。二人はその闇を見つめたことで、自分の弱さと向き合った」

「それが解か」

「……分らない。でも小林さんの心の闇も、同じかも知れない」

「心の弱さだど？」

ヒマラヤと北九州での冒険譚を聞き、小林は鼻で笑った。

「そんなスゲエ人たちと一緒にしてんじゃねえよ。片や世紀の難曲の謎を解いた、偉大なピアニスト。片ややくざの鬼組長。人間としての格が違うだろうが」

「でも人の心の構造は同じだと、俺は思う」

「こんな糞みてえなひきこもりのゴミと、セレブ二人が同じとは思えねえよ」

小林は自分のPCをシンイチとネムカケに見せた。

「見ろよ。この祭りを」

「なんだこりゃ」

小林の頭が沢山コピーされて、小林の頭に貼りつく。下手くそなCGがネットに出回っていた。ネタカラーージュだ。沢山の人々が参加してつくっている。阿修羅像に合成したものの。頭を転がして追いかける小林。RPGのボスキャラのてっぺんに合成し、「殺シテ……殺シテ……」とセリフを言わされる小林。悪意のオンパレードだった。連日テレビで見る

「小林自宅前」がファイギュアになっていたし、観光ツアーの架空パンフまで作られている。「セレブだったらこんなことはねえよ。所詮俺はその辺のどうでもいい人なんだ。ネットは正直なもんさ」

「ネットが正直なんじゃなくて、人が正直なだけだよ。言っちゃいけない所で口に蓋するだけで、言いたい放題ならなんでも言っちゃうよ？」

「……それが人の心の闇か」

「そうかもね」

人工知能〈小林〉の精神鑑定の結果は、何度やっても「人」と出た。検事サイドとしては〈小林〉は機械だをしたい。だから何度も鑑定を要求した。このことで世間が反発する。伝統的に「チューリングテスト」と呼ばれる、アラン・チューリングの提唱したテスト法がある（一九五〇）。これは壁の向こうにいる人か人工知能に言語で質問し、言語で答えさせる形式だ。しかし現在の発達した会話型人工知能は、人間から分離出来ないとする主張が主流だ。むしろ、会話の下手な人間のほうをはじめてしまう可能性すらある。子供はどうなるのか？ 知的障害者や、言語障害者は？

「小林さんの望みってさ、抽象的すぎるんだよね」

以前彼が言った「不老不死になってほしいこと」とは、この世の発展の果てを見たいということだ。宇宙の果てのこと。量子力学や大統一理論の完成。人類が生まれてこの方思ってきた、全ての疑問の答えを知りたいこと。

「そんなもん、ギリシャ時代の哲学者でも仏陀でも知らなかったことじゃろうに」  
ネムカケはあきれる。

「じゃ小林さんは『悟り』を得られたらドントハレ？」

「悟りってなんだよ」と小林が突っ込む。ネムカケも反論する。

「何をしたら悟りなのじゃい？ 言葉が循環するぞ」

「うーん、そうだよねえ。『分った！』ってことの言いかえだもんねえ」

これではシンイチ自身が疑問のループにはまってしまふ。わだかまる心のループこそは、心の闇のはじめである。眠り猫ネムカケが想像する。

「弥勒菩薩が現れる五十六億七千万年後まで眠ってても、まだ足りないとか言うかも知れんの、永遠の命から見たら」

キリスト教が言う救いの時。すなわち死んだ者たちが全て墓から復活し、天国へゆく時。あるいはその他の代表的な宗教には、たいていは「遙か未来」にバラ色の救いが約束されている。ユートピア、シャングリラ、約束の地、アセンション。

「そんなの、『幸福の先送り』じゃんか」

シンイチは突っ込んだ。

「シンイチは時々鋭いことを言いおる。ワシは三千年生きて、そんなこと考えたことなかつ

たわ。猫は寝てればおおむね幸福じゃからのう」

「ネムカケ」とは遠野弁で居眠りのことを指す。「猫」も「寝子」から来ているそうだ。ネムカケの好物は、うまいものと無限の居眠りだ。

「そういうば、妖怪とか天狗って不老不死なのか？」

小林が尋ねた。小林の肩に憑いた「不老不死」は、小鴉で斬っても復活したことを思い出した。たいていの物語では、化け猫は永遠の命をもつというが。

「どうじゃろ。わしは猫の途中から化け猫になったが、何歳まで生きるとか知らんのう。退治されたり清めの塩になるくらいだから、妖怪に『命』自体はあるだろうが、ほっといたら永遠に生きるのかも知れんし、ただ丈夫で長命なだけかも知れん。山の王、天狗は不老不死と言われておるが」

「うん。輪廻転生すらしないうっていうね」

人の魂は生まれ変わる、という思想はアジア全般にある考え方だ。日本の場合、源流は仏教の六道輪廻にたどりつく。天道、人道、修羅道、餓鬼道、畜生道、地獄道の六つの世界（六道）を、魂は生まれ変わって巡ると考える。しかし第七に天狗道がある。天狗は不老不死ゆえ、生まれ変わりすらなく、輪廻の輪からはずれ永遠に天狗道にいるという。これを外道と称し、仏道修行者は己の力を我欲のみに使うことを戒めた。「天狗になる」という言葉は、己の力を過信することであるが、その語源は仏道の「天道を目指さず、我欲のみに力を使い、天狗道に堕ちる」という批判からである。織田信長は第六天魔王を自称したが、六天とは六道のことであり、それを超える魔王Ⅱ天狗道の者を意味して、仏教勢力を排除しようとしたのであった。

「人間は、それに比べてすぐ死におる。脆すぎるんじゃ」

「そっちが丈夫すぎるんだろ」

「むむむ。そうとも言える。『不老不死』を望むのも、むべなるかな。妖怪『不老不死』は、人として避けられぬ心の闇かも知れんのう」

「……じゃあ、どうしたらいいんだよう！」

シンイチはほとほと困り果てた。

「そもそもなんで妖怪『心の闇』が、憑き物が落ちるようになるんだよ？」

小林はシンイチに尋ねた。

シンイチは考え、答えた。

「うーん、多分、人の心ってね、一定しないのさ」

「一定しない？」

「たとえば天気みたいなことだよ。雨降ったり晴れたりすんじゃん。それが自然だと思っただ。それが、雨降りっぱなしなのが心の闇」

「ドントハレ、ってそういうこと？」

「うん、多分そういうこと。妖怪『心の闇』は『雨』が好物で、『雨』を増幅して、ずっ

と『雨』にしてしまうんだ」

「カビかよ」

「そうかも。いいたとえだ！」

小林はPCのモニタに反射して映った、自分の心の闇を見つめた。見慣れてくると、自分の顔に似ているかも、という気すらしてきた。

シンイチは原点に戻そうと試みた。

「そもそもさ、いつどうやって取り憑かれたのか、小林さんも萬さんも千代さんも自覚がないんだよね。いつの頃からか異常な渴望で『不老不死』に取り憑かれた感じで」

「そうだな。全く記憶にねえ」

「じゃ、いっちょ覗いてみるか！」

シンイチは腰のひょうたんから金色の遠眼鏡「千里眼」を出した。空間的に遠くを見れば千里眼、時間的に遠くを見れば過去通、未来通だ。

「なんで最初からそれ出さねえんだよ」

「小林さんが思い出すほうがベストだからさ。そもそもこの術難しいんだよ。体力使うし」

東日本で「愛宕の法」とも「飯綱いづなの法」とも知られる、過去通の呪法。後醍醐天皇が傾倒した、邪宗とされた真言立川流に伝わる。元は修験の術であつたらしい。シンイチは愛染明王あいぜんみょうわうと歓喜天かんぎてんの印を切った。

暗闇の奥から、ぼんやりとした像が浮かび上がってくる。

部屋の中で引きこもる小林だ。

「もう肩に妖怪が乗ってるね。今よりは小さいみたい。もうちょっと過去か過去へ。過去へ。千里眼の中は徐々に時を巻き戻してゆく。」

「あ！ 小林さんてスーツ着てたの？」

「昔サラリーマンだったよ」

富山社トミヤマのオフィスが映った。ガラケーで話す小林がいる。

「その時は妖怪はいないぞ？」

「そうなのか。宇童の野郎に虐められてたから、その時に心に闇でも背負ったかと思つたよ」

「虐められてたの？」

「だから恨みがあつて、俺のコピーロボットが殺害したんだろ」

「そっか……あ」

過去の小林が、会社の外の公園に出た所だった。

桜が膨らんでいて、何かが咲きそうな季節だった。そこにたくさんの人が集まっていた。

「桜」

「桜？」

「公園の桜で、人が集まって、たくさん看板が出て、マスクもたくさん来て、輪の中心の子供に……妖怪『不老不死』だ！」

「なんだって？」

「勿論周りの人は妖怪に気づいていない。でもその子をずっと見てる。看板に名前が……」

『川崎礼奈ちゃんを救おう』」

「あ。……心臓病の子か」

小林の説明によれば、当時マスクミで騒がれた七歳の美少女だ。五十万人に一人しか発症しない難病、突発性拘束型心筋症という病で、助かるには心臓移植しかなく、保険の効かないアメリカで手術しなければならぬという。その全費用が二億五千万円。彼女の父親が、涙ながらに募金を訴えていた。仕事を辞めて、募金活動をしているのだと。「究極の売名行為か、美談か」でワイドショーを騒がせたのは、礼奈ちゃんが美人だったからだ、と小林は皮肉っぽい本当のことを言った。

「助けてください！ 礼奈を助けてください！ 彼女に生きる権利をください！」

生きる権利、と聞いて小林は吐き気がしたことを覚えている。その日は、小林がちょうど会社を辞めた日だった。ようやく人間的に生きる権利を得るまで、どれだけ宇童と闘ってきたというのだ。そう自虐的に感じたのだ。

「彼女の肩の上に、もう破裂しそうに大きな『不老不死』が」

彼女がどれだけ生きたいと望んでいたか、その大きさを小林には想像できた。それは小林自身がこの世を捨て、未来へ行きたいと願う、同等の熱量かも知れないわけだ。あんな小さい体で妖怪に侵されていたとは。

彼女はまばたきをしなかった。

ずっと、自分を生かしてくれる人を探していた。お金があれば生きられる。お金さえあれば死ななくて済む。その彼女の思いが、自分のまばたきすら止めていた。集まる人の顔をなるべく見た。そうすると募金が集まることを彼女は知っていたからだ。

シンイチはそのまま辺りを見回し、発見をした。

「その場に、萬さんも、千代さんもいたんだ」

「なんだって？」

萬俊介は、近くの癌センターで精密検査を受け、手術を拒否してでも世紀の難曲を弾き切るべきかどうかを考えていた所だった。

丹波千代は関東に連合の会合があり、桜がきれいなので車を止め、窓を滝本に開けてもらっていた所だった。だが桜など見なかった。ずっと滝本と木村とカルロスのことを考えていた。

この場で、小林と萬と千代だけが自分のことで精一杯で、彼女と一度も目を合わせなかった。

「なんでそんなことが分かる？」

「彼女目線もこの『千里眼』は見えるんだ」

世界はこんなに桜で美しいのに。世界はこんなに募金する人の同情で美しいのに。次の桜を、わたしは見る事ができないかもしれないのに。

礼奈は、その三人のことを強烈に記憶したのだ。

「だからか。彼女の恨みが乗り移ったのか？」

「いや、そうじゃない。だってこの時点で妖怪は三人に取り憑いてないし」

シンイチは時を進め、小林に妖怪が取り憑いた瞬間を捉えた。

「礼奈ちゃん急逝。募金集まり切らず無念」のニュースを、小林が見たときである。

「俺が募金していれば……助かったってのか？」と、その時の小林は呟いていた。少しの後悔が訪れたのだろう。人の心は同情が出来る。人の心は相手のことを考えることが出来る。人の心は、後悔する。

そのとき、扉の隙間からその瘴気を嗅ぎ分けて、妖怪「不老不死」がやってきた。

「礼奈ちゃんに取り憑いた妖怪は、そのまま彼女を死ぬまで吸い続けた。そして……子供を産んだ」

シンイチは時を再び戻し、死の間際の礼奈ちゃんを見つけた。

「妖怪の子供は、目を合わせなかった、強烈に記憶に残る三人を追い、同じニュースで時を同じくして後悔した三人の心の隙間に入り込んだ」

萬は雪山の洞窟を探しているところだった。己の延命を願い、不老不死の心に囚われていた。千代は滝本と木村とカルロスを見ながら、不老不死の大母になることを願っていた。

「ちょっと待て」

と小林は言った。

「俺は『時間が欲しい』とは思ったことねえぞ」

「そうだよ。じゃ、何を望んだの？」

次に答える答えこそが、小林誠の心の闇の芯の部分だ。シンイチは身構えた。

「俺は、……この世から脱出してえって思ったんだ」

「？ ……自殺するってこと？」

「違う。そうじゃねえ。もうこんな詰まらねえ世の中じゃなくて、別の世の中に行きてえって思ったんだ。たとえば、バラ色だと言われる未来に、とかだ」

「……それが不老不死の正体か」

シンイチは、ようやく闇の底にたどり着いた気がした。

「小林さんは不老不死になりたいんじゃない。それは手段で、目的は、この世から脱出して、全然違う未来の世界に行きたいってことなんだ。萬さんや千代さんは、不老不死を使ってこの世のここぞにかしたいって思ってた。だから小林さんの妖怪は、ちょっとビジュアルが違うのか！」

萬や千代は、その目的になっている原因を解決することで心の闇は晴れた。じゃあ小林

の心の闇は？

「なんで脱出したいの？ 宇童さんが嫌だったの？」

「それもある。でも何もかも嫌になったって感じた。でも自殺するのは嫌だ。俺は生きてえんだ。でもこの世の中じゃ嫌だ。どっか他の世界に行きてえ。でも外国は嫌だし、引越しだって人間関係はついて回るだろ」

「じゃどうしたいの？ 仙人みたいに山で一人で生き続けるの？ ……あ、それが引きこもりってわけか」

「現代のネット技術によつて、仙境なるシャングリラが、引きこもりとして実現してしまつたのじゃのう」

ネムカケが独り言でつつこんだ。

「そうだな。俺は『世捨て人』になりたかつたんだ。行方不明になりたかつた。そうなつて、遥か未来に行っちゃまつたかつたんだ」

不老不死。人が死にたくない理由は様々にあるだろう。まだ七歳までしか生きていない。悲願を果たしたい。永遠にこのままでいたい。この世から逃げたいが、死ぬのは嫌だから、永遠に生きたい。

「でもさ」

シンイチは再び子供のような疑問を呈する。この少年の素直な疑問が、たびたび人の凝り固まつた心をほぐすのだ、と長い付き合いのネムカケは知っていた。

「タイムマシンじゃないからさ、未来へ行っちゃつたら、戻ってこれないよね？」

「そうだ」

「誰も知らないんだよね、自分のこと」

「ああ」

「知ってる人はみんな死んじゃつたあとなんだよね。俺とかも」

「ああ」

「寂しくないの？」

「ねえよ」

「じゃお別れの挨拶とかしないの？」

「お別れ？」

「浦島太郎はさ、遥か未来の世界へ行くって知ってたら、村のみんなにお別れを言つてから亀に乗つたと思うんだ」

「そうかね。いねえよ。親に言つたつてなにもねえし、同期と会うつもりもねえ。宇童も死んだ。心残りなんてねえよ」

そう強がった小林が、少しひるんだ。

「ないことは、ないの？」

「……一人だけ、別れを言いたい人はいる」

小雨が降っていた。

山形県の庄内平野に、秋雨がゆっくりと落ちている。雨雲をつきぬけ、すらりと小雨を追い越し、小林とシンイチとネムカケは、一本高下駄で駅前降り立った。

「連絡取らないの？」

「連絡先も何も分らねえ。黙って実家に帰っちゃったんだ。たしか山形、そういつたのを思い出したただけだよ」

「だから誰のこと？」

「うるせえな。さっさと遠眼鏡貸せや。自分で探すから」

小林はシンイチの「千里眼」を奪って、必死で探した。あらゆる方位と距離の果て、千里眼の動きが止まった。

「いた？」

「……いた」

「会いたい」と言っていた癖に、小林はさらにシンイチに頼み事をする。

「かくれみのも、貸してくれよ」

「隠れて会いに行くの？ 駄目だよ！」

「駄目とか、小学生が言ってんじゃねえよ！ ストーカーでもなんでもいいだろうが！」

「いや、雨降ってるから」

「？」

「雨はじくから、そこでバレちゃう」

シンイチは天狗のかくれみを被った。透明は透明になるのだが、雨が空中ではじかれる。跡を辿ると、人の形になってしまふ。かくれみのは「隠形」といって、天狗の姿が消えるのはこの神通力によるものだという。密教の摩利支天まりしてん隠形法によるものとも言われるが、「かくれみの」はその便利版にすぎない。

「ちっ。使えねえな、天狗」

それでも小林はかくれみを被り、「その店」の向かいの軒先に立つことにした。

宝来パン店と看板の出た、パン屋併設の小さな喫茶店だった。そこに勤めているウェイトレスが、彼の目当てのようだった。化粧は薄く、少し疲れた顔をしていた。

「会社の同期で、実家へ帰って結婚したって聞いたし、別に付き合ってた訳でもねえし、別に会って今からどうにかならうと思っただけだし、だから、だから……」

小林は聞いてもいない癖に饒舌にしゃべる。はああん、とシンイチはピンときた。

「好きだったの？」

「ち、ちげーよ！」

小林は顔を真っ赤にして否定した。

「会いにいけばいいじゃん。もう二度と会えないかもしれないよ？」

シンイチはどんと小林を蹴り出した。かくれみのから姿を現した小林は、ガラス窓の向こうの彼女と、目が合ってしまった。

「あ、傘、盗まれて、雨宿りに来て、た、たまたま目に入ったのがここで……」

席について雨を払った小林は、必死に嘘をつこうとした。君に会いに天狗と飛んできた、なんてほんとうのことを言えるわけがない。

「小林君が有名人になって、びっくりしちゃったわよ！ まさか会えるとは！」

彼女は気さくに水とおしぼりとメニューを置く。そう、彼女はいつも「小林君」と呼んでいたと小林は新入社員の四月を思い出していた。四月の研修の間、弁当屋のランチを買って、公園で同期達と食べたっけ。毎日みんなと一緒にだった。そうだ、あの時もあの公園で桜が咲いていた。どうして桜は毎年咲いては、素敵で嫌な思い出を置いていくのか。

「有名人？」

彼女は店の隅のテレビを指さした。

「『人工知能殺人事件』よ！ 暇な仕事だからずっとテレビ見てるのよ！ 同期もいっぱいテレビに出てたよね！ インタビューなんかされちゃってさ。柴田も小川も神谷もモザイクかけられてたけど、すぐ分っちゃった。みんな太ったねえ！」

「……宇童を殺したのは、俺じゃない」

「知ってるよ？ 人工知能コバヤシの方でしょ？」

「うん。……じゃあいいんだ。……コーヒーひとつ」

かくれみの中で会話を聞こうとしたシンイチを、ネムカケはたしなめた。男女のことは小学生には早いじゃろと言い、ここで待っておれと普通の猫のふりをして喫茶店の自動ドアの前に立った。猫はどこでも歓迎される。内側から客が自動ドアを開けてくれる。そうして椅子の上へのぼり、丸まり、人々に可愛がられる。喫茶店の猫は、すべての客の話を聞いている。あなたの話も、まる聞こえかも知れない。

「下村<sup>しもむら</sup>。……話したいんだけど、いい？」

コーヒーを運んできた彼女に、小林は話しかけた。下村と呼ばれた彼女は、ネームプレートを見せた。

「今は平原<sup>ひらほら</sup>の姓ですけどね。懐かしいな。下村でいいよ」

下村<sup>ゆか</sup>優香は向かいの席に座って、茶目つ気たつぷりに微笑んだ。小さな顔がくしゃくしゃに小さくなった。

「どうせさっきの人で、お客さんみんな帰っちゃったし」

ああ。この笑顔が好きだった。小林は様々なことを思い出していた。何も知らない学生上がりの、茶目っ気のあった彼女に戻れたんだと思うと、小林は涙が出てきた。桜の花の下るときとまるで一緒だ。下村さん。短い髪を揺らせて、ころころと笑っていた下村さん。「どうしたの？」

「いや、新入社員研修の頃、急に思い出しちゃってさ」

「懐かしー！ みんな若かったよねー！」

「あのままで行ければ、良かったのに」

小林は遠くを見た。

「宇童部に行きたい、って下村が言わなければ」

「……そうね」

歳を取った顔に、彼女は戻った。

「そんな話をしにきたの？」

冷たい雨は止みそうになかった。とめどもなく。小林の思いのように。

「あのこと」に触れない訳にはいかなかった。

### 3

宇童祐也は富山社トミヤマのやり手の部長で、売り上げナンバーワンを達成する宇童部は、社を牽引していると言っても過言ではなかった。

宇童は部下には強引だが、外には仏の顔の、典型的な内弁慶である。つまりはケツでもなんでも舐めますと多数の仕事を取ってきて、全部部下に徹底的にやらせるのだ。ちょっと資料が欲しいと言われれば、徹夜で百八十ページの詳細な資料をつくらせる。各部員の残業時間は月二百を超え、労基対策に過少申告をさせる。月に何度も飲み会やバーベキュー大会やボウリング大会を催し、部下に仕込みを全部やらせる。顧客とのレクリエーションと称するわけだ。「それは全て仕事と直結している。我々はサービス業なんだ」が宇童の口癖だった。「客は百を求めない。百二十を求めている。我々は百八十を出す」と常々言っていた。

だから他社より多少見積もりが高くても、顧客の信頼を得、宇童部は名実ともにナンバーワンの業績部署であった。

だがそれは、部下達の奴隷労働によって成り立っていた。「宇童部に行くとは壊される」と噂が立った。自衛隊上がりを自慢にしていた斎藤も、心を病んで辞めていった。睡眠時間が二時間と少して二か月働いたからだ。心療内科から「退院」と言われることなく、会社から消えた。残業時間を正確に記録し、「三百十九」を労基に訴えようとした者もいたが、満額の残業代に加え、二か月の休みと二倍の退職金でうやむやにされた。「全ては金で買える。金で売れるのだから」が宇童の信条である。

宇童部は異動が激しい。何人も辞め、何人も人を採る。仕事の入れ替わり立ち替わりと人の入れ替わりは似たようなものだった。取引相手なんて無限にある。全てはめまぐるしく、朝から朝まで、宇童部には嵐が吹いていた。

宇童は女の部下を好む。好色だからという生来の性格もあるが、「女の方が我慢強い」とう信念を持っている。「女は我慢したことを褒められると、自己評価されたと思ひ込む。そして倍我慢する」と宇童はのちに漏らしている。

新入部員の名簿はつまり、宇童好みの女のカタログである。「根性の据わってる女」「M」「ショートカット」が宇童の好みだ。髪の毛長い女は化粧に時間がかかる自分好きだから、「宇童の奴隷」には向かないとした。

ショートカットの新入社員、下村優香は研修後、宇童部配属となった。成り上がりたいたいと宇童部を希望した下村と、一人入れるなら下村だと指名した宇童との両想いであった。

宇童はプライベートと仕事の別をつけない。部下と飲みに行くし、女の部下とセックスをする。宇童部の女は皆宇童の女か、元女だ。

男たちも文句を言わない。それ以上の女を、宇童が合コンであてがうからである。モデル、アイドルの卵、CA、女子アナ。宇童の人脈は広がった。女は男のモチベーション。男の承認が女のモチベーション。宇童はそう考えていた。

下村は配属後間もなく、宇童の女になった。何度も自宅に通い、掃除や食事の世話もした。無論下半身の世話もだ。下村は大人の男とはこういうものだど憧れ、むしろ尊敬すらしていたという。男の同期たちより、下村は大きな仕事を任されるようになる。下村は宇童に認められたと思い、ぞくぞくした。社会人レースの勝者になったと思い、仕事の大きさが自分の大きさだと、勘違いしていた。

大きな仕事で徹夜が続き、体に異変を来すようになる。二十代の若さはどこかに抜けてしまい、無理が効かなくなってきた。そして無限に若い「次の女」が、新入社員として入ってくる。まるでおかわりし続けるわんこそばだ。

何回目かの新入社員が「次の女」になったとき、下村の中の糸がふつりと切れ、会社を辞めることとなった。

小林は、復讐のつもりで宇童部配属を願ひ出た。「あの伏魔殿に何故」と周囲は訝った。誰も何も分らなくていい。小林は、下村優香の復讐のつもりで宇童部に異動した。俺が宇童部を変えてやると考えていた。理由はたったひとつ。「宇童が下村を自分の女にしたのは、深夜に女子トイレでレイプしてからだ」と噂を聞いたからである。

宇童は女好きで、誰彼構わず手を出した。新入社員にも、中途採用にも、掃除のおばちゃんにも。

宇童部の一番若い女と飲みに行き、真相を知らないか尋ねた。

「私も最初は無理矢理でした」と聞き小林は酒を吐いた。

「でも、それだけで仕事回ってくるんですよ？ チョロイもんじゃありませんか」と彼女は

笑った。

「枕営業ですよ。みんなやってることです。それで大金が回るんですよ？ 私は宇童を利用して、上に行くつもりなんです」

下村もそうなのだろうか？と小林は思った。宇童部の地獄を生き抜くには、それ位したたかでない駄目なのだろうか。小林は混乱した。

混乱したまま、日々振られる激務に身を投じ、気づいた時には身体も心も壊されていた。宇童部を辞し、会社を辞した時に思ったことがある。「いちぬけた」だ。

下村も、こんな気持ちだったのだろうか？

「なんだったんだろね、アレ！」

自分も宇童部について、それで会社を辞めたのだと話すと、彼女は意外にもケラケラと笑った。

「若さゆえのブッコミって感じ？ ちょっとでも上に行きたかった、ちょっとでも社会人として一人前になりたかった、あのチキンレースはなんだったんだろう。小っちゃな会社の小っちゃなゲームに過ぎないのにね」

「……下村、何で辞めたの？」

本当のことを聞きたかった。君は、宇童に無理矢理「された」のか？

「なんでだろ。誰でもいいんだなこの人、って思ったからかな」

「誰でも？」

「あの人、穴があったら何でもいいんじゃない？ その度愛して好きになって、責任取って、お金あげてマンション借り上げて、仕事も回すのよ。イタリアのマフィアより律儀」

「その……下村も宇童の女だったって」

「そうよ？」

何も悪びれていないし、後悔もしていない。パリはフランスかい？ に答えるような、平然とした顔だった。

「その時は好きだったし、認められなくて必死だったわよ。周りの女に負けたくもなかったし。でも次々に新しい女が入ってきて、毎年春にトイレ連れてかれるの見てたら、なんか無限ループが馬鹿馬鹿しくなっちゃってさ」

「……知ってたのか？ 新入社員が……その……」

「目瞑ってたら終わるようなもんだし、そのこと自体は沢山ある中の一回にすぎないし。昔つきあった男なんて、もうどうでもいいわよ」

「どうでも……いい？」

「今は今の男の方が大事！」

ああ。そうか。彼女は結婚したんだっけ。幸せになれてよかったなと小林は思った。彼女はスマホの画面を見せた。

「今の男。……息子ちゃんの亮君りょうです。四才！」

「あ……下村が辞めて、そんなになるんだ」

「私にとっては、昔の男が殺されて、びっくりしただけのこと。悲しいとかざまあみろとか全然思わなかった。実家に帰って本屋さんが潰れてたことのほうがショックだったわよ」  
そんなもんか。そんなもんなのか。

「俺……お前の敵討ちのつもりだったのかも知れない」

小林は、誰にも言わなかったことを打ち明けた。

「え？ やったのは、小林君のコピーロボットの方でしょ？」

「うん。でも、俺と同じことを考えてることが、やつと話して分ったんだ」

「どういうこと？」

「何故やったのか、本当のことは誰にも喋ってないって確認し合った」

「……」

「俺は、下村の仇を討ちたいってずっと思ってたんだ。あんなに楽しそうだった下村が、どんどんつらい顔になっていった。だから宇童部に配属を願い出た。でも……宇童に恨みなんかないんだな」

「ごめん。そんなこと頼んだっけ」

「いや。俺が勝手にしたことさ」

だって君が好きだから。

小林はその一言をコーヒーで飲みこんだ。

外はまだ小さな雨が降っている。傘はないが、小林は席を立った。

「俺は直接虐められてもいたからな。宇童が死んでせいせいしたぜ」

「……テレビずっと見ちゃうからさ、宇童さんとこの娘さんも写るんだよね。この子『も』父のいない子になっちゃったのかと思って、可愛そうになっちゃった」

「『も』？」

「あ。今度、離婚するの。色々あってね。だから今の私は亮君一筋」

「……そうか」

小林は、この世から離れてどこか遠くへ行きたいと願っていた。そうではなかった。自分一人が同じ所にいて、下村さんの方がずっと遠くへ行ってしまったと感じていた。

おれ、まだ、卒業式の校門にいる。

突然小林はそう思った。みんな門から出て行って、どこかへ行ってしまったんだ。まだ

おれだけ校門から出ていない。小林は校門から彼女に言った。

「さよなら下村さん」

「なに？ やだ、もう一生会えないみたいな言い方」

そうだ。もう一生会えないんだ。

だから来たんだ。

さようなら下村さん。小林は、もう一度心の中で言った。

都内のラウンジバーに、「鬼剣」戸田が同僚の大宮刑事おみやを呼び出していた。

ここは客が誰もいないので、刑事同士の密談によく使われる。ツケが効くのが戸田に好都合だった。

「詐欺……だって？」

「ああ。そうだ。平たくいうとな。『エターナル・プロジェクト永遠の命』は詐欺だ」

戸田は、鬼の粘りでついに証拠をつかんだのだ。事態がひっくり返る大ごとで、大宮刑事に相談を持ちかけていた。紫煙を切り裂く真実を、戸田は話し始めた。

「エターナルジャパンの後藤。奴がどこまで最初から知っていたかは分らん。所詮雇われの代理人だからな。アメリカ本国のエターナル社に使われているだけだ」

「黒幕はアメリカのエターナル社か」

「黒幕ってたてな、犯人は人工知能なんだから、殺しそのものとは関係ない。エターナル社は別会社に売却計画を進めている。証拠は録音した。これで連邦警察を動かせる」

「……どうということだ？」

「彼らの言うアップロード、つまり脳をスキャンし、データをサーバ上の人工知能にコピーする技術は詐欺じゃない。事実、それによって殺人すら起きた。そしてダウンロード、つまり人工知能の人格データを脳に上書きする技術自体も本物のようだ。そして冷凍技術も。だが穴がひとつだけある。問題は、解凍技術らしい」

「冷凍睡眠から醒めるやつか」

「そうだ。アメリカのアルコー財団には、現在二四九名の冷凍睡眠者クライオノーツが液体窒素の中に眠っているが、今の科学技術では解凍できないんだそうだ」

「は？ ……何だって？ じゃ、彼らは目覚められない？」

「小学校で習ったろ。水ってのは凍ると膨張する。池の氷は増えるんだ。だからそのバーボンの喫水線の上の氷も、溶けたらグラスに収まるんだよ。人間の脳細胞を凍らせると、水分が膨張して神経細胞をブチブチ切っちゃまうそうだ」

「でも金魚を液体窒素で凍らせて溶かしたらまた生きてる、ってのは見たことあるぞ？」

「あれこそ詐欺なんだ。人間の脳細胞ほどには、金魚の脳は複雑じゃないからな。解凍された金魚が、以前のような人格——金魚格か——を持っているかどうか、誰も判断できないだろ」

「……確かに」

「冷凍肉や刺身が不味いのは、この為だそうだけ。冷凍すると組織が壊れるんだ」

「ウチは急速冷凍冷蔵庫にしたぜ」

「急速だったら破壊がマシってだけのことだろ。生肉には冷凍は負ける」

「……確かに」

「エターナル社はこれを知っていて、詐欺を働いた。世界中の成金から一人当たり十億巻きあげてな」

「ちょっと待て。世界中に既に何人も『眠りについた者』<sup>エタニニテイ</sup>がいる筈だろ？ 冷凍殺人じゃねえか」

「それが違うんだ。後藤は『人工知能と喋りますか？』としか小林に言っていない。彼らはまだ小林と同様、テスト睡眠中の人たちだ」

「……じゃテストを何回かやって、いざ本番、つてときに」

「ドロン。眠らせときゃしばらく気づきもしねえだろって計画さ」

「昏睡強盗かよ」

「巧みなのは、アルコー財団に彼らを引き渡す算段をつけてたらしい」

「目覚めることのできない睡眠者一四九名はどうなってるんだ」

「財団は、『彼らを目覚めさせるナノテクノロジーが発達して、膨張した部分をナノ単位で修復する技術が出来れば、目覚めさせることが出来る』と主張している。一四九名はそれに同意したとも」

大宮刑事はグラスの氷を舐めた。小学校の頃、水筒に麦茶いっぱいを凍らせて、爆発させたことを思い出していた。

「……嫌な気分になるな。今は不可能なんだろう？ 将来そうなるかもわからんのだろう？

……まるで緩慢な自殺のようだ」

「実際、末期癌の人たちが多かつたらしいから、それもひとつの終末医療と位置づけることも出来る」

「神の国が待ってる、つて宗教かよ」

「……本当とも、嘘とも、言える。まあ彼らを断罪するのは俺たちの仕事じゃない。だがエターナル社は違う。彼らには、ドロンする計画があった」

戸田はようやくグラスのバーボンに口をつけ、一息ついた。氷は半分溶けていたが、液体の量は変わらない。

「小林のケースが、彼らにとって予想外の事故だったんだ。人工知能が殺人事件を起こしちゃったんだからな。色々明るみに出ちゃった。それだけ人格転送が正確だったんだろう。それが却って奴らの首を絞めたつてのが真相だ」

「……大スキャンダルだな」

「彼らはそうなる前に逃げる予定だった。誰にとっても予想外の出来事が、起こっちゃっただけなのさ」

「『不気味の谷』って聞いたことある？」

シンイチは小林に尋ねた。

東京に戻ってきて、小林が一言も喋らないので、シンイチはこないだ聞いた面白い話をしようとしたのだ。

「CGとかロボットがどんどん人間に近づいてきてるじゃん。最初はカワイイって思うんだってさ。けなげだって。でも段々人間に近くなると、ある瞬間から急に不気味だって思うようになるんだって。愛らしさが急に不気味の谷底に落ち込むのさ。変だよね」

ネムカケも気を使い、この場を盛り上げようと参加する。

「同族嫌悪のようなものかも。自分の領域を犯されるように思うのかも知れん。アニメも可愛いだけならいいけど、リアル過ぎると気持ち悪くなるじゃろ。同じ現象じゃ。CG映画で失敗したのは、リアル過ぎて『不気味の谷』に落ちた作品が多いと言われていて……」

「じゃあ」

小林が答えた。

「『不死の谷』ってのもあるかもな」

「不死の谷？」

「人間だっただんどん寿命が伸びてるだろ。自分より遙か下の時にカワイイって思ってもちょっとずつ寿命伸ばしてきて、生意気で不気味だと思ってるぜ」

「誰が？」

「神様だよ」

「ああ、そっち目線か！」

「人工知能による永遠の命は、神から見ても不気味の谷の底なんじゃねえか？ 『キモイ』」

扱いきさ」

「不老不死の天狗に、今度聞いとくよ！」

「俺は……不死の谷に、落ちようとしているのか？」

小林が黙り込んで、再び深く考え始めた頃、スマホの着信音が鳴った。

戸田刑事だった。重大な話があるという。署に来れないかという相談だった。

「重大な話って？」

「盗聴があるかも知れん。……それ位重大な話だ」

翌日。あまりにも青天の霹靂に、小林は言葉を失う。

「『永遠の命』は、なかった……？」

逮捕拘束以来、月島警察に出向いた小林は、戸田刑事から事の真相を聞かされ、まずその言葉を理解できなかった。戸田は大宮刑事にした話と同じ話をした。池の氷の話。金魚

の話。

「アルコール財団で眠る人々も、もう永遠に目覚めないってこと……?」

「彼らは『遙か未来の技術革新を待つ』と主張している。未来に希望を託すこと自体は犯罪ではないし、それを裁く法律はない」

戸田は囁んで含むように言った。誰が正義なのか、彼にも分らない。だが悪はある。殺人と、詐欺だ。

「……たとえば」

小林は必死に考え、自分の考えを言葉にしてみた。

「俺も冷凍睡眠者クライオスリーパーと同様に、『未来に託す』として、人格を人工知能に移し、いつか目覚めることを選択することは?」

「それ自体は可能かも知れない。エターナル社が今後ずっとサーバを維持でき、かつ、解凍技術を誰かが開発すれば、の話だが」

「うううううううううう」

小林は頭を抱え、震えた。激しく頭皮を掻きむしり、天を仰いだ。

この天井になんて意味はなくて、その先の空を目指していた筈なのに。どうしてだ。どうしてだ。どうして俺は「永遠の命」をクリックしたんだ。

どうして俺は、下村さんに会いに行ったんだろう。

「つまり俺は」

小林は結論だけを繰り返した。

「つまり俺は、永遠の命になれない」

自宅へ戻ると、いつものようにマスコミがフラッシュを焚き、マイクを向けてくる。大きなカメラはいいけど、スマホで撮ってる奴がいるのが少々ムカつく。

「大勝利おめでとうございます!」

「黒幕の後藤氏にひとこと!」

「これで枕を高くして眠れますね!」

大勝利? 俺は何に勝った? 勝手に後藤VS小林にしたのはお前らで、犯人を俺だとしたのもお前らだろ? 潔白が証明された訳でもなんでもない。俺は文字通り寝ていただけなんだ。

そうだ。大事なとき、いつも俺は寝ていた。枕を高くして、寝て、——その先は?

裁判は勝てるだろうと、弁護士との打ち合わせがあった。

裁かれるべきはエターナル社であり、人工知能を逮捕することは出来ないから、責任者の後藤が引責することになるだろう。あるいは、人工知能〈小林〉を人格と認めれば、「死刑」すら可能だ。執行はシャットダウンからのハンマーだろうか。

「ひとつ、聞きたいことが」

「何デシか」

「俺が奴の三日間の記録を見ることは、可能ですか？」

「容疑者に会うことは無理デシ」

「どうしても会いたい。司法取引っていうんだっけ、そういうの」

「……取引？」

6

「これが俺が出る最後の裁判になる」

と小林はシンイチに言った。

「どうしたの？」

小林は答えなかった。

シンイチには何となく予感できた。小林は何か、重大なことを言う。

スーツを着て証言台に立った小林は、それを言葉にした。

「僕は宇童祐也を殺したいと思っていました。計画的に、人工知能を使って、僕が、殺したのです」

当惑のさざ波が小林を中心に広がった。これまで彼は一貫して「殺意はあったかも知れないが、実行はしていない」と主張してきた筈だ。このまま逃げ切れる筈なのに。誰もがそう感じた。

傍聴席の戸田と大宮は思わず立ち上がった。シンイチもネムカケも、かくれみの中で驚いた。

「計画的に、とは？」

検事が尋ねた。

「人工知能は、三日間のテストのあと廃棄される予定だった。それは僕も知っていた。だから、それを利用したんです。まず想像しました。『三日後死ぬとしたら、何がしたい？』ってね。よく言うでしょ、『死ぬ前の最後の食事は何がいいか』って。想像ゲームだ。更に条件をつけ加えよう。『人工知能だから罪は問われなとする』だ。まあ、罪に問うべきか問わざるべきかがこの裁判なんだけど、それはおいといて。俺は俺の心を想像したんだ。『その三日間で何をする？』ってね」

小林は水を飲んで少し落ち着いた。

予想していなかった展開に、場内は固唾を飲む。この言葉の引用を、下村さんはどこかで見るかも知れない。

「バレなきゃ何をしても構わないとしたら？ バレても罪に問われなかったら？ 俺は今からコピーロボットだ。三日後死ぬ。そう想像したんです。だとしたら、殺したい奴が一人いた」

傍聴席には、宇童の妻と、娘の母ちゃんいぢぢが来ていた。「父のいない子」と下村さんは言った。

「だから俺は後藤さんに聞いたんだ。『三日後、人工知能は破棄されるか？』って。それを明らかにする為にだ。その記憶があれば、コピーロボットは俺と同じことを考える。リモート犯罪だ。……殺人教唆っていうんですって、こういうの？」

このことを裁く法律はない。しかし殺人が計画的であり、実行犯と計画犯があり、その証拠があれば殺人罪は成立する。

「……今は反省しています。僕を牢屋に入れて下さい。……本当にすみませんでした」

小林は宇童の妻と娘に頭を下げた。

犯人が現れ、自供した。

ただそれだけのことだった。これならば「通常の」枠内で裁判が可能だ。

「情状酌量を求めます。宇童部の酷さは、証言も記録も残っているでしょう。僕は正義の鉄槌を下したとは思っていない。誰かがやるべきだとは思っていません。だけど、誰にも罪が被らない方法を、僕がたまたま思いついただけです。それで地獄は終わったんだ。しかしそれはやはり罪だと思ったので、ここでこうして告白することにしました。……反省しています」

再び、小林は深く頭を下げた。宇童部の惨状を知っていながら放置していた会社側にも責任がある、と朝香たちが罪の分散を試みた。

「シンイチ、いるんだろ」

小林は小声でシンイチを呼んだ。

「不動金縛りを。俺は牢屋の中からお前を呼べなくなる。最後に話したい」

ゆっくりと、裁判官たちも検事たちも弁護団も時を止めた。また彼らは口角に泡を飛ばしたままで、それが空中で止まったままになった。

「今の話……ホントなの？」

かくれみのから現れたシンイチは小林に尋ねた。

「嘘に決まってんだろ」

「は？」

「真っ赤な嘘だ」

「え、ええええ？ じゃあ何で？」

「誰かがケツ持たなきや、この裁判終わんねえだろ。さっさと刑務所入って、模範囚になっ  
て出てくるよ」

「な……なんでそんなことを？」

「だってこれから何して生きていこうって思って、何も思いつかなかったんだよ。ただ妖  
怪『不老不死』ってのはさ、究極の現状維持でしかねえな、って思ったんだ」

「究極の現状維持」

「前にも後ろにも進めねえ。ただ生きて果てを見る。それが面白いかどうか考えた。つま  
り俺が永遠の命の果て、目覚める所を想像してみたんだ。何が分つただろうか、人類は発  
展したのだろうか。……なんとなくさ、人類が滅びたあとで、誰もいねえんじゃねえかっ  
て思ったのさ。不老不死の天狗と神は、まだそこにいるかも知れねえな。五十六億七千万  
年経っても生きてんだろうな。とにかく、誰もいない荒野で、それ以上生きる天狗と何話  
すか考えたら、何もねえなって」

「……それって、人類が滅んだ時の話でしょ？ 発展するかも知れないし」

「そう。滅ぼうが発展しようが、俺には分らねえ、って思ったのさ。発展を他人任せにし  
て、寝過ごそうってことだからさ」

「他人任せ」

小林は一息つき、「差し入れ」を頼めないかと言った。

「なに？」

「本」

「本？」

「俺、冷凍技術について勉強したいんだ。それに関する本全部くれ」

「？ どういうこと？」

「どっかの他人がコマを進めるのを待っていると、滅びるかも知れねえ。だから俺が進めて  
やるよ。部屋で勉強すんのも刑務所ですんのも一緒だろうと思って、全てが丸く収まる方  
法を思いついたんだ」

「冷凍技術の本ってあるの？」

物知りのネムカケが請け負った。

「ワシがとりあえず五冊くらい見繕ってやる。覚悟せえ」

小林は笑った。

「頼んだぜ」

こうして、長い間小林誠の肩の上にとずっと凝り固まっていた心の闇「不老不死」は、彼  
の肩からばりばりと剥がれ始めた。血が巡り始め、小林の顔に生気が戻ってくる音がする。  
雨雲が、割れようとしている。

「科学を前に進める一員になりたい。たとえば刑期が終わったら、冷凍食品の会社に就職  
できるようになりてえんだ」

「? どういうこと?」

「冷凍チャーハンは、不味いんだよ」

いま、小林の心の黒雲に、ようやく一撃の光が差した。

「魔が差す」と俗に言う。人の心は魔が差すときもあれば、光が差すときもある。魔が差したり光が差したりして、トータルでバランスが取れているだけなのだ。

シンイチは言った。「心の闇に取り憑かれるのは、その人が悪いせいじゃない」と。悪いのは妖怪であり、その人ではないと。何故なら、人の心は悪にもなるが、正義に戻ることも出来るからである。

小林誠は正義であろうか。それは誰にも分らない。偉大なるピアニスト萬俊介や、豪傑丹波千代に比べれば只の庶民で、彼らの大冒険に比べれば、ちっぽけな冒険者にしか過ぎないかも知れない。しかし人の心と人の心を比較することは出来ない。心は誰の目にも見えず、測定も出来ないのだ。小林誠は小林誠の人生の中で、最も大きな決断と冒険をした。ただ、それだけのことだ。

人の心は時々魔が差す。しかし永遠に降る雨などない。心は、再び晴れる力を自ら持っている。

「火よ在れ」

シンイチは炎の色の仮面を被り、炎の色の剣を抜いた。火の使者天狗と成り変わり、全ての闇を燃やす者と成った。

「南無大天狗小天狗。十二天狗有摩那天狗数万騎天狗」

シンイチは天狗経を唱え、八方に結界を張った。小鴉の黒い刃から溢れ出す炎が、正義の色で法廷を染めた。

「一刀両断!」

振りかぶった火の剣は唐竹に、妖怪めがけて下ろされた。

熱風が吹く。

その炎の灯りに照らされて、小林誠は己の心の闇の断末魔を、しかと心に焼き留めた。

「ドントハレ!」

7

小林は取引の約束として、〈小林〉の記憶を見る機会を与えられた。PCに彼の三日間  
が映し出される。これを引き継ぐことで、ようやく〈小林〉は俺とひとつづきになる。

闇の中で目覚めた〈小林〉は、ネットに接続し、ニュースや掲示板を眺めていた。なんだよ、いつもの引きこもりの俺じゃねえか。一通り書き込みをしてネットを荒らし退屈し

た〈小林〉は、ふと自分がネットのどこにでも移動できることに気づいた。

近所のネット。外国の風景。世界の裏側。そうして富山社にたどり着き、侵入し、監視カメラをハッキングした。宇童のコーヒーの習慣と、時計を見ている。

最後にハッキングしたのは、社の名簿サーバであった。昔の社員証の写真が残されていて、下村優香の写真を、しばらく〈小林〉は眺めていた。

「ふん。……いかにも俺がやりそうなことだ」

こうして〈小林〉は小林になり、〈小林〉に取り憑いた妖怪も、砂になって崩れ去っていった。

8

「おう？ シンイチや、『ねじる力』が戻っておるではないか」

ネムカケがシンイチに声をかけた。

「うん。なんかちよつと理解したら、治った」

「理解？」

「天狗は因果をねじる、っていうじゃん。天狗が不老不死なのは、不死の谷に勝手に行つて、輪廻の因果を捻じ曲げてるんじゃないかって思ったのさ」

「何やら深いの」

「そうでもないよ。人の心って、ねじれた因果を元に戻す力があるように思う」

「ひとつのねじれが戻ったら、ねじれが帰ってきたという訳か」

「そうやって、世界はバランスが取れてるのかも知れないね」

あれだけ毎日騒いでいたマスコミは、次の騒ぎネタを見つけ、津波のあとのようにめっちゃくちゃに何かを残したまま、小林の自宅の前を去っていった。

萬俊介の手術は成功したが、転移が見つかった。予断を許さない状況で、彼は息子の為のピアノ教本を作り始めた。雪山で失くした左の手袋に結婚指輪が残されたようで、妻の小夜はひどく俊介に怒ったという。

山鹿組に反旗を翻した「真・山鹿」は、着々と版図を広げ抗争を繰り広げている。山鹿組から次々に人が抜け、真・山鹿に寝返る者が多いという。

下村姓に戻った優香は、宝来パン店を辞め、小さな本屋で働いている。

小林誠は五冊目の研究書を読み始めた所で、同時に論文の検索をし始めた。

その日、まっすぐな青空を、偶然全員が見上げた。

少年と猫の行方は、杳として知れない。